

由良野の森

YURANO NO MORI

ゆらの



創風社出版

由良野の森

YURANO NO MORI

ゆらの





木の高さ調べ（第13回こども森林博士号講座）



会員親睦お餅つき

木を切り倒してみよう（第18回こども森林博士と講座）



マレーズトラップ（昆虫採取のネット式トラップ）



シイタケづくり（第13回こども森林博士号講座）



手打ちうどん



森の中の観察（第16回こども森林博士号講座）



山で生活するトンボ（第1回こども森林博士号講座）



ヒノキ林の手入れ



正月の積雪

由良野の森

目次



序 ゆらぎは由良野へ

玉木芳郎 4

あいさつ

清水秀明 6

第一章 「由良野の森」物語

清水秀明 9

第二章 森の暮らし

..... 31

1 現在地由良野

鷺野 宏 32

2 森につづく道

鷺野陽子 65

第三章 共生林づくりと活用

山本栄治 113

第四章 「由良野の森」に集う人々

..... 155

遊んで育て

清水美保子 156

ようこそ

上本恵里 174

セカンドライフ

久万川重広 177

「由良野と私」(オアシスー由良野)

小倉香代子 179

「由良野の森」へようこそ

甲斐芳子 182

謝辞

..... 195

序

ゆらぎは由良野へ

ゆらぎはすべての始まりです。

宇宙エネルギーのゆらぎは、星々をつくり、星は地球を生みました。

そして四十億年前、始原の生命を創出したと。

生命はゆらぎつつ進化し分化し、私たちのこの地球上にひろがっていききました。

やがて、地球の表面に多様にあふれるいのちの中を、アフリカを出発したヒトが縫い進みはじめ、多くのいのちを食べたり着たり燃やしたりしながら、少しずつ仲間をふやし、ユーラシア大陸の果てに弧をなす島々までやってきました。

島には山々があり、山はゆつくりとかたちを変え、谷の奥には南に向いた緩やかな斜面、各地で由良とか由良野と呼ばれる土砂の堆積ができていました。

人々が谷をのぼり、この地に来て住み着いたのはいつごろでしょうか。

この地を先に占めていた多くのいのちは、少し退いて地面と日光と水の幾分かを人間に譲りました。人々は持つて来た苗を植え、種をまき、連れてきた鶏や家畜を増やしたり減らしたり、この土地の恵みをうけて静かに暮らした時期もあつたようです。今もあちこちに

残る桑の木が、その頃のことを語っています。

やがて、人は自分たちの都合で、里へ町へと谷を下りていき、町から都会に吸い寄せられていきました。由良野に住む人はとても少なくなり、人の手が入らなくなった土地には草木鳥獣が現れ、由良野はほとんど自然に還りました。

なかには、すっかり由良野の自然にとけこんで、ここを離れなかった人も居ました。

今の由良野には、人と自然のいのちが接し、混じり、生きていくゆらぎがあります。人と自然のあわいの、ゆらぎうごくところです。

清水秀明さんが、それに気づきました。清水さんは医者です。自分や他人の命のことを良く知っています。そして、人間の命には、いろんな生き物のいのちの在り様が深くかわっていることも知っていて、みんなにも気づいてほしいと考え、同じように考える仲間の拠点を、この由良野に作りました。

この冊子は、その拠点から発信されます。

いろんな人が、それぞれの目で、由良野のいのちのゆらぎを見つめ、書き記したものです。これはまた、由良野から地球上のすべてのいのちに向けた、呼びかけです。

いのちあるみんな、焼き尽くしたり食い尽くしたりしないで、これからも生きていこう、種のつづくかぎり一緒に生きていこうよ、という呼びかけなのです。

はつめい

由良野の森で活動を始めて五年がたちました。ここで、これまでの活動を振り返り、由良野の森の意義を再確認し、新たな一步を踏み出す糧としたいと思い、この度本書を出版することとなりました。

由良野の森は、自然と人の相互依存、共生関係を自覚した上に成り立っています。分かりやすく言えば、里山とそこで暮らす人の調和したあり方です。この五年間に、広葉樹を中心とした植林活動及びスギ・ヒノキを含む由良野の森の整備、また、「こども森林博士号講座」に代表される体験学習活動を、共生林担当の山本栄治さんがされてきました。そして、由良野の森で自然と共生した生活をし、さまざまな人たちとの出会いの場を提供してきた鷺野宏さん陽子さん夫婦の活動があります。更に、こうした活動を支えて来てくださった多くの方々がおられます。

本書の構成は、第一章を「ゆらの」代表の私、清水が担当し、由良野の森の由来を中心に書いています。第二章では、鷺野宏さん・陽子さんたちが、人の関わりや思いに焦点を

当てた、いわば人間界を中心とした活動を書いてくれ、第三章において山本栄治さんが、自然に焦点をあてた、自然界を中心とした活動を書いてくれています。第四章は由良野の森」に集う人々ということで、これまで関わってきた多くの人が、それぞれの思いを披露してくれています。各章それぞれに温度差のある、多様な思いが覗^{うかが}われると思います。「へー、そうなのか」と思われましたら、どうぞ一度由良野の森に足を運ばれ、実際の場を、空気を体験していただきたいと思います。

ゆらの代表 清水 秀明

第一章

「由良野の森」物語

清水秀明

1 「由良野の森」の構想は、じつじつと始まりました。

放人

ある時と言っても、由良野のことを耳にしたのが平成十四年で、土地購入が翌年ということからすると、今から七年くらい前だったと思われる。たまたま私が階下へ降りてみると、女房がテレビを見ているところで、それを何気なく見てみると、ちょうど牛が木の間から顔を出している場面だった。牛は一頭だけではなく何頭も木立の間に見え隠れして、「牛は牧場の中にいる」という私の持っていたイメージを、下草や灌木が打ち砕いた。牛たちの表情は穏やかで、幸せそうに見えた。その時に、あつ、これだと思った。放牧ではなく、放人。

その頃私は、がん患者さんやその家族の方々の話を聞く機会があり、「生きるとは何か、死ぬこととは」という根本的な問題や、尊厳死、臓器移植などについて、自分なりに考えていた。また、介護保険は既にスタートしていたが、色々問題が出てきた頃でもあった。そうした中で、自分に出来ることは何だろうかと問い続けていた。介護に自分が関わることで果たして、自分を含めた関係する人を幸せにするだろうかと問い続けた時、それは、

私が参加しなくても、多くの人が参加する事で進んでゆくだろう、ということが想像できた。そう考えたのは、高齢化社会によつて全ての人が、介護に関わらざるを得なくなるだろうと思つたからである。

では、「私にとつての社会との関わりは、どうあるのが自分らしいのだろうか」と考え続けていた矢先の、タイムリーなテレビの場面だったとしか言いようがない。私は、自然環境の立場から「由良野の森」を考えたわけではない。人が幸せに生きるにはどうすればいいのかを考え続けた先に、木立の中の牛がいた。

（愛媛新聞四季録より一部改変）

初めに私の体験してきた風景をお伝えしたいと思います。誰しもそうだと思いますが、記憶の中ではどんなことも純化され、印象に残っていることのみがクローズアップされるのは止むを得ません。したがって、これは本当に私の個人的体験の記述ですが、その時代の原風景でもあります。

私は、愛媛県の南予地方の、半農半漁の町で育ちました。宇和島から西海町（現愛南町）にかけて海沿いの町や村は、前が海、直ぐ後ろが段々畑という土地柄です。無論私の幼い頃育つた所もそうでした。子どもたちは、前の海で泳いで遊んだ後、今度は後ろの山で遊びます。私の家は少し坂を上った小高いところにあつたので、家の前にちよつと出ると海が良く見えました。子どもですから、毎日竹林で切つてきた小さな釣竿を持つて、目の前の港の岸壁から「タイゴ」と呼んでいたタイの子どもや、メバルによく似た小さな魚

を釣つて帰つては、味噌汁に入れてもらつて本人は嬉しがつていたのですが、母親には「又釣つてきたんかい」とよく言われたものです。

学校が休みの時は祖父母の里で遊ぶのですが、祖父母の家は海がすぐ近くだったので、その辺りのどの家もそうでしたが台風よけでしょうか、石垣でぐるりを囲つていました。その石垣の直ぐ前の浜に大きな松の木が生えていて、それは見事な枝振りでした。近所の子供たちが大勢集まつて来て、海面近くまで張り出した枝を揺すつて、そこからでんでん飛び込んで遊びます。海は透明度が高く、素潜りでウニや岩に張り付いているアイナメまでよく見えました。潮が引くと、岩伝いに蛸ニナ（貝の一種でその地方の呼び名）をとつたり、アオサをとつたり、遠くまで行つたものです。畑は南予地方特有の段々畑で、高いところにある畑からは、はるか下に青い海が広がっているのが見えます。小学校に入つた頃だったと思いますが、一度その段々畑の高いところから海に向つて紙飛行機を飛ばしたことがあります。白い紙飛行機がスーと、広い青い海に吸い込まれるように飛んでいった光景は今でも鮮明に脳裡に焼きついています。

父の兄弟がたくさんいて、ちやうど十歳くらい違う叔父さんに連れられてメジロ取りに行つたのを覚えています。メジロを捕るのは禁止されていますが、もう時効だと思ふので当時のやり方を言いますと、籠にメジロを入れて鳴かせ、すぐそばの木に鳥モチを塗つてじつと待つのです。メジロが飛んできて近くに止まるとドキドキしました。野生のメジロは、本当にきれいでかわいかったです。夏は、共同の井戸に冷やしておいたスイカを

「釣瓶」で引き上げて、近所の子も一緒に食べたりしました。畑になつてゐる、真つ赤なトマトをそのまま手にとつて食べると、なんとも言えない甘さが口中に広がつて太陽の恵の味がしました。また、神社の境内は蟬時雨の音で耳がつぶれそうなほどのやかましきでした。小さな集落でしたが、田んぼがあつたので秋には稲が黄金色に実り、アキアカネの大群が空を埋め尽くしてゐました。今思うと「あのアキアカネはどこに行つたのだろう」というくらい飛びかつてゐました。海岸近くにはヤマモモの木が茂つており、その実は赤い間は酸っぱいのですが、だんだん黒つぽくなると甘くなつてきて食べられます。ウシノベタと呼んでゐたヤマイチジクも、黒つぽくなるとおいしくなつてこれもよく食べました。イタドリは水車にして遊んだりして、とにかく自然の中でよく遊びました。今思い出しても、子どもだつたので生活の苦しさがなかつたとも言えますが、自然に抱かれていたという表現がぴつたりします。

その頃本当にビックリしたし、今もはつきり覚えてゐる光景があります。私の通つていた小学校から、祖父母の住んでゐたところに通じる山道がありました。ある時、一人でその山道を登つてゐると何か光るものがありました。それが木の枝にいたのか草むらにいたのかはつきり記憶にないのですが、とにかく虹色に光つて、細長い甲羅のような羽を持つてゐました。空の虹がこの虫に現われている、そんな風に感じられ見とれてゐました。今の人なら直ぐ捕まえたでしょうが、恐れ多い感じがしたのを覚えてゐます。この正体が何かその時は無論分からなかつたし、誰にもそのことを言わなかつたのですが、玉虫という名

の昆虫だったということをずっと後になって知りました。法隆寺の玉虫の厨子が、実際の玉虫の羽を東南アジアからたくさん集めて模写されたとの報道が先般ありましたが、何か不思議な気持ちがあります。

小学校の三年生の時、親の転勤で松山に出てきました。小学校卒業の時の作文に、田舎で育って遊んだことや色々な記憶にある風景のことを書き結んだのを覚えています。松山も、当時は畑や田んぼがそここにあり、遊ぶところも十分にありましたが、それでもなお田舎の山と澄んだ海が子供心に焼きついていたのでしょう。中学、高校と進学するにつれ、また、色々な体験を重ねるうちに、いつしか子どもの時の、自然に抱かれていた気持ちには薄れていきましたが、決して忘れることはありませんでした。

大学に進学して、最初は工学部の原子力工学科に進みましたが、途中病気をしたこと、医学の道に進路変更しました。私の歩いてきた道がある意味「由良野の森」誕生に結びついていきますので、なぜ医学の道に進むことになったのか、医学の道で何を考えたか、そのあたりのアヤを四季録より引用します。

道 I

私は、最初から医者になろうと思ったわけではない。高校生の頃は、何に自分が向いて

いるか分からなかった。数学が比較的好きだったが、それ以上に社会とかも好きだったので、理科系・文科系に当てはまらない人間と自分で思っていた。しかし、「いい加減進路を決める」と担任の池田三男先生に職員室へ呼ばれたので、これはいかんと思い、原子力工学科に行くことに急遽決めた。物理はどちらかというと、自分には苦手と言ってもいい科目だったのに、なぜかそうすることにした。

大学に入学してみると、ちょうど学生運動が盛んになってきた頃で、入学早々「自分とは」とか、「生きるとは何か」の洗礼である。私自身は、角材を持って人を力で威圧したり傷つけたりすることは、本来の人の姿ではないと思っていたし、主義主張のあるセクト（教派）に入って行動するのも自分に合わないと思っていたので、こうした運動には参加しなかったが、自分を問うのに傍観者ではなかった。

グライダー部に入ったものの、毎日が大学の周囲のランニングである。空を飛ぶためには、走らなくてはいけない。なぜかというところ、グライダーには車輪がないので、滑空して降りてくるグライダーの翼をつかまえて併走し、止まるまで走り続けなければならないからである。そうしないと倒れてしまうのである。

二年生の秋頃だったと思う。ある時走っていて急に胸に痛みを感じたが、しばらくすると消えたので、知らん振りをすることにした。その後も、時に胸に痛みを感じることや背中の中の痛いこともあったけれど、筋肉痛だろうと自分で思い込むようにしていた。

ところがある日、電車に乗っていて、突然の痛みと呼吸困難が襲ってきた。とにかく苦

しくて、思わずしやがみこんでしまった。周りの人たちは何だろうと見ていても、なんとなく遠巻きにしているだけである。電車が止まったので、どうにか駅前の病院に駆け込んだ。先生は私を診察してくれて、「すぐに入院しなさい。大学病院に紹介状を書くから」と言われた。痛みを放つていたためにこうなったという後悔の気持ちと、これからどうなるんだらうという不安が交錯した。

道 II

胸痛での入院後の続きである。大学病院は教育機関でもあり、臨床実習の症例提示のために、私も何度か出てくれないかと頼まれた。臨床実習の学生さんを前にして先生が、「この病気は、やせて細長い体型の人に多い」と言うのを聞き、私は当時痩せていたので、この病気は何という病気だろうと考えたのを思い出す。

病気自体は、自然気胸という何の変哲もないものだったが、当時の私は、変な病気ではないだろうか、治らないのではないかと、あれこれ思い必死だった。肺の両側にブラ（気腫性嚢胞^{のう}）があるので、手術は両側した方が再発しにくいと言われ、「両側か嫌だな」と思ったけれど、再発しにくいという言葉に引かれ、最初気胸を起こした側、半年後反対側を手術することに同意した。

手術は、脇を切開する新しいやり方だった。病棟担当医が術後の肺の標本を持って来

て、ブドウの房状のブラを教えてくれたが、見たくはなかった。肺の手術後は呼吸のたびに痛みが走り、なかなか術後の状態に慣れなかった。まだ十分に痛みも気持ちも回復しない状態で、反対側の手術を受けた。当時私が若かったこともあり、先生の言われることには、なかなか嫌ですとは言いにくかったのを覚えている。

専門学部に進んだものの、基本となる量子力学にはお手上げで、その他の科目も全く理解できなかった。なんとか卒業にこぎつけたが、体力に自信がなかったのと、自分の病気のこともあり、主治医の先生に医学の道に進みたいと相談した。しかし先生には「やめたほうがいい」と言われ、原子力の講座の先生にも、「就職したいところを言え。何とかするから」と言われた。ところがこれまでの自分を振り返ってみると、選択肢があるときはいつも、必ず、しんどそうな、一見損に見える道を選んでいるので不思議だ。このときも、先生方の忠告や好意に逆らって、自分の思う道を選んでいる。

その後医学の道に進み、これはこれで、さまざまな経験をしてきた。いまだに病気の意味は分からないながら、病気については多少とも知識を積み重ねてきたと思う。ただ、「いつも今が最善の道であり、今の道こそ自分の心の表れ」ということを忘れてはならない、と自分に言い聞かせている。

（愛媛新聞四季録より）

医学の道を歩みながら、人の生死に寄り添いながら、生きるとは何か、病とは、自分は何者だろうと問い続けながらの毎日でした。それが、テレビの、牛が木立の間から顔を出

す場面につながってゆきます。自分の中で問題を持つて歩いてゆき、それを暖め続けてゆくと、ある時突然視界が開けるという体験をこの時にしました。分かりきったことですが、人は亡くなる時、体験してきたことだけが自分と共にあり、それ以外は何も持つて逝けません。どんなに素晴らしい高価なものを持つていても、どこまでも自分と共にあるわけではありません。体験し、感じ、考え、自分の心に刻まれたことのみが自分と共にあります。われわれは、自らの体験に、もつともつと重きを置かねばならないのではないのでしょうか。

2 「由良野の森」——人と自然の共生の場を求めて

テレビを見て、あつこれだと思いましたが、いざ具体的にどうするかといっても思いつきません。どこかに適当な土地でもあればと思いましたが、それもどうやって見つけたらよいかも分かりません。ただ漠然とですが、自分たちの友だちである木地師の甲斐さんがいる久万（現久万高原町）がいいのではと思った時、ある方に聞いてみたらと女房がアドバイスしてくれました。歩く観世音菩薩と私が命名しております女房は、常に人の言うことに耳を傾け的確なアドバイスをするのですが、この時も時宜に合ったご託宣をしてくれ

ました。この方は大野さんといわれる久万の方で、「私が聞いてあげましょう」と適当な土地がないか聞いて下さり、久万高原町の二名に競売の土地があるということが分かりました。

ある程度の広さの土地があるのは分かりましたので、その土地を甲斐さんが知っているか訊ねてみました。甲斐さんは「多分あの土地のことだろうと思う。そこなら以前私が小田から久万に来るとき土地を探して、欲しかったところだよ」と言われました。そこで、土地の方は良さそうだということが分かりました。そこは、農協の所有している土地で、所有者も問題がないことも分かりました。要は、土地のおよその値段です。これが全く分かりません。競売というのは初めての経験でしたが、

各自が思う値段を書いて入札し、一番高い値段を

つけた人のものになるというやり方で行なわれるようで、その方法は分かりましたが、どの

くらいの値段をつければよいかが見当がつきません。

売主が一度土地を案内しますというので、案内してもらいました。その時に、売主の理事の方に、いくらくらいの値段を付けたらよいのか聞いてみました。今になってみれば



それも可笑しなもので、売ろうとする相手にどのくらいの値をつければ良いか聞くのですから。しかし、案内してもらった土地は素晴らしく、要するに牛が木立から顔を出すのに最適な、緩やかな傾斜の南向きの土地でした。その時までには、三町歩半（約三万五千平方メートル）という土地の広さも、正確な場所も分かっていましたし、由良野^{ゆらの}という名前がなんとなく良い響きがあるのを感じていました。

売主に土地を案内してもらった時、農協の事務所に隣接する父二峰診療所に、元県立中央病院院長で外科の玉木先生が赴任しておられるのを知っていましたのでご挨拶に参りました。玉木先生には、私が内科の駆け出しの医者だった頃、県病院でお世話になったことがあったからです。先生に競売の土地のことを言いますと、「ぜひ買って松を植えて欲しい」と言われました。私は先生に、「もしも買えたら先生が自由に植えてください」と言いましたが、その時は迂闊にも、先生がキノコ観察会のメンバーで、キノコの研究を思う存分するため、ある意味この地にやって来たとは露ほども思い至りませんでした。

いつ入札するかの日時も決まりましたので、それまでの情報と色んなことを総合して、自分なりに大体の値段を考えました。値段を考えたといっても、てんぼなもので、精々売主から聞いた値段が参考になるという程度のもんです。自分で競売になっている他の山の物件を調べるとか、もう少し他の人の話を聞くとかすれば良さそうなもののに、そういう事をしなかったのですからどうにも仕様がありません。

そうこうしている内に入札の日を迎えました。後悔の無いように値段を考えましたが、

なんとなく落ち着きません。仕事が終わって久万に上がったのですが、定刻の二時ちょうどで、私が一番最後でした。めいめいが書いた値段が開封され、読み上げられて、とにかく、入札の結果、その土地は私が買うことに決まりほつとしたのを覚えております。まあ今にして思えば、入札というような駆け引きは、自分には全く不向きだということを再認識したようなものでしたが、逆に、これまで体験したことが無い事を経験したとも言えます。

実は、一般の人が山林や農地という土地を買うのは簡単ではありません。農業をしない人は農地は買えません。私は山に木を植えるのが一つの目的でしたから山林は問題ありませんでしたが、土地の購入が正当かどうか審議する農業委員会というのがあることも、今回初めて知りました。要するに買ってすぐ自由にできるというのではなく、数ヶ月の審議を経て可能になるというわけです。

何とか競売で土地を買うことが出来ましたが、次は実際にどうやるかという問題が出てきます。自分は、今植わっている桑を切り払って新たな広葉樹を植える術すべを持ちませんし、一人でやってゆくには大きすぎる広さです。

3 「由良野の森」の始動

人と自然の共生の場、由良野の森の場のほうは揃いましたが、人のほうをどうするかという大問題が残っていました。しかし、物事を真剣に始めると、向こうから必要な出来事がやってくるという体験をさせてもらいました。由良野の森に住み実際そこで自然と共生する人と、自然のことに詳しい人との出会いが待っていたのです。鷺野さん夫婦と、山本栄治さんとの出会いです。

鷺野さんたちとは、もう十年以上も前になってしまった阪神大震災からの知り合いです。したがって正確には再会です。鷺野宏さんは、「神戸元氣村」を主宰していた山田バウさんのもとでボランティア活動を熱心にされていました。私たち夫婦も、神戸で被災したホームの方々を受け入れた、平野博昭さんが代表の「松山ユースホステル」で、ホームに入所していた人たちを診させていただく機会があり、当時からつながりはありました。その後、彼らは西表島に住むことになり、鷺野陽子さんが西表島在住の染織家石垣昭子さんの弟子になるのですが、由良野の森の土地購入が決まる頃に、私の女房が、久万高原町父野川在住の木地師甲斐義孝さん夫婦と一緒に西表島に出かける機会があり、鷺野さんたちを説得して「由良野の森」に迎えることになりました。同じ頃、甲斐さん宅で山本栄治

さんに会いました。その辺りの描写を四季録から一部改変して引用します。

出会い

チン道中三人組（甲斐さん夫婦と女房のこと）の西表島訪問の際に、女房が、鷺野宏さん（現由良野の森管理者）たちに今後のことをたずねた。そこで鷺野さんたちは、両親のこと、生活や子供の教育のことについて不安があること、また、そろそろ帰って、西表で習得した染めや織りを広めたいという気持ちもあることを率直に話してくれた。それを聞いて女房は、私たちが由良野に土地を得たこと、そしてそこで自然と人の共生の場を作りたいので、一緒にやるつもりがないかを聞いてみた。鷺野さん夫婦は本人たちで色々考え、また、師事している染織家の石垣昭子さんから「自分の島のことも大切に」と言われたこともあり、結局久万高原町に帰ることを決めた。

時期を同じくして、本当に不思議なのだが、甲斐さんのところで山本栄治さんにお会いした。甲斐芳子さんから山本さんのことは、「動植物に詳しく、こつこつ自分で研究して、旧小田町の事業で『小田深山の自然』という本のとりまとめをした、すごい人なのよ」と聞いていたので、どんな人だろうかと思っていた。会ってみると、トトロ（宮崎駿監督の映画「隣のトトロ」のキャラクター）そっくりだった。以前から聞いていたのになかなか会う機会がなくて、こうして会ったということは、「山のことは山本栄治さんに任せな

いということなんだ」と確信した。そこで私は自分の思っていることを話し、快諾してもらった。そして『小田深山の自然』という本を読んでもみると、実にこれが本格的な学術書なのである。開発で本来の自然が消えつつあるのを惜しみ、記録を残しておきたいという趣旨でつくられたもので、各分野の先生方に原稿を依頼してまとめるのが大変だったらしい。

一度山本さんの研究所にお邪魔して標本を見せていただいたが、膨大なものだった。本当に、虫眼鏡でやっと見えるような小さな標本に、小さな文字がきちんとタイプしてあって、それにも感心したのを覚えている。「皆、チョウやトンボのような、大きくて目立つものをやりたがるけど場所を塞ぐので、小さなものを相手にするんよ」と話す言葉から、栄治さんの小さな生き物に注ぐ愛情を感じた。

こうして由良野の森の共生林担当の山本栄治さんと、人間界のコミュニケーションをとる、由良野の森を管理する鷺野宏・陽子さん夫婦の協力を得ることができ、ここで場と人が揃ったということになります。

4 活動のための会「ゆらの」をつくり、ゆらの債を募る

正式に土地を取得したのが平成十五年で、その後有志が集まって「由良野の森」で活動するための会をつくりました。ただし、「ゆらの」という名称はまだついていませんでした。平成十五年は、桑畑の整備に明け暮れました。栄治さんは大変だったと思います。そして、平成十六年冬から平成十七年春に隣接する土地の取得の話がもちあがりましてので、平成十七年二月十一日有志が集まり協議しました。そこで由良野の森にとって重要なことが決まりました。

一、会の名称を正式に「ゆらの」とし、活動の場を「由良野の森」とする。

二、会員募集をする。里山を育て、共生の場を体験するという意味の募集で、会費の徴収を含む。

三、会の構成役員は、代表…清水秀明、

理事…甲斐義孝、甲斐芳子、清水美保子、鷺野陽子、

会計…福水一光、監事…宮内一、福水初枝、

「由良野の森」管理者…鷺野宏、共生林担当者…山本栄治とする。

四、事務局は鷺野宏が担当。

五、隣接する土地取得のため、「ゆらの債」を発行する。

土地取得のため、五年間無利子無担保の「ゆらの債」を発行してその弁済に当てること

にしました。「ゆらの債」発行のヒントは、岐阜在住の神父である大郷博さんの「あぶらむ債」にあります。大郷さんのアドバイスには感謝してもしきれないものがあります。また、七名の方がゆらの債を買ってください、本当にありがたく思いました。二神瑞晋さん、福水一光さん、鶴見哲也さん、土井内純治さん、山下治彦さん、中野礼子さん、泉範幸さん、以上の方々にこの場を借りて御礼を申し上げます。人の縁というものは、どこでどう関わってくるか分かりません。だからこそ、いかなる場面でも謙虚に誠実に物事に当たらなければいけないということを、改めて教えていただきました。平成十七年春に、約十二町歩（約十二万平方メートル）の土地を「ゆらの」は所有することになりました。

5 ゲストハウスの建設

人と自然の共生の場「由良野の森」にとって、人の集まる場所がどうしても必要なので、土地の整備、植林と平行して、平成十六年春よりゲストハウスの建築に取り組みました。ゲストハウスという名称は、どうぞ由良野の森に来て体験してくださいという、由良野の森に来る人に視点を置いた名称です。鷺野さんは、西表島に往く前に、大工の勝本さ

んのところで見習いをしていました。西表島では、色々な大工仕事を手伝ってきいたので、鷺野さんと勝本さんにお任せしました。ただ、基礎と設計図は大興建設の大西さんに頼みました。

ゲストハウスの地鎮祭の時は不思議でした。神主さんに地鎮祭の日取りを決めていたのですが、あいにくその日は朝から雨で地鎮祭ができるか心配しました。ところが、ちょうど地鎮祭の間だけ雨が止んでくれて、地鎮祭が終わるとまた雨が降りだしたのです。自然は不思議ですが、「不思議を起こすのは人の純粋な思いかもしれない」とその時しみじみ思いました。

棟上が梅雨にあたり、この時も雨の心配をしたのですがこちらも問題なく終わり、後は鷺野さんと勝本さんが素晴らしい仕事をしてくれました。

私は広さだけ言つて、間取りや建物の構造は鷺野さんが考えたのですが、よく勉強されていると感心しました。塗料も害のない、あまり臭いもきつくないもので、外壁を塗る手伝いの時にも嫌な感じがまったくありませんでした。ゲストハウスにテーブルが三つあるのですが、それぞれ材が違います。楓^{カエデ}、塩^{シオ}地、栗材の三種類です。いずれも、木地師の甲斐義裕さんが父親の義孝さんと一緒に作ってくれ、どんぐりや木の葉の象^{ぞう}嵌^{がん}がなんともいえない、いい味を醸^かし出しています。

平成十七年春にはほぼ完成し、四月に奈良裕之さんのライブコンサートをゲストハウスで行ないました。世界の民族楽器を演奏してくださり、特にアメリカインディアンの楽器

を参考にした弓状のものは格別面白く、ゆっくり振るとブーン、ブーンと低い音で鳴るのですが、少しずつ速めるとビュン、ビュンという音に変わります。その変化が楽しかったです。また、参加者に楽器を触らせて音を出させてくれたので、体験する場のスタートとして本当に最高だったと思います。

平成十七年六月に、西表島から石垣昭子さんと星公望さんが由良野の森に来てくれました。石垣さんは、鷺野陽子さんの染織の師匠で、西表のさまざまな素材を用いて素晴らしい作品を生み出されてきた方です。また、星さんは実際の生活の場で使える手作りの草木細工をされ、由良野の森で指導してくださいました。二人は、「愛・地球博」の帰りに寄ってくれたのです。

平成十七年七月十七日にゲストハウスの開所式を正式に行ないました。代表の私がこれまでの流れを説明した後、島根在住の笛の演奏者、樋野達夫氏に色々な笛の音の演奏をしていただきました。弥生の笛や縄文の石笛は、とりわけゲストハウスによく響きました。

6 植林

平成十五年に土地を三町歩半（約三万五千平方メートル）取得し、その後、桑畑を掘り

起こし広葉樹を植えるために整備し、少しずつ木を植えてゆきましたが、平成十六年三月に、多くの人が参加して下さりドングリのなる木（アラカシ、コナラ、クヌギなど）を中心に五百本植えました。由良野の森を町道が横切っているのですが、そこから少し上った見晴らしの良い南向きの斜面の場所の桑を切って、植林しました。二名小学校（当時）の生徒、父兄、先生方の参加も得て盛況でした。

翌平成十七年にも同じ場所の西側に五百本、ドングリのなる木を植えました。この時も多くの人の参加があり、ありがたかったです。桜五十本と梅五十本も、由良野の森の道沿いに植えました。将来が楽しみです。

共生林担当の山本栄治さんは、その後も適宜、植林及び木の手入れにと、里山の整備に余念がありません。

山本栄治さんは、動植物に詳しく、由良野の森で自然との触れ合いを中心とした「こども森林博士号講座」を開かれています。由良野の森にとって最適の方を迎えたと思っています。

また、鷺野宏さんはこの地で実際に生活をしながら、管理者としてフルに活動されており、由良野の森を訪れる人にホッとする空間を紡ぎ出しています。奥さんの陽子さんも染織工房の整備が進めば、子育てをしながら染織の活動に本腰を入れられると思います。

私は、「由良野の森」の由来を紹介するのが役目ですので、以上で「由良野の森」誕生までと、初期の大まかな活動の経過を述べることができたと思います。平成十八年十月より平成十九年三月まで愛媛新聞四季録に「ゆらの物語」を連載させていただきました。本書と重なる部分がありますが、参考にしてくださると幸甚です。

第二章

森の暮らし

鷺野 宏
鷺野 陽子

1 現在地由良野

鷺野 宏

はじめに

幼少期

私は松山で生まれ育ちました。一歳の時から住んでいた家の真正面には少年院（現在は松山学園）があります。「悪いことしよったら、ここに入るんよ」と言われた所は、幼少期からの遊び場でした。広い敷地にはたくさん桜があり、蟬をたくさん捕まえました。果樹園にはみかんやレモンがあり、青い実を勝手にとって地面やブロック塀にこすりつけ、香りを楽しみました。豚舎には豚の親子がいて、何時間見ても飽きませんでした。池には大きなナマズがいて、捕まえて遊ぶのは楽しみでした。春には大きな野球のグラウンドに一人で行って、土筆を帽子いっぱい取って帰る幼稚園児でした。幼稚園の通園は

楽しみで、途中の小母さんの家に毎日寄っては、氷砂糖をもらうと、それを食べながら幼稚園に行っていました。もう家の場所も覚えていませんが、小母さんは、私ともう一人の友達が立ち寄るのを、毎朝楽しみにしていてくれたのを思い出します。帰り道のサクランボや野イチゴも楽しみでした。カバンの中身を全部放り出してアマガエルをいっぱい持つて帰ったこともあります。あの頃の毎日は、大人の干渉や習い事、やらなければいけないことが無く、周辺の自然と遊べる豊かで自由な日々でした。

小学生の間も遊んでばかりの毎日で、勉強をした記憶はほとんどありません。放課後も学校の運動場で下校時間ぎりぎりまで遊び、帰宅後も周りが見えなくなるまで近所の友達と遊びました。幾つかあつた溜め池や沼では、うどんを付けてフナを釣ったり、いかだを作つて沼渡りをしながらザリガニを釣り、用水路ではタナゴを捕まえて遊びました。

そんな遊びをしながら、よく白昼夢を見ていました。現実と空想の境界はともて曖昧で、いろんな生き物の行動も、飽きもせず何時間でも観察しました。どちらも息をするのも忘れるくらい集中したし、心は穏やかでした。

十歳位の頃から急速に、家の周辺の状況が変わっていきました。木造の市営住宅が取り壊され、コンクリート造に変わっていきました、同時に近所に住んでいた友達やガキ大将は、家族と一緒にどこかに引っ越していきました。自宅周辺の空き地は、どんどん無くなつていき、みんなの秘密基地も壊されました。溜め池や沼は埋め立てられ、高校が建ち、大きな住宅地ができました。木造だった少年院もコンクリート造の立派なもの

に建て替えられ整備されました。長い間近所では工事が続き、地中に大きな杭を打ち込む振動と音で家は揺れました。学校の友達も多くは学習塾に通うようになり、少年の行き場はテレビの前とゲームセンターになりました。

その頃、私の通知表には毎回「注意力が散漫」と書かれていました。テレビによって穏やかだった空想の世界は違ったものになっていったのでしょうか。ゲームセンターは興奮とストレスを生みます。変化に抵抗していたのかもしれませんが、「注意力が散漫」な少年はこの頃から型に填められようとする、すぐに逃げ出す人になっていきました。「自分に選択の自由・考える自由の無い団体行動」は特にだめでした。目立ちたいという訳では無いのですが、なぜか皆と同じことをすることに抵抗を感じるので。今なら、「急激に変化していく環境に、自分の根っこを犯されて動揺し混乱している」と説明できたかも知れませんが。小学生のあの時期、先生の「注意力が散漫」という評価はちょうど良い表現だったかもしれません。

思春期のころ

中学生になると、矛盾を感じないことや、納得がいくこと、純粹な想いや尊敬できる人に出会うと極端に引き寄せられました。同級生と同じように、背伸びして悪ぶっていたこともありました。人間関係は全くうまくいかず、いじめにあいました。ことは日ごと

心の中で重くのしかかり、この世を去ろうかと思いつめていた時、担任の先生が「はじめは絶対許さない。命を懸けてこいつを守る」とクラス全員に発言されました、その瞬間から私へのいじめはあつてなく無くなりました。両親以外の、尊敬できる大人にはじめて出会ったのですが、あつてなきはかえって人間不信を生み、その後二十年近く悩むことになります。

高校生時代の少林寺拳法部の顧問は、生きる道を、自身の生き様で教えてくれました。二人の尊敬できる大人は、この時期の私に自信と勇気を与えてくれました。

青年期

学生時代には長い休みを利用してカナダやオーストラリアに旅をしました。そのときの体験や、そこで出会った人達、そして自然や文化は今まで自分が認識していた常識や価値観を大きく打ち壊してしまいました。大きな衝撃でした。卒業後、二年半ほど会社勤めをした時期もありますが、二十代半ばからは仕事をしながら北米大陸を旅しました。外国人でいるほうが生きやすいとも感じました。様々な文化を持つ移民の国で出会ったひとや出来事は、自分の生まれ育った日本、文化、自然、歴史、環境の問題に目を向けさせることになりました。インドに行ったのもこの頃のことです。

同じ頃、祖父の入院手術の付き添いを経験しました。簡単な白内障手術でした。しか

し、すぐに退院できるはずの入院で彼の人生は大きく変わりました。術後の夜付き添いをしていたとき、祖父は「おしっこが出ない」とパニックになりました。医者は呼ばれず、看護婦はなぜか点滴の量を増やし、バルーンの挿入にも失敗し、翌朝まで何も処置されませんでした。祖父は夜中眠れず、パニックは続きました。次の日急いで泌尿器科に連れて行くと、処置を受けた祖父は泥のように眠りました。前立腺肥大によるものと診断されましたが、目が覚めた時にはかなりの認知症になっていました。あの聡明で何でも知っていた祖父が一晚で違う人になってしまった……。目の前で起こった出来事は人の命や意識について考えさせるに十分な出来事でした。

由良野の森へ

震災後の神戸から四万十川へ、それに続く現在までの道程を振り返ると、「すべてのことは複雑に絡み合って影響しあっているのだなということ」「人の意思や行為は、良くも悪くも、周囲のすべてに確実に影響を与えるということ」に気づきます。

由良野の森も又、関わる人の意思や行為、集う無数の命の活動で常に変化していく場所です。この森で自然や人と関わりながらの暮らしが始まりました。草を刈り、畑を開き、

生きもののとのささやかなかわりを経験しています。ここに関わるすべての人やものが、どんな「場」を築いていくのか時々想像します。たぶん、由良野の森の管理人は、いまだに現実とイメージの間をさまよっていて、「注意力が散漫？」が続いているのでしょうか、ご迷惑もおかけしますが、辛抱強くお付き合いください。

1 宇宙から由良野へ

一九九三年秋、アメリカを車で旅をしていた時、フロリダでスペースシャトルの打ち上げを見たことがあります。夜が明ける前から場所を探し、ラジオで打ち上げの中継を聞きながら何時間もその時を待ちました。そして、ロケットは煙を引きながらあつという間に空の彼方へ消えていきました。あまりにも日常生活からかけ離れた目の前の出来事に、現実味をおぼえなかったのを思い出します。

この頃から、しばしば宇宙空間を漂う空想をすることがあります。一人宇宙船で漂うのです。ほとんど機器の音しかなく、窓から外はほとんど真っ暗で、太陽も光線が強く直接見ることができません。そして、その宇宙船の中でさらに想像するのです。「少し青臭い芝生の上に寝転び、木の葉がさらさら揺れる木の下で川のせせらぎを聞く。鳥の声、セミの声、トンボが飛び回っている。川の土手にはいつも見る雑草に咲く花。芝生を見れば、アリの行列、ダンゴ虫。向こうの方では親子がボールで遊んでいる。風が吹いてくる。少

し湿気がある。夕立の予感。蚊が足首を刺している……。」想像のなかで、そんな当たり前で気にもかけていなかった様なことを、五感に強く感じたくなのです。

私にとってこの宇宙船は、学校の教室であり、スーパリーの売り場であり、工場であり、空調の効いた介護施設でした。うまく云えませんが、「これが宇宙船でなく地球上であればいいのに。勉強をしたり、仕事をしたり、癒される場所が、もつと『この星で生きていく』と感じられる場所であればいいのに」と思うのです。

子どもの頃、毎週家族で「大草原の小さな家」を見ていました。家族みんなで見る唯一の番組だったと思います。そこに描かれる素朴な人間ドラマと簡素で端正な生活に、子どもながら大いに影響を受けた記憶があります。あのころから、干草の匂いや焚き火の煙の匂いをするような生活を追い求めていたのかもしれない。十数年前「いつかカナディアンロッキーで馬でのトレッキングガイドをしたい」という思いがあつた時期もありましたが、いま家を建て、根をおろしたのはここ久万高原の由良野の森です。全く計画もしなかつた地です。「縁」に導かれ、ここで暮らしていけることを本当に感謝しています。

ゆらのの清水代表が「放人」と云う表現をされたことがあります。宇宙ステーションでなく、由良野の森に管理人として放人され、渇水や台風に出会いながら「この星に生きている」「たくさんの方の命に包まれている」「雨の一しずくが愛しい」と感じられる生活に日々感謝しています。

2 カヌー

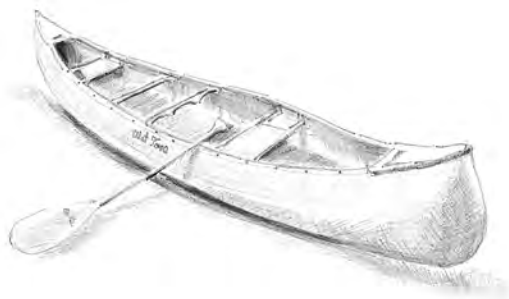
由良野の森に二艇のカヌーがあります。西表島に引越した時に車に載せて持って行き、島を出る時も同じようにしました。山の中に暮らす今でも、時々近くの池に浮かべて水の上の時間を楽しんでいます。

一九九五年、九六年と高知の四万十川でカヌーのガイドをしていたことがあります。ゲストと一緒に四泊五日で川を下るツアーは、川の中流から下流域を河原でキャンプをし、焚き火で食事をつくってテントで眠る旅でした。蛇行しながら流れる水の上にカヌーを浮かべて、次々変化する景色、流れ、音、風を楽しみながら進んでいきます。

川の水の流れは面白いものです。奔流とその側の穏やかな流れ。エディと呼ばれる川上への戻る流れを含む、渦を巻く流れ。

特にこのエディは、大きな岩の後ろにできるものは左右からの渦をもち、激流の中でもその空間だけは穏やかで安定していて、一息つくこともできます。

こういった「流れ」を利用すれば、そこそこ安全に楽しみながら目的地にたどり着くことができます。それでも岸につけて様子を見なければならぬこともあります。



例えば、たくさんの大きな岩が迷路のように前方を塞ぎ、先の様子が分からない時。

「ゴーゴー」と音がして、前方に大きな瀬や、滝のようなものを感じる時。

行く手、前方に浅瀬が広がり、どこを進めばよいか分からない時などです。

その時は、流れの穏やかな岸にカヌーを寄せます。そして、休憩もかねながら前方の様子を見に行きます。よく分からない時には、高いところに登ったりもします。そして、岩の迷路や荒瀬の中に、スムーズに進める流れを見つけ出せない時には、カヌーを担いで滝や大きな瀬の横を回避したり、カヌーを牽引して浅瀬を歩いたりすることもあります。

二人乗りの場合は、前と後ろに乗る二人が互いにコミュニケーションをとりながら、安全に下る方法を探していかなければなりません。以心伝心が基本ですが、二人の進みたいと思う方向が違っていると、カヌーは横を向いたり、回転したりしてしまうので、特に岩の多い荒瀬でこんなことが起きるとパニックをおこしがちです。

カヌーによる川下りの経験は、私と妻が時間・空間・状況を共有しながらものごとを進めて行く関係に似ていて、お互いに、状況を川下りにたとえて表現してみたことが多々ありました。僕たちの共同生活に影響しているカヌー。

何か問題が起きたときや、起こりそうなきは一息ついて、話し合うこと。

一度岸にさがり、冷静に状況を判断し、その度になんとかいろうんな状況を乗り切つてき

たように思います。

西表島でのカヌーは、満ち潮で川を上流に上り、引き潮で下ります。

干満の差が大きい時の潮のエネルギーは想像を絶するもので、これには絶対逆らえせん。海でのシーカヤックも同様で、潮流・うねり・風を上手に利用します。これが読めないとい海にも川にもいけませんでした。

潮の満ひきの時刻、月の満ち欠けは島の生活を刻む暦でもありました。

いま暮らしている由良野の森は、川の流れの源流にあります。流れは、由良野川、二名川、久万川、面河川そして仁淀川を経て太平洋に注ぎます。私たちの旅は今、山肌から清水が湧き流れるこの地を経験しています。

3 由良野はどうなるの

二〇〇八年四月現在、「由良野の森といえはなんとなくこんな所」といったイメージを伝える事ができます。それは、ここで行われてきた様々な事と、その結果が形となつて実際に目に映る「現状」と「雰囲気」によります。

永住を望み西表島に住んでいました。日本最南端の特養で介護の仕事も得ており、さらに安定した仕事の話もありましたが、幾つもの理由が重なり夫婦で話し合った結果、甲斐さんたちの住む所に戻る決意をしました。そして、時を同じくして、清水先生達から「久万に土地を手に入れる事ができたので、帰ってこないか？」とお話を頂きました。二〇〇三年三月甲斐さん夫妻と、美保さんが島に正式に誘いに足を運んでくださり、「管理人として由良野に住んでみないか？」という話をしてくれたとき、そこにはすでに私の具体的な仕事が用意されていると思っていました。私は今まで十四回引越しをしてきましたが、具体的に先に仕事が決まっていたのは三回しかありません。一つは大学卒業後の就職で勤務地に引越したことです。もう一つはカヌーガイドのため四万十川沿いに引越したことです。そして今回。この三回以外はいつも引越してから何とか仕事を見つけていました。

引越してしてきた時、妻の陽子は次男の出産一ヶ月前で大きいお腹をしていました。にもかかわらず、引越す予定の仮住まいは床下が腐っていたので、大急ぎで大掛かりなりフォームをすることになりました。有難いことに、私の父も工事を手伝ってくれ、四つの部屋の床と、押し入れ全ての改装で一ヶ月ほどかかりました。床をはり、畳表を替え、なんとか出産に間に合いました。ところがそれだけではありません。実はこの間いろんなことが一度に起きていました。まず、義父が脳溢血で倒れ入院しました。そして次男の出産と同じ時期、清水先生も自然気胸のため入院され、目と鼻の先の日赤病院と松山助産院

で、同時期を過ごしていました。

沖繩から引越してきてほんの四十日の間に、これだけの状況が目の前で起きると、正直頭は混乱していました。ついさっきまで西表時間で「ゆるり」と生活していた者の頭はパニック状態でした。由良野の事に意識を持つていけるようになったのは、もう肌寒い季節になってからだったのです。

西表に行つてから少しずつ貯めた貯金も、今回の引越してほとんど使い切つていました。これは一体どうなるんだろうと思つていたのは私だけではなかったはずです。

「木を植えて人と動物が幸せに暮らす場をつくりたい」。ということは聞いていたので、私の役割は、西表島の山のような自然林を復元し、そしてそこに人が入り荒らさないように管理することだと思いました。

しかし、久万に帰つてきて清水先生から詳しく話を聞くと、どうやら自分の認識していたものと少し違っていました。

清水先生は「由良野を人が集う場所にしたい」と言われました。「鷺野さんが生活しながら、人と自然が共生する場、人が集う場にしてほしい。そしてまず、集う拠点になる建物を建ててほしい。すべて鷺野さんにまかせます。可能な限りのサポートをします。」ということを話されました。しかも清水先生は、「ここを自分の所有物にするつもりは一切ない」とも言われた……。

私はこの時点で、これは大変な事になったと自覚していました。大体こういうのを仕事と言うのでしょうか？ 本気でこんな事を言う人は地球上にめつたにいたるものではないかもしれません。清水先生は驚野に何を求めているのでしょうか？

とにかく、私の仕事は、集う拠点になる建物をつくること以外、具体的な仕事は何も決まっていなかったのです。そして私には、由良野をどういう所にしていきたいのか、また何をしていったらいいのやら具体的なイメージはありませんでした。

山のほうではすでに、以前甲斐さんから森林の生態系に大変詳しい方と話に聞いていた山本栄治さんが、重機を使って荒れた桑畑の開墾を始めていました。

久万に帰ってきてしばらくして甲斐さんの家で、清水先生、美保子さんから栄治さんを紹介していただきました。「NPO法人愛媛生態系保全管理の理事長をされており、とにかくこのあたりの森林生態については右に出るものは全くない方で、農林土木にも詳しいバランスの取れた、子どもにとっても優しい人。しかし大人にはとても厳しい人」という第一印象でした。

このときはじめて栄治さんから「里山」という言葉を聞きました。恥ずかしいことに、由良野の管理人として仕事をする予定の私は「里山」を知りませんでした。「里山つてなんですか」と聞くと栄治さんはみんなの前で「んー。」と言葉を失ったのを覚えていま

す。栄治さんも内心「ほんとに大丈夫かー？」と思つたに違いありません。その場で簡単に説明をしてもらいましたが、その時は「里山・里地」というものを経験したことのない私には何のことか理解できませんでした。

私が生まれ育つたのは松山市内で、周りには田んぼや溜池、みかん山がありました。家の正面に少年院があり、幼少期はその敷地内で一人遊んでいた記憶があります。特に豚舎が好きで、よく壁によじ登つて豚の親子の様子を眺めていました。母の里が久万高原だったので山に行くこともたまにありましたが、祖父母は洋服・呉服の仕事をしていたので、私は山での仕事は何も知らず、遊んだ記憶も街でのことばかりでした。

(後に、図書館で里山や森林に関する本を何冊も読んでから、栄治さんに改めて里山についていろいろ質問をしたのを思い出します)

あの、何もない状態から、よく今の「実体」が在ると思います。全てはたつた一人の純粹な想いから始まり、それに賛同して純粹に行動を起こしている「ゆらの」の皆さんや、それを支援して下さる方々、そして地元の皆さんの理解で成り立っています。

「さて、これから由良野はどうなるのだろう」と、最近はあまり考えなくなつてきました。清水先生の言うように純粹に行つていけば「えにし」というものに導かれ、人は集い、結果が現れる。そんな気がします。

私の今一番の課題は、どうやって「純粹」になるかということです。

4 まず土地の浄化から

由良野には、長男が生まれる前に来たことがあります。知人の小倉さん一家がお住まいでした。小倉さんにはとても仲良くして頂き、子どもさんとは脇川で一緒にカヌーをしたこともありました。

私たちが西表島から久万高原に帰ってきたのが二〇〇三年の七月。

小倉さん一家は娘さんの高校進学を期に、すでに宇和町に引越してきていて、由良野は以前来た時とかなり印象が違っていました。なんだか寂しい感じがしたのです。

七月の由良野は鬱蒼と草が茂っていたので緑は濃かったのですが、人気がないため、土地や建物が自然に飲み込まれていく感じがしたことを覚えています。

小倉さんが「子どもたちが使えるようなら」と置いて行ってくれた学習机と車のおもちゃなどが残っていただけで、家も庭もきれいに片付いていました。しかし、季節が変わり、夏の草の勢いがなくなるにしたがつて、山には今まで草に覆われて見えなかったものが現れはじめました。ずっと前に捨て去られたままのもの。それは「ゴミ」。

拾っても拾っても出てくる。以前ここには何軒か家もあり賑やかだったらしいのですが、それはすでに取り壊されていました。栄治さんがきれいにして下さったあとだったの

ですが、それでも土を掘り返すと次々出てくる・・・。

清水先生も美保子さんも甲斐さんも、由良野はとても良い所だと思っていました。

良い所にあまり似合わないものは、行くべき所に行ってももうしかありません。

軽トラックに満載したゴミをいったい何十回、環境衛生センター（久万高原町のゴミ処理場）に運んだことでしょう。

最初のうち、私は「ゴミ」を見つけては頭にきていました。しかし、次第に考えは変わってきました。「そうだ、彼らに罪はない。」十分働いて使命を終えて、ここに置かれていっただけ。嫌がられる筋合いはありません。その当時は、使ったものはそこで処分するのが当たり前だった時代だろうから、放置した人達に当たっても仕方がありません。当たり前だったから、皆平気でそこで処分したに過ぎないのです。

それならば、この「彼ら」を行くべきところに行ってもらう為には、平気で拾い続けるしかないのだと気づいたのです。

ここにある「彼ら」が気になるのは私の問題なので、以来、平気で拾いはじめ、ただ黙々とそれらを軽トラックに積み込み、運んでいます。

清水先生からは、この頃「活動の拠点になる建物（ゲストハウス）をつくろう」と言われ続けていたけれども、私はそれ以前に気になることを、ただ納得いくまでやりつづけた。

冬になるとイノシシが土地を掘り返します。葛やワラビそして山芋が目当てなのだけ
ど、土に埋もれた「彼ら」も一緒に掘り出してくれます。私も畑の開墾をする為に、土地
を掘り起こすことがあります。まだ出てくる。それをその度に拾い集めるのです。由良野
の森管理人として一番初めにした仕事は土地の浄化でした。それは今でもずっと淡々と続
いています。

5 ゲストハウス

由良野の森に近づくと、最初に見えてくる二棟の赤い建物が、ゲストハウスと管理棟で
す。

この二軒は管理人が自分で建てたと誤解されることが多いですが、二軒とも沢山の方々
のアドバイスとお手伝い、そして職人さんたちのご協力でほぼ完成しました。

ゲストハウスの計画から、それが風景になるまでを紹介します。

まず、「由良野に集う人たちの拠点になるスペースを造ろう」という事で始まったゲス
トハウス計画は、私にとつてとても難しい課題でした。

私には「由良野で何をやるか」という事が、ほとんど何も決まっていなかったのです。清水先生が出した唯一の希望は「まず、一度にある程度の人が入れるスペースが必要」ということだけ。あとは任せるとのことでした。

私は、昔から建物にすごく興味がありました。テレビで、いろんな国の人たちが色々な建物に住んでいるのを見ても、世界の多様な自然・文化・そして暮らしの為の建物に目がいききました。そのせいか旅をしても最も気になるのが、その自然に調和した建物や、そこで暮らすための道具として合理的な建物でした。

そのことを知っていたのかどうか、清水先生は「鷺野さんに任せる」と言われたので、とにかく深く考え込んでしまいました。

太陽エネルギーを上手に利用してデザインされた欧米の家、パッシブソーラーハウス。友人が藁を利用し自分で建てた、ストローベイルハウス。ログハウス。日本、外国の木造古民家。ヨーロッパの石造りの家。アジアのもの中東のもの、とにかく地球上で人が住居として使っているものを手当たり次第に写真や図書で調べまわりました。

そうして出た結論は、「家を建てるには、そこに最も沢山ある材料で建てる」ということです。そして久万高原の由良野には、スギがこれでもかというほど「在った」のです。早く着工したかったことや、建築の自由度を考慮した結果、ログハウスではなく、在来

工法を選びました。

本当は、木の伐採時期を選び葉枯らしした、その土地のスギを使いたかったのですが、その時、由良野の森には桑しかなく、スギ材は既製品をつかうことにしました。

さて、早く建てたい、しかも管理棟になる自宅も一度に建てたいとなると、経験者や専門家にお手伝いして頂くしかありません。そこで自宅をご自分で作っていかれた先輩、甲斐義孝さんや、清水先生のお知り合いの大西国興さん（大興建設）に何度も相談し、外観デザインや間取りについて、たたき台になる案をいただきました。

ある程度デザインができて、次に実際に形にしていく大工さんが必要でした。

迷わずお願いした人は勝本孝志さんです。

一九九七年秋から三ヶ月ほど、私はある大工棟梁の仕事を傍で見させていただいたことがあります。その人が勝本さん。彼は職人特有の近寄りがたい雰囲気はなく、とても気さくで誠実な方。以前のアルバイト先で知り合ったご縁で、無理を言って現場に押しかけたことを思い出します。

その頃の私は、まだ自前の大工道具を殆ど持っておらず、経験もないため、お手伝いできることは何もありませんでした。淡々と仕事を進める彼を、まるで現場監督のようにじっくり見させて頂くことができました。それによって仕事を盗めたわけではありません

が、誰もができない様な貴重な体験になりました。この体験がなければ、その後西表島で、沖縄首里城の復元に携わった奥田工芸の奥田武さんから、大工仕事や木工を教わることもなかったかも知れません。

さて、勝本さんをお願いはしたものの、私が進めていたゲストハウス内部の設計はなかなか出来ませんでした。

図面を描いては直しを繰り返していたその年の冬、仮住まいの家は本当に寒かったのです。亜熱帯の島から、いきなり半年後に猛吹雪の世界。台所に薪ストーブは付けました。しかし、いくら焚いてもその熱は窓の結露と共に消えていきました。そして結露は翌朝にはガチガチに凍り、水道も凍結して出ないこともありました。この一冬で学んだことは、由良野に必要な建物は「夏に涼しい家」ではなく「雪降る冬に寒くない家」ということでした。

「家の中に熱を入れる、蓄熱する、熱を逃がさない」ということです。

それは、沖縄で暑さを避けるためにやってきた事の反対をすればよいという事です。これは、家が小さいと簡単ですが、ある程度大きくするとコストが大きくかかります。

そこで、路面が凍結するような冬にはゲストも来ないだろうということにして、ゲストハウスは春夏秋冬仕様にしました。

管理人家族は、冬を除く天気の良い日中、ほとんど外で作業するため、暑い時期、暑い時間は家にいません。たまにマイナス十数度を経験する管理棟は冬仕様にしました。これは大正解でした。

この二軒の特徴は、南に大きく窓をとり、北側の窓は小さく、そして少なくしていることです。

天窓も本来北側に付けますが冬仕様で南側にあります。お陰で晴れた日中は室内に電気を点ける必要はありません。夏は温室のように暑くなりそうに思われるかも知れませんが、窓を開け、日除けをつけることでその問題が解消することは南の島で学んでいました。内装は一部ヒノキを使っていますが、その他床も壁も地元森林組合のスギ無垢板の製品を使っています。これは住んで使ってみて感じますが、夏に涼しく、冬は暖かく、この気候に素晴らしく合っている気がします。家の中は、冬の間ずっと薪ストーブを焚いても、梅雨時期に雨が降り続いても湿度は殆ど変わらず六十パーセント前後を保つことができます。

外壁もスギの板を使っていて、夏の暑さも、台風の雨もこのスギが守ってくれます。もしどこかが痛んでも、スギさえあればすぐにその部分だけ取り替えることができます。

考えに考え、迷い迷った末ようやく春に間取りができました。東西南北の立面図と平面

図は手書きのイメージである為、これを具体的な施工の為の設計図面にする必要があります。
した。

この仕事は大興建設の有江さんが行ってくださいました。有江さんはこの後着工するまで、何十回も調整に付き合ってくださいました。感謝です。

勝本さんは、構造材の加工にプレカットを薦めてくれました。でも、どうしても一軒は勝本さんの手仕事でお願いしたいからと無理を頼み、管理棟の方は手刻みでお願いしました。「いつか家を建てるときは勝本さんに」と思っていたあの頃から八年目でした。本当に感謝です。

有江さんのお陰で順調に基礎工事も進みました。そして同時に、勝本さんに管理棟の墨つけ刻みを進めていただきました。今考えると勝本さんは大変だったと思います。構造材の殆どは露出して丸見え。しかも汚すことも傷つけることもできない化粧仕上げ。材料は殆ど生のスギ。大きな梁はたつぷり水を含んでとても重たかったです。それにもかかわらず、どんどん仕事を進めてくださいました。細かいところまで常に適切なアドバースをいただいたり、時には建設中の家に泊り込みで仕事していただくこともありました。

こんな風に多くの方の力とお陰さまが結集して、七月吉日、無事、ゲストハウス棟上を迎えることができました。

その後、急いで外壁を仕上げていきました。一ヶ月後に管理棟の棟上がひかえており、そちらの工事が始まると、なかなかゲストハウスには手がつけられません。勝本さんたち大工さんが壁板を張っていくとすぐペンキを塗っていきます。ドイツ・リボス社製の塗料は、溶液に食品基準のイソアリアファート（化粧品類・医療品類の伸展剤として使われている）やオレレンジ油を使用しており、ペンキ塗り特有の不快な臭いはありません。ゲストハウス・管理棟の外壁と床は、このメーカーの塗料を使用しています。外壁保護のため作業は管理棟の棟上後も平行して行われ、清水先生夫妻や甲斐家の皆さん、私の父にも手伝ってもらって、森が緑の季節も雪で真っ白な季節も映えるように仕上がりました。

「このゲストハウスで、たくさんの楽しく幸せな出会いがあればいいな」と思っています。皆さん、一緒にそんな場をつくっていきましょう。

6 ニワトリの食べもの

ここ由良野で、ニワトリを飼いはじめて二年弱になります。いま二十羽が放し飼いにされ、日中は小屋を中心に遊びまわり食べものを探しています。

二〇〇六年夏、最初の五羽がやって来たとき、私も妻もニワトリを飼うのは初めてで、ニワトリは何を食べるのか知りませんでした。

甲斐さんに聞くと、「主に飼料をあげていればよいこと」「人間が食べるものならほとんど何でも喜んで食べること」「青菜はスイジンが好きなこと」などいろいろな教えてくれました。その通り飼料を良く食べ、青菜も刻んであげると良く食べてくれました。そこで気付いたのは、はじめ彼らは与えた食べ物しか口にしないということでした。環境が急に変わってびつくりしていたこともあると思いますが、ここにやって来て翌日には放し飼いにしていたにも関わらず、なかなか自分で食べものを探しませんでした。一週間くらいは青菜も毎日刻んであげていました。

ニワトリは、自然に開放してあげれば、すぐに自立すると思っていました。しかし、自然を経験したことのない彼らは、初めての食べものになかなり用心深かったです。

しばらくは、目の前で土を掘ってやり、虫やミミズを見つけるようにやって見せましたが、なかなか自分ではやろうとはしませんでした。それでも、卵を産むのに必要なのか、時間が経つにつれバツタやコオロギなどの虫も捕まえるようになっていきました。この後、農協から雛を買ったり、雌鳥の暖めていた卵が孵ったりして数が増えたこともあって、鶏との付き合いも長くなるにつれ、いろんな事に気が付きました。

まず、親鳥が孵かえした雛は、親鳥のついでにばんだモノを食べます。人間が与えたものはほとんど食べません。一週間もすれば土の中の虫を与えられ、暫くすると自分で土を蹴りだします。小さな体で蚊や小さな蛾に飛びついて食べます。三週間もすると飼料も食べるようになりますが、親鳥と大きさが変わらなくなるまではついてまわり、いろんな食べものを

教えてもらいます。

農協から購入する孵化後六十日の雛は、はじめ青菜にもミミズにも見向きもしませんでした。食べなれた配合飼料だけを好みました。そして、少しずつ環境になれていくに従い、他の鶏を見習っていろいろなものを食べはじめました。

結局半年もすると、どの鳥も同じものを同じように食べています。要するに違いは親が教えるか、他を見て習うか、見習うべき先住者が居ない鳥は自分で苦労して見つけ出していくだけなのでしょう。エサとなる草も昆虫も、必要なものはほとんどここにそろっています。

参考までに、この鶏たちが食べているものを挙げてみます。

昆虫はほとんど何でも食べてしまいます。オタマジャクシにカエル、ネズミ、大きなムカデ、三十センチ位のヘビも丸呑み。エノコログサをはじめとする草の実。いろんな草の葉。残飯。ここに生きる全て、何一つ汚染することはできません。このたぐさんの命にささえられて、鶏たちは今日も幸せそうに暮らしていて、彼らの生む卵を頂いている私たちも、こうして元気に暮らしています。

動物は植物に依存し、植物はまた土地や水、空気などに依存しています。そして人間はそれらに依存しています。全てのものはお互いに依存し関係しているのです。

ここ由良野の豊かな生態系に感謝せずにいられません。

7 ペンタ

探しています。名前ペンタ。ウイルシュ・コーギー犬。特徴…胴長短足、骨太、頭が大きい、尾がない……。

いくら探しても見つからず、とうとう新聞のおり込みにペンタ搜索チラシをお願いすることになったのでした。

二〇〇七年三月末、コーギー犬のペンタが由良野の森にやって来ました。ペンタはいつも由良野の森で電気工事をして下さっている松田さん夫妻の愛犬です。松山市在住の松田さんのお宅では、最近の環境の変化や夏の暑さが、ペンタの健康に大きな負担になっていると感じていたそうです。夏も冬も涼しく、広々したここ由良野で元氣を取り戻し、元氣で生きて欲しいと願われて相談がありました。

その数ヶ月前から、妻は、アメリカの絵本作家の写真集をみて「コーギー犬いいなー」と勝手にイメージを膨らませていました。同時に子供たちもそれに影響を受けたようで、犬に興味をもちはじめていました。ホームセンターに行っても、ペットコーナーでコーギー犬を探している妻と子らに「今うちで犬は無理じゃない？」と言っていたのですが、今回の松田さんのお話に「これもご縁かな」と感じ、里親になるということでペンタを歓迎することにしました。そして、五年の間松田さん夫妻の愛をうけて育った彼、コーギー

犬ペンタは、由良野の森にやってきたのでした。

その時の由良野の森には、彼を中心に様々な思いがあつたと思います。夢にまで見たコーギーとの生活が現実となり、さらに想像の膨らんでいる人たち。

どうやって彼との関係をつくつていこうかと頭がいっぱいの私。とても複雑な気持ちであらう松田さんたち。そして、なんとなくただならぬ状況を感じているはずのペンタ。松田さんがペンタにそつと別れを告げ帰路にあつた時、すでにペンタの言動には「あれ、お父さんお母さんは何処？」を表していました。

その晩からしばらく、彼はロープに繋がれることになりました。飼い主を探して山で迷子にならないためです。あちこち見回しながら、吠えて飼い主の松田さんを探します。その姿は寂しさと不安をはつきりと表しており、その度に昼も夜も、私は彼の傍に行つて彼を撫でながら状況を日本語で説明しました。昨日今日の関係の人に諭されても納得してくれる訳はないのですが、ペンタは疲れたのか、その度にぐつすり眠りました。彼は翌日からの散歩の間中、前日松田さんとお別れ前に歩いたコースを辿り、一所懸命飼い主探しをしていました。それは、気分転換の散歩などではなく、明らかに搜索でした。それを見て私は、子ども達が彼と散歩に行くときに「首輪が外れると逃げていつて山で迷子になるから、可哀想でも外しちゃいけないよ」と注意をしていました。

私にも考えはありました。慣れるまではしばらくロープに繋いでおき、慣れてきたら夜の間は繋がらないで自由にいてもらおうと。というのは昼間お客さんも多いし、ニワトリが

放し飼いになっているのでトラブルになると考えたからでした。ニワトリも猫も、放し飼いで勝手に放題しているのに、ペンタだけ繋がれているのは本当に胸が痛かったのです。松田さんからは「ペンタは臆病だから離しても遠くには行かない。もしどこかに行ってもおなか为空いたら帰ってくる」と聞いていました。その言葉から、「自然の中を走り回り、のびのび自由にしてほしい」という思いを感じていました。

彼がやってきてから三日目の午後から雨が降ってきました。屋根つきの小屋を用意していましたが、雨に濡れながら今だずつと飼い主を探す仕草をする彼を見て、夕方にはたまたまなくなり、「今晚は気持ちの落ち着く場所を探してお休み」と言つて首輪からロープを離しました。「もう遠くには行かないだろう」と思い込んだ、全く衝動的な行動でした。

このことを家族に告げると「え！うそ！」と言われて我にかえり、一気に不安になりました。その晩は夜中まで一時間ごとに、家の周りをぐるぐる歩き回っているペンタを確認しましたが、大好きなクッキーを手にくら呼んでも全く近寄つてこない彼に、私の不安は拡大していきました。

翌朝早く起きてペンタの確認に外に出ました。しかし、彼の姿は由良野の何処にもありませんでした。「しまった」という感じでした。それでも、「おなかを空かせて帰ってくるかも知れない」と微かな希望をもち、午前十時頃もう一度由良野周辺を探しまわりました。いません。どこにも。そして松田さんの奥さんにペンタが居なくなつたことを伝え、

事情を説明しました。

そう。ペントは「自分とはぐれてしまった松田さん夫妻」の大捜索に出かけたのでした。そして私は、「ペンタ行方不明」の現実を前に、春休みでずっと家に居る子ども達からは「自分で離したらダメってゆうとったやん」と言われ、「首輪が外れると逃げていつて山で迷子になるから、可哀想でも外したらいかんよ」と言った自分の言葉が何度も私の頭をポカポカと叩きました。

その日の昼から、「ペンタ大捜索」は始まりました。松田さんも年度末の忙しい中、写真を持ち夫婦で四方八方走り回り、探しまわって下さいました。私も町中車を走らせ探しましたが全く見つかりませんでした。少人数で探すことの難しさを痛感し、ペンタ捜索チラシを作ってお店などあちこちに貼り付けをお願いしました。みなさん本当に快く協力して下さいました。そして、どこに行ってもとても優しく心配していただき、また、見かけたら伝えると言ってくれました。おかげ様で、こうしてどんどん不特定多数の善意の捜索隊は増えていきました。

チラシ貼り付けをお願いしてからしばらくするとペンタの目撃情報が入り始めました。本当にうれしかったです。無事に保護したいという強い思いは、「新聞の折込チラシでもっと多くの方々に願ひする」という方法に向かわせました。さつそく写真入りの捜索チラシを作り旧久万地区・旧広田村地区に配布していただきました。そしてその後、たくさん

の皆さんのお陰で、目撃された方からたくさん情報をよせていただきました。

行方不明から百時間後、飼い主の松田さんを探してさまよっていたペンタは、由良野の森から三キロ離れたところで、チラシを見て彼のことを心配し、気にかけて下さっていた方に無事保護していただきました。本当に嬉しかった。

無事でよかった。

後で松田さんに聞いた話ですが、搜索を始めてすぐの時、保護された地点の近くでペンタの鳴き声らしきものを聞いていたそうです。そしてそのとき、ペンタは大丈夫と感じたそうです。

今回ペンタは、「犬にとつてどんな住環境・自然環境よりも、愛してくれている人との関係の方がはるかに重要で、自分の命よりも価値があるのだ」ということを教えてくれました。これは人にとつても同じ。そして、ペンタとの出来事は、私たち由良野の住民に他にもたくさんのかげを気付かせてくれました。ありがとうペンタ。

この場をかりて、ペンタのことを心配して搜索して下さった皆様の優しさに、改めてお礼を申し上げます。

その後ペンタは、由良野の森での暮らしにも慣れ、山の中を自由に走り回って散歩もしましたが、しばらくして松田さんの元に戻り、現在も幸せに暮らしています。

8 日本ミツバチ

ミツバチを見ると、いつも思い出す幼いころの風景があります。あれは一歳頃まで住んでいた家で、側には父親が乗っていたであろうオートバイ、目の前にはたくさん菜の花。むせ返るような菜の花の香りの中で何匹ものミツバチが羽音をたてて飛んでいる。そんな暖かい平和な春の日の風景です。とても幸せな一時であったことを思い出します。

二〇〇七年五月八日、由良野の森の巣箱に待望の日本ミツバチが入りました。

この巣箱は、その前の年に甲斐さんと会員の松崎さんから頂いたもので、その年は別のところに置いていたのを、この年は見通しの良いところに置いてみたところ大成功。この日にぎやかに巣箱を行き来しているのを見つけました。早速養蜂の先生達に興奮しながら報告しました。

養蜂の先生は三名います。まず甲斐さん。知り合ったところ、採れたての蜂蜜をいただきました。「香りがよくつておいしい」。まさか蜂蜜で感動するとは思っていませんでした。そして、日本ミツバチという存在もその時知りました。甲斐さんはその後、海山川のいろんなことを教え助けてくれる大先輩であります。

もう一人は松崎さん。彼は鉄工所をされており、ゲストハウスと管理棟にある薪ストー

ブの為の煙突取り付け台を作ってくださいました。まだ煙突が付く前、知人に「ロケットでも打ち上げるの？」と言われたくらいしつかりしたものです。梯子状になっており、雪が降り続く中でも安全に煙突掃除ができ、屋根の上に用事がある時も重宝します。その松崎さん、鉄工所の前にたくさん日本ミツバチを飼っておられます。それはそれは飼い方にいろいろな工夫をされており、蜂の話をされると、どれだけ彼らを愛しく思っているかが伝わってきます。巣箱に入った報告をすると、為になる資料をいろいろ送ってくださいました。

そして、もう一人は熊沢さん。桜の苗木や美しい鶏を連れてきてくださる天台宗医座寺の住職で、お寺で蜂をたくさん飼われています。彼の蜂や鶏に接する時の身のこなしは、優雅で美しく見惚れてしまうほど。すごいのは蜂だけではなく、五千坪の園地に桜を数百本育てておられること。まだ桜の時期に行ったことは無いので、今から楽しみです。その熊沢住職、二〇〇六年の春、巣箱を三つ設置しに来て下さいました。

二〇〇八年三月。前年箱に入った蜂が越冬し、春の花から蜜を集めはじめました。住職の巣箱三つも側に移設し、新たな蜂との縁を心待ちにしていたところ、四月二十日の午前中に分蜂が始まりました。唸るような羽音に驚いて巣箱の方へ行くと、無数の蜂が舞い飛び、それはもう呆然とするほど。

すぐに、甲斐さんに電話をし、遠くに飛んでいかないう方法を教えてもらいました。（実

は谷向こうの甲斐さん宅でも同時に分蜂がおきていました。巣箱に戻ると、すでに近くの倒木の下に蜂の球が出来つつありました。女王蜂がこの球に入って落ち着くには数時間かかるということなので、山菜採りに来ていた清水先生夫妻や会員の方、遊びに来ていた子ども達と様子を観察しました。

私が「分蜂中の蜂は刺さないらしいよ」と説明すると、子ども達は蜂の塊を素手で触って嬉しそうに遊んでいました。その後、みんなの見守るなか、熊沢住職の巣箱に蜂を素手で移しました。

初めての体験にドキドキしているところに地元の自治会長も現れ、「家の墓に蜂が入つとるんじゃが……。そーかー……。分かれたら驚野にたのもうわい」とのこと。何度も初体験だと説明しましたが、「たのんだぞ」と言つて楽しそうに帰られました。

三名の先生が皆、ここ由良野は雑木が多いので巣箱を置くと蜂がたくさん来ると教えてくれました。はじめは、自分が蜂を飼うなんて想像もしていなかったのですが、ミツバチとの生活環境づくりは、幼いころの至福の時間と重なっていきそうです。

2 森にじづく道

鷺野陽子

はじめに

私の生まれ育った大阪の下町には、そのころまだまだ静かで豊かな庶民の生活があつたような気がします。往来する車も少なかったし、家はどこも木造でした。

下町には子どもがいっぱいて、空き地や路地の細い道は全部遊び場。

お風呂のない家が殆どでしたが、銭湯に行かない日は、長屋の路地にそれぞれの家がアルミのたらいに水を張って並べ、昼間の太陽で温まったそれが夕方行水に使われるのです。公園に紙芝居が来ると、私たち子どもは、親に十円ほどもらってひとつ一円くらいのおやつを兄弟で買くと、月光仮面やら、番町皿屋敷だのを熱心に立ち見たものでした。

暑い夏の夕ぐれに、浴衣にうちわの人が涼みに出る路地は、子供心に楽しかったものです。

小学校一年生のとき、神戸の新興住宅地に建てられた、当時はやりの公団住宅に引っ越ししました。まだ山のたくさん残っていた裏六甲。カブトムシが飛んできたり、父とすずめを捕まえて飼っていた事も、夏休みに子どもばかり数人が、山で腐葉土を取ってきて町の人に一袋五十円で売った事も、その頃の思い出です。

神戸の街に出ると「田舎から来た子」と言われていたその土地も、今ではすっかり町になりましたが、私の中の原風景はどちらも穏やかな時間が流れています。

後にバブルと呼ばれた丁度その頃。

高校を出て、神戸の看護学校に通う傍ら病院に住み込み、看護婦見習いをしていました。世間の流れとは無縁の生活。月三万円の給料でした。

勤労学生といわれる生活が結局五年続き、晴れて正看護師となると、兵庫県の成人病センターで働き始めたのが二十三歳のときです。

生きる事、死ぬ事、病むということ。

そんな事を多くの出会いを通して感じ始めた頃です。

その後は、心の命じるまま、好奇心おもむくまま、神戸からオーストラリア、四国、そして沖縄へ。

旅を続けて、こうして由良野の森に着きました。

振り返ってみれば、あの頃も今も、いつも私の心を引き付けるのは「人とかかわり」なのだ気がつきます。「人間」というものに興味が尽きません。どんなに大変でも、希薄な人間関係よりは、うつとうしいくらいの「温度のある」人間関係の中で生きていたい。

それは日本にいても、たとえ言葉の通じない国にいても同じでした。

ポーランドとロシアの国境の村に行ったことがあります。バイソンの暮らす古い森がありました。木の車輪の馬車に揺られて、村のおじいさんがその森に連れて行ってくれました。大きな倒木の苔むした肌に木漏れ日が差すと、そこには新しい木の小さな芽が無数に芽吹いていました。深い目をした、しわだらけのおじいさんはそのとき確かに「これが生きるということなのだよ。バイソンが暮らせる土地だから、われわれもこうして暮らせるのだよ」と私に伝えました。自然を制圧する文化だけがヨーロッパではないと知つたのはその時です。

全く違う顔と言葉。遠く隔てられた地球の裏側の森と、アジアの東の果て、小さな島の由良野の森。私たちはけれど、森を通して、確かに深く結びついていると思います。

今、子育てをしながらこの森で染織を仕事にしています。仕事といっても、一日にやりたこと十のうち二できたら「今日は上等」という具合。子どもと一緒に出来るから…、

と染織を始めた頃と変わりません。

季節になると、時には子どもたちと赤や黄色に染まる染料を採取に森を歩きます。たまには森の恵みをつまみ食い。来年もその次もずっと此処にありますように「よろしくお願いします」と言葉にすると心が落ち着きます。

この森の木はまだ若く、今ぐんぐんと天を仰いで大きくなっているところ。

森が育つに連れて、鳥も昆虫も生き物が増えてくる事でしよう。

いつかあの大きな倒木の森のように、新しいのちに受け継ぐ確かな営みがしっかりとまわり始める。

ずっと先の「確かな未来」につづく。

これまで関わってくださったすべての人、今もこれから「ご縁」のあるすべての人と由良野の森で色とりどりの暮らしを織りなしていければこんなに嬉しい事はありません。

一九九九年四月。九ヶ月になったばかりの長男、天音（あまと）を連れて、私たちは沖縄行きの飛行機に乗っていた。機内、赤ん坊だった長男は、修学旅行の女子高校生たちに無邪気な愛想を振りまいてご機嫌だった。

南へ向かう機内のアナウンスが「只今当機はトカラ列島の宝島を通過しております」というと、乗客みんなが丸い窓の外を見た。

青い海の中にボツンと見えた小さな島が、私の想像をかきたてる。

白い砂浜から続く熱帯植物。海を泳ぐ極彩色の魚たち……。そこから先が続かない。

おむつもとれていない乳飲み子を連れて、私たち夫婦が向かっていたのは、まだ一度も訪れた事の無い未知の島。知人一人いない、沖縄本島のさらに南にある西表島。

すべては夢をみた事から始まった。

「島に行く事になった」。私は夢の中で手を振って芳子さんに別れを告げていた。

その夜、芳子さんも同じ夢をみていたと分かったのが一九九八年暮れ。

「エー！、それはきつと正夢だ。島つて何処だろうね」とすっかりその気になってしまったのが始まりだった。芳子さんとは、今、この由良野の森の理事をしていたら、甲斐芳子さんのことである。甲斐さんは、峰向こうの父野川で暮らしておられ、私たち夫婦が久万に住み始めてから、ゆうき生協に入ったのがきっかけで、ずっと親しくお付き合いさせていただいていた。

すっかり盛り上がった「島へ行く話」。

結局、作り話のような「縁」に導かれて私たちはこの後、住宅難の西表島の、しかも選りすぐりの古集落・租納^{そない}で暮らせる運びとなった。

縁とは不思議、かつ味のあるものだと思う。

一九九九年十月。重要無形文化財に指定されている「節祭^{しち}」一週間前に、私たちはこの島で暮らし始めていた。この祭りは、稲作文化の一年の節目で新年にあたり、三日間にわたって様々な儀式、芸能が執り行われるもので、この集落で一番大事な祭りである。

祭りの一週間前。夜の八時になるとガランガラン・・・と大きなドラのなる音が村中に響く。こうして三々五々、村中の人が毎夜公民館に集まるのだ。

老若男女全員に何らかの役割があり、皆それぞれ楽しそうだ。祭りの準備も佳境に入り毎晩遅くまで稽古や道具作りが続く。

知らない土地。初めての沖縄で真夏の夜の夢のような日が過ぎた。

私たちを村に受け入れ、町営住宅の保証人になってくださった、石垣金星さん、昭子さんがこの忙しい時期に引越してきた私たちのためにも、祭りの衣装や、アダン葉で編んだ草履などを用意してくださっていた。

「どんな時も、まったくあたりまえのようにさりげなく誰かのことを考えて行動する」というようなこともこの島で教わった。

引越し荷物も解き終わらないまま、私は天音を背負い、婦人の皆さんに教わって、大鍋（シンメー鍋）で五百人分の食事作りに参加した。

夫は、早速青年会に入り、祭りで行われる棒芸に出させてもらうことになった。

村の人は、ヤマトからやってきた見ず知らずの我々を、大げさに歓迎するでもなく、冷たくするでもなく本当に自然に受け入れてくださったように思う。

祭りには立派な旗頭はたがしらが立つ。

祭りの最終日。この旗頭が村中を練り歩き、きれいな衣装を着た男女がこの後に続く。

祭り初日、前泊りの浜に「みるくさま」がやってきて、弥勒みろく世界報せかいがふを運んできた。

最後のこの日に村中にその世界報を連れて歩くという事だろうか……。

その年新築された家々を旗頭がまわって祝う。この年新築だった町営住宅の我が家にもその旗頭がやってきた。

家の庭に旗頭が入ると、金星さんが一歳になったばかりの天音を抱いてその旗頭に登らせた。緊張しすぎて泣く事も忘れている天音。皆にこにこしている。

村中が笑顔で踊る渦の中で、私たちの西表島生活がスタートした。

次の日の朝。隣りの愛子おばあさんと庭先で会ったら「兄弟、親戚のように仲良くしましょうねー」と笑顔でいわれたことを忘れない。沖縄では、「いちやればちようでーと言うんだよ」。

第二次大戦中、日本軍が接収した土地はいまも村に返されていない。おばあたちは国から自分達の土地を借りるという奇妙な状態で、上村と呼ぶその土地を畑に使っていた。

何人ものおじい、おばあにこの畑で作った野菜をいただいた。ちょうど上村の登り口に住宅が建っていたこともあって、うちに帰るとよく玄関先にゴーヤーやパパイヤ、冬瓜なんかが置いてあった。

もらったパッションフルーツの種を庭に植えたら大きくなって、島を出る頃には屋根に登る勢いだった。エンサイもよく育ったし、庭にはバナナやグワバも大きくなっていた。

亜熱帯の気候のせいか何でも良く育つ庭だったのだけれど、以前この土地に家があつて、ここで育ったというおじいが「いつも俺らがここでおしっこしてたからだな、肥料が効いてる！」といわれて大笑いした事もある。

先島さきしまと呼ばれるこの地方では終戦記念日は六月二十三日だった。

天音の誕生日でもあるこの日は学校も休みになる。

沖繩本島よりずっと早く、このあたりの島にはアメリカが上陸して、敗戦していたのだと聞いた。

毎年誕生日が来るたびに、島のことを、たくさんの出来事を思い出す。

島で暮らす・2

牛飼いの芳生君は、夫の宏と同じ年だ。島に暮らし始めて間もない私たちをよく訪ねてきてくれた。だいたいいつも夜遅く、ほろ酔いで、泡盛の一升瓶を持って。

「親戚も友達もいないところにやってきて、鷺野君たちがここでどうやって暮らしているか」といつも本気で心配してくれていた。

「自分の島に来たらさー。幸せにやって欲しいさー」と笑う。

ある夜。彼は活きのいい「とれたて」という感じの大きなイカをぶら下げてきた。

そう・・・まさに片手にイカ。片手に泡盛をぶら下げていつものように、ニコニコ戸口に立っていたのだ。

「イカスミ汁って食べた事ある？」と彼は言った。

「無い」と答えると、そのまんま我が家の台所に立つて、「あーごめんねエー。あちこち汚してしまっけどよー」とかいいながらイカをさばき、ほんとにそのあたりに真つ黒なスミを飛ばしながら、それでもあつという間にイカの刺身、ちゃんぷるー、イカスミ汁などを手早く作ってくれたのだ。

何しろ何もかも真つ黒なので、はじめてたべるのにはちよつと勇氣がいったけれど、これが実に美味しいのだ。芳生のやさしさと共に胃に染み入りわすれられない。

お酒に弱い主人と、子育て中で、お酒をのんでなかった私の二人は、さんびん茶（ジャスミン茶、島では良くこのお茶を飲んだ）などで島のご馳走をいただき、夜遅くまで話したものだつた。

芳生の牛舎は、我が家を通り越した上村の、海に見える小高い丘の上にある。

よく、牧場の帰りに野草をつんでくれたりもした。島で暮らした四年の間に、すっかりなじみになった「フチビ」とか「ゼンマイ」（といつても内地のものとはぜんぜん違うもの）、「オオタニワタリ」（シダの一種）などを始めて知ったのも、もしかしたら芳生が始めだったかも知れない。

「これ、内地にはないと思うけどよ。さつと湯がいて食べるとおいしいからさ」といつては、彼の手の中で少しあつたかくしおれたそれを差し出してくれる。

どれもこれも珍しく、友人、知人のいない南の島にやってきた私たちには、彼の訪問は本

当に嬉しくありがたいものだつた。

芳生は生まれつき少し体が不自由だったらしい。

今では殆ど分らないくらいだったけれど、生まれたとき育つかどうかを心配された彼は、村の十字路に置かれたそうだ。もし村の誰かが拾ってくれたら育つし、誰も拾わなければ育たない。

「子供は地域が育てる」という言葉そのままの村だ。

芳生は、村のおばあに拾われた。それから彼は、お母さんのところへ帰されてちゃんと育ったそうだ。だから芳生は拾ってくれたおばあの事を、いつも「僕の命のお母さんみたいなもんだよ」と言つてほんとに大切に思つていた。

芳生のお母さんは「かつちゃんおばあ」といつて、とてもやさしい人だった。

にんにくの黒糖漬けとか、紅芋べにいものてんぷら、その他郷土料理の上手なひとで、よくおすそ分けをいただいた。おばあには八人の子どもがいたのだけれど、昔、土方仕事でもらった一本の缶ジュースを自分は飲まないでもつて帰り、子供達皆で分けたんだ・・・と芳生から聞いた事がある。「それがホントに甘くてうまかったんだ」と。

かつちゃんおばあは、ほんとにそんな人だと思う。

ある時畑の帰りに我が家へ寄って、パイパイや冬瓜とうがんをたくさんくださった。

「いつもありがとうね、おばあ。ほんとに感謝しています」と言うと、おばあはこんな事を話してくれたのだ。

「家の子どもは何人かヤマトへ行っているサネー。きつとあの子たちも何処かヤマトで誰かの世話になっていると思う。あんた達なんかもヤマトから知らないところに来て、心細いと思うんだよ。

あんた達のこと、うちの子ども達とおんなじと思っているさ」。

私達はいつも、誰かのやさしさに助けられて生きている。そのことをいつもあたりまえだと思つて忘れてはいけない。何処かで誰かが誰かにやさしくした事は、いつかまわつて何処かの誰かをやさしい気持ちにするのだ。

島のひとたちは皆、ものすごく強く、たくましく、明るくてそしてやさしかった。

追記

芳生は最近、島で染織をしていた東北美人と結婚した。
お祝いの電話の向こうで、嬉しそうに照れている顔が目に見え、浮かんできた。
結婚式のあと、泡盛の一升瓶に大きく二人の写真をラベルに貼ったものを送つて来てくれた。村を挙げてのすごい結婚式だったそうだ。

幸せになつてね、と心から祈っている。

機織の先生

「機織がしたい」と思い始めたのはいつごろだろう。たぶん、まだ看護師をしていた独身の頃だったと思う。高知でホスピスの看護師として働いていた頃に出会った人、見送らせていただいた人たちの中に、物を作る仕事をしている人が多かった事もある。

それはお百姓さんだったり、漁師さんだったりしたけど、町で生まれ育った私にはひとつひとつが新鮮な出会いだった。

神戸の町では余り感じる事のなかった「根っこにつながっている人たちの生き様」というのもいい。

いつも何かまだある気がして、外に向かつて求めていた私が、自分の中に向かい始めた頃。私の染色体の何処かにあった何かが動き始めた。ほんの数世代前までは、何処の家庭にも機があつて、家族の衣服はあたりまえに手作りだったのだから、私の染色体にも染み込んでいたのかもしれない。「機織りがしたい」思ひは、結婚した頃どんどん大きくなっていた。

それでも、西表島にたどり着いたときには、本当に染織を始める事ができるなんて思っていなかった。当時、初めての子どもを育てるのに必死。まだ一歳に満たない長男を連れて新しい土地での生活。夢はまだ遠い気がしていたのだ。だから、石垣昭子さんの紅露工房（クール工房）を始めて訪ねたとき「あら。できるわよ。むかーしから、女は子供におっぱいのませたり、あやしたりしながら機に座っていたものよ」とニコニコしながら言われて、目からうろこ。肩の力が抜けたのを覚えている。

それまでの私は、目標を決めて、計画して、苦しくてもきちんと頑張れば夢はかなうと信じてやってきた。ところが、島での毎日は、「ほんと？ほんとにそれがしたいこと？」とまず問い掛けてきたのだ。そしてそれはあなたも他人も楽しい事？・・・というふうに。言葉でいわないのだけれど、昭子さんといるといつもまわりにそんな風が吹いている。私の中の価値観が、どんどん「素」になっていく時間だった。

そこでは、学歴や経歴よりも、歌が上手だったり、三味線が弾けたり踊ったり、人を楽しませる事のできるひとがすごい人であつたし、「ゆんたくする」といって会話を楽しむ事を一人一人が知っていた。

ある年、昭子さんを尋ねてニューヨークから美術館関係の人たちが大勢やって来られた。

工房に通い始めて随分経つてから分かったのだが、昭子さんは国際的に高く評価を受けていて、ニューヨークの美術館に作品がおかれている作家だったのだ。

普段同じ村に暮らして、公民館で踊ったり婦人会の活動をいつしよにしたり、染めた布をさらしにマングローブへ出かけると、真っ先に泳いでいる人だったし、子どもたちには、「あっこおばあ」と呼ばれていた気さくな昭子さんだったので、何も気づかずに何年か過ぎた頃の事だった。

ニューヨークから美術館主催の「石垣昭子さんとその工房を訪ねるツアー」の人たちがやってきたのは・・・。

通訳をかねて、アメリカの大学で先生をされている日本人の女性が同行していた。それでも、一行の人数が多かったからだろう。昭子さんに言われて、島をご案内する運転手兼補佐役として同行する事になった。

島をあちこちご案内して二日目のこと。

その大学の先生に「あなた。石垣昭子さんのお弟子さんでしょ？ 昭子さんって呼ぶなんて失礼じゃないの！」と叱責を受けた。確かに・・・。染織を教わっている先生ではあるし、その大学の先生だって「石垣先生」と呼んでおられる。同じ村に住んで数年。工房以外の島の生活でも他の人たち同様に「昭子さん」と呼び習わしていた私は困ってしまった。

不觉にも、外の世界から見た昭子さんという人のことを、殆ど何も知らないで、工房を訪

れるたさんの客人と応対していた事になる。

その場を何とか「先生」と呼んでみることも選択肢だったのに、なぜかとつさにそうできなかった私は、ころあいを見て昭子さんに事情を説明した。「どうしたらいいでしょう?」と聞く私に、昭子さんはとても面白そうに笑いながら「だーれが生徒か先生か、だれが生徒か先生か・・・てね」と突然めだかの学校を口ずさんだ。

「ものを作る人間はねえ。だれもがみんな先生。私は若い人のつくるものみて習うんだからさ。わたしも生徒なわけよ。そしたらね・・・先生って呼びたい人に言わしてあげようね」。

昭子さんはいつも発想が自由で、常に新しいものを作ることを本当に楽しんでいる。

「心が自由じゃないと、ものは作れないよ」と、いつも言われていた事を思い出す。

職人でも芸術家でもないわたしが、今こうして何とか一人で染織活動を続けていられるのは、最初にわたしを機に座らせてくださったのが、昭子さんだったからだ　と思っ

それは陽子ちゃんが「テキトー（適当にいいかげん?）」なのが得意だからでしょ・・・」
といわれそうだけど、いま、由良野の森の染織工房は、自由な発想で限りなく楽しい。

葛（くず）

由良野のゲストハウスがほぼ完成した二〇〇五年 夏。西表島から石垣昭子さんと当時
公民館長をしておられた 星^{ほし} 公望^{きみもち}さんが由良野にこられた。

星さんは島では「のーじ」と呼ばれ、島の手仕事にかけてはこの人の右に出る人はいない
というくらいの人だった。昭子さんは私に染織の世界のみならず、島の女の暮らしを丸ごと
と見せてくださった方である。島を出ると決まったとき、「陽子さんにあげた種がね、四
国でどんな風に育つのか楽しみだねー。こんなふうにあちこちに点が散らばって、線に結
ばれて皆やつていたらいいね」と言ってくれた。

その種を植える事になった由良野。

出来たばかりのゲストハウスに、一番初めに泊まれるのが西表島のお二人だったという
のはなんだか不思議だ。

由良野は昔、農協の稚蚕施設があったところで、五十年位前から昭和四十年代くらいまで
は人の出入りも多くてにぎやかな所だったそうだ。今も由良野の森に残る一番古い建物は

その当時のもので、養蚕農家の方が順番に寝泊りして居られた宿泊所だったらしい。その後、いまは宇和町におられる日本画家・小倉さん一家が約十年余、ここで暮らしておられたのだが、私たちが沖縄からこの地に来た頃には空き家になっていた。

昭子さんが森に泊まれた際、この小屋を「工房にしようと思う」と話すと、「どんなになるか楽しみだねー」と喜んでくださった。

森に残っていた約三町歩の桑畑を活用して、「蚕を飼ってみようと思っている」というと、昭子さんは森をみまわして即座に「葛をやりなさい」といわれた。

「シルクをやる人は多いけど、葛は手に入らないのよ。自分で作れる人ももういないかも・・・」「葛はいい糸なのよ。こんなにたくさんあるんだから、葛やりなさい」。

確かに。かつて手入れされていただろう桑畑は、長年放置されていたため荒れ放題で、高く伸びた枝につるが絡まり、雪の重さで倒れているのも多い。かつての由良野の桑畑は葛原といえるほどの状態だった。

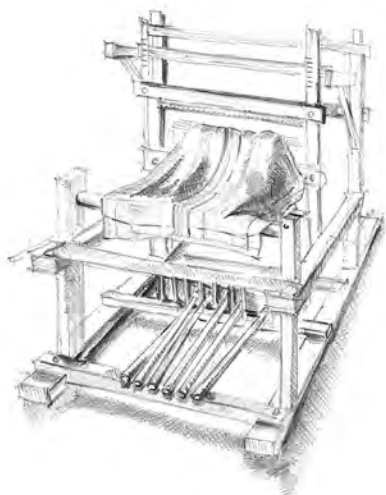
もともと、沖縄の工房に居たときも、私は織りの凝った模様や、技法よりもその素材に強く惹かれていた。工房の芭蕉畑を手入れさせてもらい、糸にする工程はほんとに楽しかった。昭子さんが「畑は世話した人のものさねー」といつてくださるのをいい事に、何度工房の芭蕉を糸にしたことだろう。他にも八重山上布の材料である苧麻ちよまの糸をつむいだりもした。

でも葛は初めてだ。今まで聞いたこともなかったし、もちろんどうすればいいのかも分からない。古い文献を調べて、初めての葛糸作りに挑戦したのが、二〇〇五年八月のことである。

二尋^{ひつ}くらい^{ひつ}の長さに刈り取ってきた葛のつるを大鍋で煮て川にさらす。次にススキ、ヨモギなどの青草で作った室に入れて発酵させる。これがなかなか手加減の世界なのだ。

染めも、糸を作るのもいつもこの手加減で教わった。どうもこの世界では、いい加減を知る感覚が大事みたいだ。

表皮がヌルツとしてきたらまた川に持つていき表皮と芯を洗い落として繊維の部分だけを取り出して干す。この何日かに及ぶ過程を、二歳にならない次男を連れて半ば遊びながらの作業だったけど、暑い最中の川遊びは楽しく、何とか糸も取れた。でも所々節が残り硬い糸だ。どうしてだろう…？



そんな時、「素材展が沖縄の南風原なまふらで開かれる」と昭子さんからお誘いが届いた。

「葛の糸も習えるから来る？」との事。

「何かやる」というとき、私のわがままをサポートしてくれる家族には、いつもほんとに感謝している。この時も、突然の話にもかかわらず、夫と義父母に小さい子ども達二人をお願いして、急ぎよ三日間の沖縄研修に行かせてもらいう事が出来た。

静岡県大井川の葛布。ここの当主の方が貴重な技術を伝授してくださった。他にも徳島のかじ布、福島の科布しなふや越後上布じょうふなど全国で僅か数人の手によつてかろうじて残されている日本の原始布の作り手が集結していた。

三日間、会場は時間を惜しんで学ぶ人たちで溢れ、すごく充実したワークショップだった。それだけ急速に、この膨大な時間と手間のかかる手仕事が、この国から失われつつあるということだろうか。一方で、本来なら門外不出とされていた技術を今、こうして何とか残そうという取り組みが始まっている。沖縄では糸をつむぐところから、染め、デザインから機にかけて織る事、さらにはそれを仕立て着る事まで一連の作業を一人で出来るように習った。それは祭りや、生活に必要な仕事の一部だったからだと思う。けれど、殆どの地域で分業化されてきたこれらの手仕事は、どこかひとつの工程が抜ける事で、存続が危ぶまれるようになっていく。

ともあれ、こんなタイミングで葛に再度挑戦することになった。

二〇〇六年六月。教わった通り時期を早めてやつてみた。今度は見事な葛糸が出来た。時期が違っただけでこんなにも変わるのかと正直驚いた。草木から色を取り出す仕事も新鮮な驚きの連続なのだけど、繊維もそうなんだ……。

「染めは出たとこ勝負よ」とよく言ってたつけ。

あたりまえなんだけど、目に見えないだけで、自然は刻々とその内部で色素や繊維を変化させつづけているということが、また私を好奇心の淵へ誘う。

島にいた頃、「ようこそ。終わりのない好奇心の世界へ」といわれたことを思い出す。

出来上がった葛の糸は麻と芭蕉を合わせたような、光沢のあるきれいな糸だった。

主にヨコ糸に使い、ふすまや帯、小物などになる布が織れる。あの織田信長の安土桃山城のふすまはこの葛であつたと文献にあつた。光沢のある贅沢なものだったに違いない。

葛の根は、風邪等に使われる漢方薬の材料でもある。里山では、葛原は貴重な資源の宝庫だつたろうと想像してみる。由良野で里山を作ろうという試みはまだ始まったばかりだけれど、一人の手に余るほどの葛原を前に私の夢は果てしなく続く。

葛の糸をつむぎ、機にかけ、織りあがつていく布に思いを馳せて。

手仕事

何もかもが便利になって、ボタンひとつでお湯が沸いたり、百円ショップでそれなりのものが手に入る時代に、気の長い手仕事を始めました。

蚕を飼って糸をずりだし、麻や葛から糸をつむぐ。

藍を育て、染料になるキハダも植えました。由良野に自生している染料植物を採取に出かけ、大鍋で煮て糸や布を染めたり、紺をくくって機にかけたり。

「こんなものが溢れているのに、何でいまさら物作りなんだろう・・・」

「今以上に何かを作り出すことっていいことなんだろうか？」

時折そんな思いにとりつかれながら、これまでずっと何年もやってきたような気がします。

手仕事は時間がかかります。仕事は遅々として進まないけれど、あせっても、手を抜いてもいけません。急げない・・・といったほうがいいのかもしれない。

あせったり、「まあいいか」と思ったところは必ず後でやり直す事になります。

ある一定のリズムで、まるで呼吸するように自然に淡々とやれたとき、ほんとにいい仕事がかどつたりします。たとえば一日中工房に座っていたとしても、出来る仕事の量はたかが知れているのです。

「人間が自分の手と目と体で出来る事は、ほんの小さな事だと教えてくれる。でも、その小さな事の積み重ねがある時をかけると、機械には真似の出来ない味のあるものになっている。」

私自身は伝統工芸士でもなければ、芸術家でもありません。暮らしの中に染織という手仕事があった、組み込まれているというのが理想です。

「機だけ織れても仕方ないよ。子供を育てて、ご飯を作って、いろいろやって機も織れるのがいんだよ。」という言葉に励まされてここまでやれたと思います。

そしてそれは、この森と水が可能にしてくれています。機道具を作ってくれる木工も必要です。木工の残り木はまた、染色の媒染や、薪としても使います。

今のところ、私にとっての手仕事は「謙虚でいられるための時間」を与えてくれる大事なものです。

一枚の布が織りあがるまでに、そのすべての糸は、なんどもなんどもこの手に触れます。

そのことが、祈りや、思いを込めた布が出来た所以だと思います。

沖縄には、海原に行く男の人たちの無事を祈って織られた布がありました。

女の人は不思議な力を持つと信じられていたのでしょうか、祈りを込めた布は命を守るものとして織られ、贈られました。きつと、かつてはこの国でも、何処でもそんなふうになんかの人が布を織っていたのではないかと思ったりしています。

この間は、地元の小学校に呼んでいただいて、子供達にも機織を体験してもらいました。皆が寄せてくれた感想文を読んでほんとに嬉しくなりました。何の足しにもならないようなことだけど、普段気がつかない何かに感動したり、不思議に思ったり、そんな事のきっかけになればと願っています。

工房には誰もが体験できる機をひとつ置くようにしています。

山の奥のそのまた奥に、何にも無いようなのに実は色んなものがある森がありましたとき。そんな事が楽しく感じてもらえれば最高です。

渇水

雨が降らない日が何日も続いた。由良野の水は天水だけに頼っているのが深刻だ。

二〇〇六年。夏から秋にかけては、ほぼ毎日の心配をして暮らしたのだった。

台風が来なかった。それはいい事なのだけれど、その年は雨も降らず、頼みの夕立さえなかった。

沢の水は干上がって、風が吹くと砂塵が舞うようになっていた。生活用水に事欠くくらいになると、畑も水をやらないので野菜も枯れかけた。特に夏野菜のキュウリやナス、トマトなどは水やり次第といわれていたのに、この年ばかりは畑にまく水もないくらいだった。

「トイレ、汲み取りにしとけば良かったねえー」。

家族四人のうち男三人（夫、息子二人）は、みな外で用を足すようにした。

洗濯はなるべく出さない。それでも最後の一週間は夫の実家に洗濯物を持ち込む始末。

食器もお皿ひとつで済ませたり油物を控えて、さらにその洗水は畑へ。 焼け石に水。

それなのに山の水の取水口には箸より細いくらいの水が少しずつ、ほんの少しずつ染み出すように流れていた。不思議だった。

雨が降らなくなつて三週間以上たった頃。由良野から二キロの山道を下りたところにある

森田の集落に住んでいる 父田^{ちちだ} 和子^{かずこ}さんからお電話をいただいた。

「もう由良野は水があるまい？ 今晚、風呂をわかすけんなあ。入りにおいでよ」との事。ありがたかった。

夕方、着替えを持つて和子おばちゃんの家にもらい風呂に出かけた。

和子さんのうちのお風呂は、となりのトトロにでくるメイちゃんとサツキちゃんの家のお風呂のような五右衛門風呂である。風呂は家の外にある。湯船には足を乗せて湯につかるための板が浮いていて、その上に乗つかつてつかる。子どもはもちろん初めてだし、私も子どものとき、田舎のおばあちゃんのところに入つて以来何十年かぶりの事。下から薪がくべられているので、熱い風呂釜に触らないよう気をつけて、「そーっ」とはいる。バランスよく入るのはなかなか難しい。水は井戸からくみ上げておられるとの事。ザーと流れ出るお湯がほんとにもつたいないと、こんなに強く思つた事は今までなかった。

初めての五右衛門風呂に子ども達は大喜びした。

「トトロみたいー」。「お父さん。家もこんなお風呂にしたらよかったのに」と長男。家も薪で焚くお風呂なのだけれど、入った感じは普通の湯船なので、作つたばかりのお父さんはちょっと悔しそうである。湯上りにはお茶やお菓子をいただいたりして、子ども達は、由良野では映らないテレビの前ですつかりくつろいでいて、もらい風呂をとて楽しんで

みにしていた。

この年の夏から秋にかけては、こうして何度かもらい風呂のお世話になった。

和子さんのお向かいの和泉^{いづみ}さんも、学校帰りの子供に「天音くん。今度はおじちゃんのうちのお風呂にもおいでよ」と声をかけてくださっていた。

本当にありがたかった。

里から二キロも離れているが、こんなふうにも気にかけていただいでいて、人に支えられて暮らしていける・・・ということのありがたさをつくづく感じている。

水は天からの恵み。雨次第である。

由良野に半世紀以上お住まいの伊藤さんによると「今までこんなに水が枯れるなんてことは一回もなかった」というし、里の方も「沢の水量が減ったなあ」とおっしゃる。森が雑木山から杉・檜ばかりになったことだけが原因ではないと思う。

雨が一ヶ月も降らないのだから。夏に夕立がなかったり、台風が来なかったり、冬の雪が少ないということなんかも関係しているのかもしれない。いずれにせよ、こんなに「水」について深く考えた年はなかった。

この年、それなのに町では断水はなかった。

松山では水道の蛇口をひねると水が出ているらしいと誰かが教えてくれた。

信じられなかった。

由良野ではその年、ゲストハウスに来られる方に「水持参でおこしください」とお願いしていたくらいだったから。きつとこの森以外のところでは、たくさん雨も降っているんだろう・・・降っていないのはここだけのようになって、なんだか見放されたような気持ちになったりもした。

山に暮らして、しばらく外へ出かけず、テレビも新聞も見ない暮らしをしていると、人間はだんだんまわりの自然に敏感になるような気がする。

今、自分の感じてる気温とか湿度。それに風向きとか鳥の声とか、虫の数、空の色。なんとなくざわざわつと（感じる）ことで、色んなことを判断するようになるから不思議だ。

沖繩で暮らしていたとき、島の人が「カジマイ」といって、「風がまわる」ということがよくあった。天気が急に変わる、その前に人々は「風がまわるよ」と教えてくれるのだった。不思議な事に、それは必ずといっていいくらいその通りになった。青空は一転真っ黒に変わる。海や空を見て、風を見ていると分かるようになるのだろうか。

天気の良い悪いを愚痴ると「天気のこととは云つてもならん」とおじーが笑った。

外洋に浮かぶ小さな島に暮らしていると、時折自分が裸でいるような、不安で、けれど感覚が鋭敏になるような気がする事があった。自然の変化に敏感になることは確かだ。

人が人に頼らねば暮らしていけないように、人は自然に任せてしか生きていけない。情報の薄い、この山の中で暮らして初めて心に染みた夏だった。

水がないのは困るが、人の温かさや親切が心に染みた。

水の循環について考え、生活がもつと簡略化できることも分かった。何に対しても「ありがたい」と思えるようになったら、幸せを感じる事が多くなった。

渇水の夏のおかげさまだと思う。

養蚕

由良野で最後に養蚕が行われたのがいつの事なのかはつきりは知らない。

半世紀以上ここで暮らしている伊藤のおばさんの話では、養蚕全盛期の由良野はそれにはぎやかであったそう。

養蚕をしようと思ったのは一にも二にも、ここに今もたくさんの桑の木と、当時の宿泊棟

だった建物が残っていたからだ。小学校の授業かなにかで蚕を数匹飼った事があるが、染織を学んだ西表島の工房では、もう蚕はやめていて、ほんの少し竹のざるに載せて飼っていたのを見たくらい。よくもまあ自分達だけでやってみようと思いついたものだと思う。

すべては手探りで始まった。

農協で県の農業普及センターを紹介してもらい出かけていったが、もう愛媛県中予では最後の一軒もやめた後で、養蚕の指導員はどなたも居られなかった。そこで、県内では唯一、南予だけになった養蚕農家の指導にあたられている方を紹介していただいた。この人なしでは由良野の養蚕はありえなかった、指導員 菊地さんとの出会いである。

養蚕に必要な道具がいろいろあることも分かった。今考えたら、あたり前のことなのに、のんきなものだ。あちこち訪ねて、ようやく父野川の宮崎さんに一式お借りする事ができ、何とか養蚕一年目が可能になった。宮崎さんは、父野川で木器を作っている甲斐さんのすぐ近くに住んでおられて、このあたりでは最後まで養蚕されていた方だ。今は倉庫にされているところに、手伝いさんがいるほどたくさん飼っておられたらしい。使い込まれた道具は、すぐに使えるくらいきちんとしてあってあった。

次の年、指導員の菊地さんが、「大洲で養蚕農家をやめる方がいるんだけど」と連絡を下

さった。紹介していただいたのは石丸さんというご夫婦。広い農家の庭には、たくさんの養蚕用のハウスが建てられてあつて、古い立派な倉の中には、養蚕道具がこれまたきちんと年代を追つてしまわれていた。奥さんの足が悪くなつたので「もうやめることにしました」とおつしやる。

早速、菊地さんをお願いして道具を頂きに伺つた折、蚕の事をいろいろ教えてくださった。お話の最中に奥さんが「もう、この人はお蚕さんのことになつたら・・・」といつて微笑まれる。

朝暗いうちから桑を摘み世話をする話。暑い夏の日には、涼しい風を送るため天井には扇風機が取り付けてある。蚕を載せる竹製のワクも、それを載せる台も全部手作り。

用心しないと、カラスやネズミが食べに来る話や、蚕は一生に一回だけ繭まゆを巻く前におしっこをする事。そのときのために、藁わら筵むしろをひいて新聞をおくと尚いいことなどなど。

石丸さんご夫婦にかかると、お蚕さんを飼うことは、まるで子育ての話を聞いているようで、その言葉一つ一つに蚕に対する愛情を感じた。「いのちをあつかうということなんだよ」と、お二人から道具と一緒に伝授された気がしている。

農家の方には笑われそうな、たった〇・一グラム（約二五〇〇頭）の蚕を毎年六月終わってから七月中旬にかけて飼つていて、今年、二〇〇八年で四年目になる。

普通、養蚕農家ではこの一〇〇倍くらい飼うそうだ。それくらいしないと採算は合わない

いということだろう。

絹の価格は、現在まゆ一キロで二五〇〇円とか二〇〇〇円。労働に見合っているとはいいいにくい。

私は毎年自分が使う分だけとは思って、タテ・ヨコ一反分を目安にしている。去年は、台風で大きな被害を受けた西表の紅露（くるる）工房に何キロか送ることもできてよかったと思う。

○・一グラムの蚕から、だいたい毎年五キログラム弱の繭ができるのだけど、菊地さんに言わせると「上等」なのだそうで本当に嬉しい。

どんなに慈しんで育てても、最終的にはその繭を煮て、糸をとるのが目的である養蚕。

「どうなんですか？」とよく聞かれる。私はいつも「桑を食べているその時期に全部のお礼をするつもりでやっています」と答えていた。それが正しいのかどうか分らないが、最近はずとずとする映画を見た。アラスカに住む猟師の物語。「The last trapper」（最後の猟師）というその映画のなかで、彼が生き物を殺す事についてこういつていたのだ。

「動物を殺すのはなぜかと聞かれたら、肉と皮のためだと答える。私は決して動物に謝罪はしない。感謝するだけだ」と。アラスカインディアンの教えだそうだ。森林の大規模な伐採で、彼もまた動物達と共に森を追われ、住処を追われていく話。

私たち人間は生きている限り、食べたり、飲んだり、着たり汚したりして日々を送る。それしか仕方がない。なにかの犠牲なしの「生きること」などないのだと気がつく。それでも生きていくことをやめないで、何とか折り合いをつけて、生きさせてくださいと祈る。

最終五齢になったお蚕さんは、もう十センチばかりの大きさになる。

いくら桑の葉で縁に覆っていても、あつという間に真つ白に這い上がってくる。ザーつと雨の降るような桑を食む音が工房の土間に響く。

毎年、みんなと一緒に大きくなれない「オクレ」と呼ばれる蚕を、別のところに移してゆつくり育てていると、殆どが途中で死んでしまうのだが、中には小さなまゆになったりするものがある。なかなか自分の気に入った部屋を探せないお蚕さんを、「まぶし」と呼ばれる繭を作る部屋にひとつひとつ入れてみたり、作業は夜中にまで及ぶことがある。

「母性本能で蚕を飼うのはやめてください！」と家族には半ばあきらめられながら、この時期せつせと蚕室に通う。

すっかり繭の中に見えなくなつて、しーんと静かになった工房の土間がひんやりしている。梅雨のあける頃。約一週間で糸を吐き終えさなぎになつたら、美しい絹の糸になる。

サワガニ

広辞苑によると、「日本全国の溪流、河川の砂のなかに穴居するカニ」とある。

由良野の水辺にも春、水のぬるむ頃をすぎると、雨を待っていたようにぎわぎわと姿を見せる。梅雨の頃など、バケツを持って小川沿いの道を歩くと、バケツがすぐにいっぱいになるくらいだ。

雨の日のこども森林博士号講座で、サワガニを捕まえた子どもたち。講師の山本栄治さんに教えてもらって、オス、メスの見分け方から食べ物、暮らし方などとても詳しい。のろのろしていたらニワトリに食べられてしまったりする。ここではサワガニはとても身近な生き物だ。

二十三歳の頃、神戸にあったガンセンターで看護師をしていた。勤めていた病棟に同じ年の女の子が入院していた。骨肉種を患って数ヶ月。何度もの手術の末の転移。本人も病名を知っていて、抗がん剤や放射線治療など、あらゆる治療を受けるための入院だった。

同年代の娘同士、私たちは仲良くなって、意気投合し、いつしか仕事を超えて色んな話を

するようになっていた。もし病氣にならなかつたらしたかつたこと、夢なんかについても。

彼女の家は確か、兼業農家だったのではないかと思う。神戸の町は、新興住宅地の開発に震災が追いうちをかけて、最近は随分変わってしまった。裏六甲あたりの小さな町も、今はすっかりニュータウンの波にのまれてしまって、当時の面影は殆どない。

その頃まだ、そのあたりには田んぼや畑が残っていて、単線の電車が、のどかに菜の花をゆらしながら通り過ぎるような田園地帯に彼女の家はあった。

私は大阪の下町に生まれて、小学生のときに、山を切り拓いてできた神戸の公団住宅に引っ越してきた。開発途中の新興住宅地だから、思い出す景色の中には、すぐ隣りにいつも「田舎」があつたのに、村の景色は常に別世界で、何となく外から眺めている絵の中の場所だった。初めて彼女の家のあるその場所に入り込んだときの、不思議な感じを今も鮮明に覚えている。

彼女の家に行ったのは サワガニを探すためだった。

もう殆どベットから起き上がることもなく、食欲も落ちて衰弱していく日々、彼女がふと「サワガニが食べたい」と言ったのだ。

ちやうど部屋にはお父さんがいらした。目が合った。

「小さいとき、サワガニ捕まえてきては食べとつたからやなあ。あんな事ゆうとんや・・・」
「お父さん！ それ、何処にいるんですか？」

「・・・さあ。家の周りの沢にはおるとおもうけど・・・いまごろおるかどうか。」
「行きましょう」と私。

若い頃は今よりずつと物を知らない上に、じつくり考えたりもしなかった。

季節はもう水の冷たい秋だったと思う。季節が悪かったからなのか、それとも、その頃すでにどんどん開発の進んでいた地域だったためなのか、若い彼女がサワガニをつかまえたような沢は、泥水が流れ込んだり、なくなっていたりしていたこともあつて、とうとうサワガニは一匹も見つからなかったのだった。

あちこちの市場や、知人にも聞いてまわったけれど、サワガニはいなかった。

あれから二〇年以上が過ぎて、私は今、サワガニがたくさんいる森で暮らしている。
季節がきたらまた、子ども達がサワガニをバケツいっぱいにつてきて、あつちの沢、こつちの水溜りに放して遊ぶのだろう。

「お母さん！ サワガニとじゃんけんしてもいっつも勝つんよ！」と子どもが嬉しそうに

話してくれる。通学途中、バス停までの2キロの山道で、お父さんと何匹ものカニとじゃんけんして盛り上がり、楽しいらしい。

私も子ども達もまだ、サワガニを食べた事はない。このあたりでは食べる習慣がないのかも知れないけれど、食べたという話も聞いたことがない。

毎年、水のぬるむサワガニの季節がやってくるたび、あの日の病室と彼女の事を思い出す。

栗拾い

別荘をのぞいては、由良野で唯一のご近所、伊藤さんの家には、広い栗畑がある。八十歳になる伊藤のお婆さんはすごくお元気で、今も毎年秋には栗を出荷している。

お婆さんが由良野にお嫁に来た頃、すでにこの地には開拓に入った八軒ほどの人たちが住んでいて、雑木山の木を切つては、炭焼きをし、畑を広げていたそうだ。

お婆さん達は牛を使って、沢沿いには段々の小さな田んぼもこしらえた。田んぼだったところや、開墾したその土地に、後から植えた栗の木が今は大きくなっている。

「栗拾い」というと行楽のイメージだが、農家の出荷のための栗拾いというのはぜんぜん違うものだ。

伊藤のおばさんは毎年、私たちが養蚕をする頃になると、朝の早い時間から（時には私たちより先に工房についていたりする）蚕の世話を手伝ってくださる。かつて、由良野が養蚕でにぎやかだった頃には、ここで仕事をしていたというおばさんは、心強い味方だ。

私たちは、何のお返しも出来ないでいるので、秋の栗拾いをお手伝いさせていただく事にした。

「まあ、ゆつくりおやりよ」。とおばさんが笑う。私たちのいで立ちは、作業着に軍手。長靴をはいて、手には火バサミと栗を入れる大きな籠。

まだ幼稚園に行っていなかった次男も、勇ましいいで立ちだが、こちらは主に栗の木に登ったり、バツタ探しにいきがしい。そこに午後、学校から帰った長男も加わってお手伝い隊がそろろう。

たかが、栗拾い。されど栗拾い・・・これがいざ始めてみると案外大変なのだ。

栗畑は何しろ山の斜面だ。おばさんや、町から手伝いに戻られるおばさんの娘さんが、草

刈を入念にされているからいいようなものの、草葉に隠れた栗を拾いつつ、斜面を登り下りすること数時間。

拾えば拾うほど籠はどんどん重くなる。重くなりすぎて持てなくなる前に、納屋の中にある選別台へザーツと落す。こうやって一日分たまった栗を夜なべで、大きさや虫食いなどを選別して出荷している事を思うと、今までスーパーで買っていた栗の値段というものが、私の中で何倍にも跳ね上がっていく。

栗というのは、あの硬いイガの中に二、三個ずつきちんと並んでいるのだが、熟してイガが茶色になるとポトリと落ちてくる。収穫は、この熟したものを拾うという作業なので、どんなにたくさん実がなつていても一度に終わらせたり出来ないものだ。それでも熟すピークというものがある。朝から昼にかけて落ちたものを夕方までに人間が拾い、そのあと、夜中に落ちたものはイノシシなどが食べに来る。手入れしている側としては、「イノシシにくれてやるのは惜しい」わけで、日のあるうちは必死になつて拾うことになる。この年、伊藤のおばさんに私たち家族が加わって拾った栗は、例年より数は少ないが大粒だという事だった。

私たちは、このピークのときだけ何日か手伝うのだが、毎日毎日、栗の熟れ具合を見回り、イノシシと競争になる秋、伊藤さんは毎日何度も山を歩くのだ。足腰の鍛えようが違

うはずだと感心しきり。「もうピークはしまいじやろう。明日はもうかまんよ」。そういわれて、その次の朝私たちは家にいた。

「あんたんとこのニワトリが家の山でやられとるぜ」。

お昼前、おばさんが知らせにきてくれた。

昨日までみんなで栗を拾っていた一番上の栗林で、今朝、小屋の戸を開けて放したばかりの雌鳥が一羽、まっすぐに足を伸ばして死んでいる。どうやらまだ朝もやのかかる中をバツタを追って栗山までいったらしい。昨日はおおぜいで殆ど拾ってしまっていたから、栗が少なかったのだろうか。イノシシには不満だったのだろうか。夜明けを過ぎてもまだ栗を探していたに違いない。

いらいらしている所にやってきたニワトリは、目障りだったのかもしれない。ニワトリのくびと羽の付け根に深く牙の刺さった傷があった。

一瞬の死であつたろうと思える事が救いといえはいえた。

イノシシは、よい栗しか食べないそうだ。

虫食い栗は、人だけでなくイノシシにも嫌われるものであるらしい。

選別の末、出荷できない栗を頂いた。虫食いの部分を取り除くと食べられるので、急いで水に漬ける。そうしておくとも虫が出て、栗の皮もやわらかくなりむきやすくなる。皮をむいたら加工してしまうか、何回分かは冷凍する。

それでも尚、捨てられる虫食い栗は、夜中のうちに狸などがやってきてきれいに食べて無くなってしまうのだそうだ。寒い冬がやってくる前のこの時期、栗は多くのいのちを養っている。

由良野に自生していた柴栗は、一昨年の台風で強風を受けて倒れてしまった。

戦前、山に雑木がたくさんあった頃は、そこに栗の古木があつて、新しく家を普請する際に使われたと聞いた。イノシシの住む奥山では、「野のもん」だけの栗が落ちたのだろう。

「一番上の段の栗はあんたらが好きにお拾いよー」

とおばさんが言ってくれたので、早速子供たちと大粒の栗を拾いにいった。

栗の木の下には大きな大きなイノシシの糞があちこちにあった。

小さな籠にいっぱい拾うと、「後はイノシシに置いとこうね、おかあさん」と子供たちがそういった。

にわとり物語

「もう一回きいてくるか・・・」

十二月だというのに陽ざしの暖かい日。

ジローは又管理人をさがして歩いていました。

「ちえつ。こんどは工房にいるのかー。全く・・・。一体全体俺のメンドリ達をどこにやちやっただー？」

ジローは、管理人をみつけると ゆっくりその大きな羽をバタつかせました。

ジローはイサブラウンという種類のニワトリです。大きなオンドリですが尾羽がありません。由良野にくる以前いたところでは、三羽いたオンドリのうち最下位で、メンドリ達にお尻をつつかれ、とうとう丸裸になってしまいました。

ここにきて半年。一緒にもらわれたメンドリ四羽がつつきをやめないのを見かねて、管理人が小さなジロー専用の小屋を作ってくれたので、今ではようやく赤くただれていた鳥肌もすっかり羽毛で隠れるまでに生えたのです。でも・・・。半年待つてもとうとう尾羽は生えてきませんでした。尾羽のない丸い体のオンドリっていうのは、何かこう太ったおじ

さんのような感じです。

「コケコッコ」朝の時を告げるのがジローの仕事です。もちろんそれだけではありません。別棟で寝ていた四羽のメンドリが起きだしてきたら一緒に森を歩きます。えきを見つけたら自分は食わずにメスに教えてあげるし、メス同士がけんかをしたら、仲裁にだって入らなければなりません。最近やってきた小軍鶏の夫婦や、土佐ジローのメンドリ達も仲間に入れて、なかなか頼りにされている毎日。今朝も、ようやく三番鶏のときを告げた後小屋を出て、いつものようにメンドリたちの小屋に行ってみると……。

「いない?!」小屋は空。

最近やってきた地鶏達五羽が、早くもエサをついばんでいるのに、俺のメンドリ達の気配がない。「おかしいなあ。何処にいったんだー?」。

小屋の裏も、いつもの水場も、卵を産む箱の中ものぞいてみたけれど何処にもいない……。

「おいおい……どーしたんだあ?。こりや管理人に聞くしかないな」。

決心したジローは、こうして朝から何度も管理人を訪れては、メンドリ達の居場所を尋ねているのです。

『あーまた来た……。』。ゆつくりと真つ直ぐこちらに向かってくるジローが目に入りま
す。胸がつぶれそうに辛く、申し訳ない気持ちでいっぱいの管理人。

実は昨夕、管理人宅では家族のお誕生日会があったのです。ささやかながら何人かのお客さんもあり、いよいよ最後の客人を送り出したそのとき。車のライトの先に、扉が開きっぱなしの鶏小屋が映し出されました。「うそ？！　しまった」。

日中、森を自由に放し飼いしているニワトリ達は、夕方になるとそれぞれの小屋に帰ってくるのですが、日暮れ前に戸を閉めてやらねばなりません。イタチやテン、それにタヌキなどの夜行性動物がいつも狙っているからです。

（夕方遅くまで遊んで、なかなか帰ってこなかったメンドリ達の小屋だけ忘れてた・・・）無駄だと知りつつも、懐中電灯をもつて森を探しました。長い時間が過ぎました。四方に向かつて点々と散らばった羽が続き、森のおくへ消えているのが分かっただけでした。たった一夜のうちに四羽。そういえばここ数日、夕方になると黄金色のテンが走るのを見かけていたつけ・・・。（ごめんなあ・・・）。

『ジローには謝るしかないな』。管理人は心にそう決めていました。

そして朝。管理人の前にやってくると、ジローはぴたりとその歩みを止めました。

「・・・で？　どこ行つたの、いないんだけど」。

『ごめんな。ジロー。僕が悪かった。ね？　本当にわるかった・・・。戸を閉め忘れたんだよ。やられたんだと思う・・・何かに。ごめん』。

片膝をついてしゃがむと、ジローとは目線の高さも、そう違わないくらいになります。

ちよつと小首をかしげて「クークククク」とジローが低い声を出す。

数秒したら静かに立ち去る。しばらくしたらまたやつてくる。

今朝からこれで何度目だろう……。

「ニワトリは三步あるいたら全部忘れる」などとニワトリのことを形容する人もいますが、ここのニワトリに限って言えばあれはうそです。

「ちえつ……。どうやら本当にこの管理人の言う通りらしいな。メンドリ達はいなくなっちゃったんだな」。ジローは 何度目かによく納得したようでした。

次の日。朝一番にもう一度だけメンドリ達の寝ていた小屋を見に行つた後、ジローはもう二度と、管理人のところへメンドリ達の事を聞きにやつてはきませんでした。

このあとの長い冬のあいだ中、今まで別の小屋にいた小さな地鶏たち五羽は、ずっと尾羽のないオンドリ、ジローの小屋で眠るようになりました。

六羽は本当に寄り添うように眠ります。それはまるで、ジローの寂しさをいたわる行為のように見えて、由良野の森の住人は（もちろん管理人は一番辛かったです）みんな、しーんとした気持ちになって、この年の冬を過ごしたのでした。

今ですか？ 春、新しいメンドリ達がやってきて、たくさんのお雛もかえました。
ジローの子供たちも孫たちも数は減ったり増えたりしていますが、しあわせそうです。

満月の夜と雪の日は

由良野の自宅は、標高約六二〇メートルにあります。

森の一番高いところは七五〇メートルくらいでしょうか。二階の寝室の窓からは、由良野の森の山々が見えます。

周囲には伊藤さんの家のほか、別荘が二軒ありますが、夜遅く明かりが灯っていることは殆どないし、由良野には外灯もないので、森の夜は月の明かりだけで照らされます。

新月の夜。それは「星が降るような」と言う表現がぴったりの光景です。

残念ながら星座に詳しくない私たちでも、思わず見とれてしまい、首が痛くなるほど見上げてしまう、満天の星空です。

久万高原天体観測館の学芸員で、愛媛新聞社から「星空８８話」という本も出しておられ

る、中村 彰正さんに由良野で天体観測会をしていただいた事があります。

天体望遠鏡で月を見た後、夏の星座をたくさん教えていただきました。誰かの「首が痛いなあ」の声に、とうとう最後はゲストハウスの前にごぎを長くのばして、参加者みんなその上に寝転んで、飽きるほどの時間そうしていたら、流れ星がいくつも空を横切りました。それに、想像以上にたくさん的人工衛星が飛んでいる事も知りました。

月はいつも、東の谷のむこうの山から、まるで絵のように現れます。

この場所で、このタイミングを知っているかのように、絶妙の角度でゆつくりと空にのびります。

夏の夜、月のでた頃に外へ出ると「ヒョウー」、「ヒューー」と微妙に音の高低をずらした、不気味で不思議な音が森を往来します。声の主はトラツグミ。

「ぬえのなく夜は恐ろしい」で有名になった、通称「ぬえ」の鳴き声です。

確かにこの声の正体を知らなければ、暗い森の中で、きつと恐い何かを連想させるのに十分でしょう。声は聞こえても、殆どその姿をみる事はないと言われている事も一因かもしれません。

一度、昼間に畑近くを歩いている姿を見たことがあります。ツツーと歩くとピタと静止。変わった動きをする、ヒヨドリより一回り大きい鳥でした。ミミズなどを食べるらし

い。あの不思議な音程の声は、いつたい何を語り合っているんだろう。

月夜にぬえの声は一層、想像を掻き立てます。

満月の月明かりの夜。

もしも森が雪でおおわれていたら、その場に居合わせた人はみんな、きつとこの世のものとは思えない景色をみる事ができると思います。

森は空も地も、まるで染めたように真つ青にきらきら光るのです。

月まで行った宇宙飛行士が「地球は青かった」と言った話は有名ですが、月まで行かなくても自分が今、青い星地球にたっていると分かる瞬間。

声もなく、この光景を窓から眺めていた子どもたちが「・・・こんなとこに暮らせて、ありがとうだねえ」といいました。

こんな夜は、森の生き物みんながこの青さに見とれているのでしょうか。

とても静かな森の夜です。

この静けさが守られますようにと祈らずにおれません。

第三章

共生林づくりと活用

山本栄治

屋地整地

由良野の森での最初の仕事の一つが屋地の整地である。由良野の森整備のために購入した中古ミニユニボ（小型パワーショベル）の初仕事でもある。現在のゲストハウスと鷺野邸が建っている場所は旧養蚕施設を取り壊した跡地であり、駐車する場所もない状態であった。二〇〇三年六月三日に届いたミニユニボを使って、翌日から整地と旧桑貯蔵庫両側の雑石積みと土砂の取り除きを始めた。旧桑貯蔵庫は刈り取った桑の葉を新鮮に保つため、湿度を保って室温が高くなりにくいことが大切である。両側に雑石を積み、土で埋めたのはそのためである。室内の壁から浸み出した水が床に溜まり、天井のベニヤ板はぼろぼろに朽ちた状態になっていた。たくさんのカマドウマ類も住み着いていた。コウモリの住み家としては好い環境かも知れないが、道具や機械類を保管するには好くない。

今後の利用を考えると、室内は乾燥した状態の方が良い。積んである石と、取り除く土の量が無駄なく処理するため、深いくぼみには石を埋めてから、土で整地するようにした。どうしても埋めることのできない大きな石は片隅にまとめ、大部分は屋地の雑石積みを利用した。

屋地は水平になるように整地するのが基本であるが、場合によっては水平にしないこと

もある。地面が水平になっているということは水たまりができてやすいということでもある。ここの屋地も表向きに（南側）若干の勾配をつけて、水たまりができてにくいように整地した。土木屋さんや左官屋さんが車庫や土間のコンクリート打ちをすると、水平に仕上げる人が多い。しかし、私は土間・車庫・軒下の犬走りにコンクリートを打つ場合、外側に向かって二〜三％下がるように勾配をつけることが多い。

勾配で一％というのは、水平に一〇〇センチの地点で垂直の高さが一センチの差ができる傾斜のことである。若干勾配をつけておくと、雨水や洗い水が速やかに排水される利点があり、実生活での不便さはほとんどないようである。決められた通りにきちんとしたものを作ることは「確かな技術」であるが、現場・現状・将来のことも考慮して工夫するのも「新しい技術」ではないかと思われる。

由良野の森植林

由良野の森の初期の大きな仕事のひとつが植林である。放置されてササとクズが密生した桑畑を開墾し、広葉樹を主とした林に変えていくというのである。二〇〇三年の四月十四日からチェーンソーを使ってクワを伐採し、その間に広葉樹の苗を植える。植えた木の種類はエノキ・ヤマザクラ・イロハモミジなどである。

植える木を選んだ理由はいくつかある。まず、クワを伐採しただけの状態だから雑草や

クズに負けないように、生長が良い樹種であること。由良野の森に関わる人の関心とやる気を持たせるためにも「一年でこれだけ大きくなったなあ」という関心を持たせることも大切なことである。

だからといって人の都合に合った樹種なら良いというものでもない。まずは、本来その場所に適しており、育てる目的に合った

樹種にすることである。エノキは最も生長の早い広葉樹のひとつであり、オオムラサキなどの昆虫が繁殖し、秋には多数の実をつけて鳥類などの食料になる。ヤマザクラは花に多くの昆虫が吸密に訪れ、

葉はタマムシやコガネムシ類などの食料になる。イロハモミジは秋の紅葉を楽しむ目的もあるが、開花時期には多くの種類の昆虫が密や花粉を食べに集まってくる。人の楽しみと野生生物の生息環境を併せ持った植林の一例にするためである。

二〇〇三年九月からは植林用地の開墾を行った。クワやササなどを掘り起こし、掘り起こした土は前後左右に転がすようにして土と植物の根を分離させ、土をふるった状態になった木や草を集める。土離れが悪くて嫌になったり、新しい発見があつて喜んだりしながら第一次植林用地ができた。

二〇〇四年四月、一回目の植林活動が行われた。地元住民の家族も含め、多数の人が参加してコナラ・クヌギ・アラカシの苗を植えた。コナラ・クヌギは昆虫の生息場所にするだけでなく、除伐・間伐しながらシイタケ栽培体験や蒔きストーブの燃料に利用する目的



もある。アラカシは林床に届く光を制限してササの発生を抑制する目的で植林したが、冬の寒さなどで生長が抑制されている。標高的にはウラジロガシの方が適していると思われる。

最近の林業政策では「混交林」ということがよく使われるようになった。異なった種類の木または針葉樹と広葉樹が「混ざり交わった状態の林」ということである。間違われそうなのが原生的自然林のように高い木から低い木までいろんな高さの木で構成されている森の構造を「階層構造」、スギ・ヒノキの成木林に見られることがある高木と低木が組み合わさった林を「二段構造」の林という。由良野の森ではコナラ・クヌギ混交林状態では植林していない。

コナラとクヌギを同時に植えると、最初の三年くらいの間はコナラの方がよく生長する。生長の遅れたクヌギは日当たりが悪くなつてさらに生長が悪くなり、最後には枯れてしまう。クヌギも約三年目以降は生長が良くなるので、混植した林を育てる場合はクヌギが育ちやすいような手入れが必要である。

植分けをしたもうひとつの理由は、子供たちや初心者にはコナラとクヌギの違いに気づいてもらうことである。ドングリの形、葉の形、紅葉したときの色の違い、樹皮のどのような、気づきやすさや見比べやすさも種類ごとに植えた目的のひとつである。

つる切り

由良野の森最初の仕事のひとつが「つる切り」である。桑畑を放置して数年が経過しているらしく、クズ・アケビ類・スイカズラ・ヤブガラシなどがクワをはじめとする木々を覆い隠すようになっていく。とんでもない藪の状態になっている所も少なくない。由良野の森東側の谷に沿って残っている木に絡み付いているつる植物の茎を、手鋸と枝打ち用の鎌で切っていく。びっしりと絡み合っていて身動きがとれないこともある。とにかく我慢の境地で一本一本切っていくしかない。茎を切断されたつる植物の葉は次第に萎れていき、つる植物によって隠れていた木のようすが分かるようになってくる。高さ5mほどに成長したクヌギもつる植物に覆われて瀕死の状態になっていたが、次第に枝葉を増やして二〇〇六年頃には元気な状態になった。シロスジカミキリ幼虫によって穴の開いたレンコン状の幹になっていたため、二〇〇七年の台風で根元付近から折れてしまった。木は根・幹と枝葉のバランスが大切なことを示した例である。

二〇〇六年には由良野の森上部にある雑木林を「ゆらの」が購入した。外見上は健全な雑木林に見えるが、谷付近を中心としてつる植物が高木の樹冠まで覆っていることもあった。高木ではコナラが多く、次にクヌギである。立枯れた木の多くはクヌギである。クヌギは低山地の日当たりの良い環境を好む「陽樹」と呼ばれる木のひとつである。日陰状態の環境には抵抗力が無く、他の木よりも枯れやすい。樹冠につる植物が繁茂した場合も

クヌギは他の樹種より枯れやすい。クヌギとコナラを混生して育てる場合は、クヌギをより大切にする考えで手入れしなければ、クヌギは自然淘汰されて生き残れない

この雑木林に多かったつる植物は、ヤマフジ・クズ・ツルウメモドキ・アケビ・サルナシなどである。スギやヒノキの人工林ほどではないが、クヌギやコナラを主とする雑木林も手入れが必要なのである。

木の生長を調べる

二〇〇三年と二〇〇四年は「ゆらの」会員や地元住民などでコナラなどの植林を行った。こども森林博士号講座では木の生長を調べる体験も取り入れている。植林した苗は1mほどである。一年目は根を張ることに栄養を使うので芽はあまり伸びない。根がしっかりと張ってくると生長する勢いも良くなる。コナラは植林して二年後から生長がよくなり、自分たちの身長よりも高くなる。「大きくなったなあ」と実感する。

林野庁などのパンフレットには樹高の測り方が書いてある。運動場の片隅にある木の高さを測るのであればできるが、森林の中では枝葉で梢はほとんど見えず、測るための距離が取れないこともある。森林内での樹高の測り方は、実際的にはあまり意味のないことである。

高さだけが木の生長を調べる方法ではない。高さを調べるのが困難な大きさに育った木

は、胸高直径を測る体験学習をする。胸高は、子どもたちが測りやすいように地上一三〇cmにした。直径の測り方は、手作りの輪尺（直径五〇cm以下）と専門家用の輪尺（直径一〇〇cm以下）、直径巻き尺を使ってみる。

三・四人毎のグループになり、測る人と記録する人が交代しながら測定していく。輪尺の当て方や目盛りの読み方に戸惑ってしまうかと思っていいたら、教えてもらいながらすぐに慣れてきた。大きな木は誰もが測つてみたくなるので、一人一人が交代して測定した。小学生の上級生が下級生の面倒をみるようになる。こうしたことが一番の勉強になるのかも知れない。

久万高原町露峰の大元八幡神社の間伐が行われた時には、巨木の胸高直径を測り、切り株の年輪も数えてみた。樹齢一〇〇年を越えた木の大きさと生長する年数の長さを感じる機会になったと思われる。

木を育てることは、スポーツや音楽と同様に日頃の練習の積み重ねである。よく観察して工夫すること、失敗を検証して改善することを繰り返すことで上達するのである。由良野の森では木材を育てるためではなく、枝打ちなどを体験させるための植林もしている。

林業教室

近年、小中学校から一般の人までを対象とした枝打ち・間伐などの体験学習が多くなっ

たようである。林業に対する関心が高まるのは良いことであるが、最後に「森林の大切さを理解した、自然保護の重要性を学んだ」と締めくくるのはどうだろうか。まるで「林業は森林の自然を保護する職業」と言いたいようである。

基本的にスギ・ヒノキの人工林はダイコン畑と同様な性格のものではないだろうか。目的に合った木を育てて収入を得る。少しでも高収入になるような木を育てるために大切な作業が草刈り・枝打ちや除間伐である。苗木の時は草を刈って日当たりを良くし、つる植物が絡みついて幹が曲がらないようにする。人の背丈より高く育つてくるとつる切りや下枝を切り落とす。その後は生長に合わせて枝打ちを行い、必要に応じて除伐を行う。柱材などの収益が見込める木は間伐をする。ダイコン畑の雑草を取り、生長の良い苗を間引くことと同様なのである。

枝打ちをする時に最も注意することは安全の確保である。こども森林博士号講座で枝打ちをする時は、対象者の年齢、知識や技術の程度によって作業の内容を決めるようにしている。由良野の森で行う場合は小学生が対象なのではしこには登らず、「はやうち」という大きな鋸を使った。

上級者になると一本の木でどの程度の枝をきるか。隣接する木の大きさや枝の張り方を考え、隣接する木の生長を考えながらどの木の枝をどれだけ落とすかを考えるようにする。除伐する時も同様に隣接する木の状態を見て判断することが大切である。不良木だからといってまとまった状態で切ると、残った良い木の枝が片方に偏り、幹が曲がること

多い。「無用の用」としての役割を果たすことも必要である。林縁の木は風雪害を防ぎ、林内の湿度を保って内部の木を良木に育てる役割を果たしている。

人工林の枝打ちや除伐は良い木を育てて収益をあげるために行うもの。人工林では環境の悪化を招きやすいからこそ、健全に管理しなければならぬことを認識する必要がある。

由良野の哺乳動物

ネズミ

由良野の森にはアカネズミ・ヒメネズミ・カヤネズミの三種が生息している。しかし、姿を観察することはほとんどできない。そこで生息を確認するのに役立つのがフィールドサインである。

カヤネズミはススキ・エノコログサ類などのイネ科植物が茂った草地を好むが、ササ群落やスギ壮齡林内のスゲ群落などにも生息している。フィールドサインとしてよく見られるのは巣である。葉を裂いて繊維状にし、丸い巣を造る。巣の入り口は二ヶ所あり、ヘビなどに襲われた時の非常口になっているものと思われる。背丈の高いススキやササ群落では地上1mを越える所、春先の草地やたびたび草刈りをして背丈の低い草地では地面近くは巣を造っている。冬期には地下のモグラ穴などに葉やススキの穂などを持ち込んで巣を造る。棚田などでは水田の端の方に巣を造っていることがある。農家からは「もみを食べ

る」と嫌われることもある。しかし、もみを食べる割合は低く、昆虫を食べることが多いようである。飼育してみるといりこなどの干物もよく食べる。

カヤネズミは神経質なようで、虫かごのような狭い容器で飼育すると数日での死亡や共食いが起こることもある。衣装ケースよりも大きな飼育容器にススキやエノコログサ類を厚めに敷いておくと、敷き草の中に巣を造って安らぎの場になるようである。衣装ケースの中で飼育していると、何度も繁殖したことがある。

森林・農地周辺や家屋内などにはアカネズミとヒメネズミが生息している。アカネズミは丈夫な歯でオニグルミの硬い殻を削って実の両側から丸い穴を開け、栄養豊かな中身を食べる。このオニグルミの食痕からアカネズミの生息を知ることができる。積雪した翌朝にはネズミが通ったフィールドサインを見ることができる。二本足で跳ねた跡と尾を引きずったような跡がついている。

ヒメネズミはアカネズミより少し小さい。森林に適応したネズミで、ブナ林にも普通に生息している。木登りが上手で、小鳥用の巣箱に広葉樹の落ち葉などを運び込んで巣にすることがよくある。

近年、中山間地の家屋内にもクマネズミやドブネズミが生息するようになってきた。衛生動物、外来種、害獣という問題もあるが、コードやケーブル線を齧って被害を及ぼす例も増えている。都市環境に生息するクマネズミなどは、殺鼠剤に対する抵抗力を持って生態が変化した「スーパーネズミ」になりつつあると言われている。有害化・敵対化しない

関係が保たれることが望まれる。

カエル

由良野の森にはニホンヒキガエル・アマガエル・タゴガエル。ヤマアカガエル・トノサマガエル・ツチガエルが生息している。池ではヤマアカガエルとトノサマガエルが、雑木林などの林内ではタゴガエルが比較的良好に見られる。

由良野の森の屋地を整地する時、水が浸みだしている水たまりがあった。水辺はいろいろな生物が生息する環境になるので、土を掘って池にした。頑丈なコンクリート部分は人がくつろぐ場所として残した。最初の年はカエルも多くなかったが、時が経過するにつれてカエル類も多くなった。繁殖した仔ガエルが、産卵のために帰ってくるようになったものと思われる。

ヤマアカガエルは十二月下旬頃から池に集まり、一月初旬には産卵が始まる。鮮やかな橙黄色の体色になった大きなお腹の雌が、積雪した雪の上を移動していることもある。雄は雌よりも早く池に来て、産卵に来る雌を待っている。雌が来ると背中から抱きついて産卵した卵に受精を行う。受精させるチャンス逃さないようにするため、近くに來る動物にはすぐに抱きつく。そのため、雄同士が抱きついていたりすることもある。卵は日当たりが良くて水深の浅い所に塊状に産む。黒い卵は太陽の光で暖められて少しずつ生長する。産卵を終えた親ガエルは土の中に潜って「春眠」をする。

ふ化したオタマジャクシは枯れたアオミドロや朽ちた植物、動物の死骸などもどんどん食べていく。ソーセージ等はオタマジャクシが塊状になって食べる。池を造ってからオタマジャクシの数はどんどん増えてきた。時には残飯をもらって食べているが、餌が不足してくると共食いが始まる。遅れて生まれた卵をすごい勢いで食べる。次に、弱ったオタマジャクシを次々に食べていく。オタマジャクシから仔ガエルになると、周辺の草地や森林の中に移動する。あまり乾燥しない地表で昆虫等を捕食して生活する。ヤマアカガエルやニホンアカガエルが寒い時期に産卵するのは、卵やオタマジャクシの天敵が少ないためのようである。

トノサマガエルは雄と雌で体の色が異なる。池に住み着くことが多く、初夏に産卵する。池を中心に生息しているが、他の土地に移動する個体がいる。そのため、コナラ植林地などでも見られることがある。繁殖に適した池や水田が減少したために個体数が減少し、愛媛県では絶滅の危惧される野生生物に指定されている。

タゴガエルは森林内に適応したカエルである。水が浸みだしているような所に穴を掘りその中で繁殖することが多く、オタマジャクシを見ることはほとんどない。池で繁殖する他種のカエルが繁殖する時期を変えることで、繁殖場所の共有化がされているようである。

耕地整備や池の改修、水田転作や耕作放棄などによってカエルの繁殖場所が急速に減少している。繁殖場所から生活場所への移動中に交通事故やコンクリート壁面などの土木構造物によって移動路や生息域が分断されることも多い。

ヘビ

由良野の森に生息するヘビ類は、タカチホヘビ・シマヘビ・ジムグリ・アオダイショウ・シロマダラ・ヒバカリ・ヤマカガシ・ニホンマムシの八種である。活動する際に注意をしなければいけないのがヤマカガシとマムシである。

毒蛇として知られているのがマムシである。成体の体長は六〇cmほどで、ずんぐりした体型をしている。背面は「亀の甲羅形・銭形」と呼ばれる褐色斑紋が交互に並んでおり、地面や落葉に対する保護色になっている。草陰などにいるとじつと動かないことが多く、誤って咬まれることがある。毒の量は少ない方で、冷静に病院へ行つて治療すれば死亡することはほとんどない。咬まれる事故は農林作業中よりも捕らえたマムシを一升瓶に入れる際の不手際によることが多いようである。水辺でカエルを捕らえることがあるが、玄関先から森林の中までどこにでもいると認識し、足元・手先に気を付けなければいけない。

ヤマカガシの成体は体長が一五〇mほどになる。水辺が好きなヘビで、池の底に潜つて魚を捕食することもある。他のヘビは食べないヒキガエルを好んで食べる。ヤマカガシの毒は強いが、食べたヒキガエルの毒を蓄えて利用するという説がある。ヤマカガシの牙は口の奥にあり、がつぷりと咬まれた際の傷口から毒が入る。頸部にも毒腺があり、頸部を強く圧迫すると毒が出てくることがある。幼蛇は赤や黒の斑紋が有ることが多いが、成熟すると背面は光沢のない黒色になり、腹面は黄色くなる。ヒキガエルを食べたヤマカガ

シ、ネズミを食べたマムシの状態は「つちのこ」にそっくりである。道路で事故死していることの最も多いヘビである。

ヤマカガシは人が近づくとき首を持ち上げてコブラのような行動をして威嚇することもあるが、すぐに逃げ出す。しつこく攻撃されると死んだふりをすることもある。踏んづけたら捕まえたりしなければ咬まれることはない。むやみに捕らえたりしないことである。

シマヘビは水辺でカエルを食べることが多い。ヘビ食の性格が強く、マムシや同じシマヘビ同士であつても体の小さい個体を捕食することがある。ヘビの仲間では気が荒く、捕まえたりすると咬みついてくることもある。アオダイショウは木登り・崖登りが得意である。鳥の卵が大好きで、食道に卵を割るための骨がある。頭が三角形をしていると毒蛇だという迷信がある。毒を持たないシマヘビやアオダイショウも威嚇するときは頭を三角形にすることが多い。

見る機会の少ない蛇がシロマダラとタカチホヘビである。シロマダラはざれ地やもろい岩の斜面などに生息し、ニホントカゲやカナヘビを専門的に食べる。古い土壁の木造家屋では室内に入ってくることもある。タカチホヘビはざれ地・空石積み・落葉などの溜まつた中に生息していることが多い。鱗がタイル張り状になっているため乾燥に弱く、干物になりやすい。夜間十時頃、山間部の道路では路上に出ていることがある。

ニホンリス

由良野の森の尾根沿いにアカマツ林がある。標高約六〇〇m以下の地域では「松枯れ」によって大きな被害が発生した。松枯れの被害だけでなく、アカマツ林からヒノキ林への転換が増加したため、アカマツ林の面積は急激に減少した。その「松枯れ」が近年増えているようである。

由良野の森周辺のアカマツ林は自然枯死程度のもので、「松枯れ」という大きな枯死はない。そのため、巨木と呼べそうな大きなアカマツの木が多数見られる。アカマツ林の地面を見ると、松ぼっくりの芯だけになったものが落ちている。エビフライを小さくしたものにそっくりである。どうしてこんな物が落ちているのか、子供たちの興味を引きつける野生動物のフィールドサイン（痕跡）である。

この松のエビフライを作ったのはニホンリスである。ムササビも同じような松のエビフライをつくると言われているが、切り株や倒木の上で食べているものはニホンリスと判断して良いだろう。ニホンリスの姿を見る機会は少ないが、松のエビフライを見つけることで生息していることが確かめられる。

ニホンリスのフィールドサインとして巣の存在もある。樹上にスギの皮やナイロンロープをほぐした巣材で丸い巣を作っている。アカマツ林近くの若いヒノキ人工林にはあちらこちらに古巣が見られた。古巣の多く見られたヒノキ林は枝打ちなどの手入れが不十分で林内の見通しも効かない状態であった。人の立場では好ましくない林の状態でも、ニホン

リスにとつては外敵に見つかりにくくて襲われない環境になつていたのである。

今後は谷沿いを中心にオニグルミ等の植樹と自然に発生した苗の活用による「ニホンリスの生息する森づくり」も進めたいと思つてゐる。オニグルミやトチノキは本来存在すべき樹種であるが、由良野の森にはない。炭の原料となるクヌギやコナラ、木材になるスギ・ヒノキを育てるために「役に立たない邪魔者」として除伐されてきた結果である。林業としては「邪魔者」を排除して金銭的利益につながる木を育てた方が良いのだが、これでは「木を見て森を見ず」ではなく「丸太を見て森を見ず」である。

自称「林業家」はスギ・ヒノキの人工林がすべてと思ひ、自称「自然派」はスギ・ヒノキの人工林を嫌う。現実には両者ともとんでもない「偏見者」でしかない。森林・林業・環境保全に関しても偏見・利権、表面イメージだけの偽エコが少なくない。生息環境がなくなつてゐるニホンリスのためだけでなく、「林業と自然保護」を考える場にしてほしい。

由良野の鳥類

由良野の森において生息が確認された野鳥について、簡単に述べる。今後、生息が確認される種もあると思われるので、実際はもっと多くの野鳥が生活に利用しているものと思われる。(一四三頁図参照)

サギ科

アオサギ…由良野の森にある池に来ることがあり、樹上に止まって様子をけていることがある。以前は中山間地の河川上流部にはほとんどいなかったが、今では山地の溪流や小さな池にまで来るようになった。池の錦鯉や金魚を食べられることがある。

ミゾゴイ…絶滅のおそれのある野生生物に指定されている。夕方、薄暗くなった頃に「ボー・ボー……」と数回から十数回繰り返して鳴くことが多い。由良野の森近くでは、由良野川沿いのスギ壮齡林で生活していたことがあり、昼間に路上で餌を探していたこともある。

タカ科

クマタカ…由良野の森では北側尾根の上空で旋回することがあり、比較的に見る機会が多い。環境的に見ると由良野の森は繁殖地には適していないが、餌場として利用しているようである。二〇〇七年には二羽同時飛行などが観察され、雛と見られる個体も見られた。二〇〇七年秋から二〇〇八年春にかけては例年より観察される日が少なかった。秋から早春にかけてはオオタカ・ハイタカ・ツミを見る機会が多くなる。雑木林付近だけでなく、人家の近くに來ることもある。ノスリは畑や草地周辺を好み、モグラ類などを捕食する。観察される機会は少ない。トビやサシバも好みの環境と異なっているので、希にしか見られ

ない。

キジ科

比較的よく見られるのはコジュケイとヤマドリである。雑木林よりもアカマツと人工林が接する所で足跡がよく見られる。姿が見られる時間帯は朝であるが、年や季節によつてはほとんど見られないこともある。キジは飼育・放鳥されたものらしく、いつの間にかいなくなるようである。

ハト科

キジバトは人家近くや畑にもよく来る。比較的近くで見ることができ、木などに止まつて「デデ・ポポ」という鳴き声を聞くこともある。時には農作物を食べることもある。アオバトは雑木林で見られることもあるが少ない。「アーオ・アオアーオ」と聞こえるように鳴く。森林で生活する性格が強く、人家の近くにはほとんど来ない。

カッコウ科

カッコウの仲間は夏鳥として渡ってくる。ホトトギス・ツツドリ・カッコウの声をよく聞くことができる。ジュウイチは少ない。カッコウの仲間は鳴き声に由来して和名がついている。ウグイスなどの巣に卵を産み、雛を育てさせる「託卵」という習性がある。声を

聞くことが多くても、姿を見ることは少ない。

フクロウ科

フクロウ類を観察することは少ない。夏には雑木林内に来ることがある。夜に鳴いていることもあるが、繁殖に適した樹洞が少ないため、フクロウにとっては住みづらいようである。フクロウはネズミなどを食べるが、小型のフクロウは昆虫などを食べる。オオコノハズクの鳴き声を聞くこともあるが、少ないようである。

ヨタカ科

ヨタカは夏鳥として渡ってくる鳥である。夕方の暗くなる時には林道や空き地の裸地に降りることがよくある。由良野の森でも道路脇の駐車場等にも来ることがある。一般的には「キヨツキヨツキヨツキヨツ・・・」と鳴くが、裸地に降りる時などには「クチュクチュ・・・」というようなかすかに聞こえる声で鳴いていることが多い。道路の上を飛んでいる時には自動車のライトで目が紫色に光って見えることがある。

アマツバメ科

アマツバメ類はアマツバメとハリオアマツバメが見られたが、春と秋の渡りの時期にみられるだけである。繁殖も越冬もしていない。地上の比較的低い所を飛ぶときは風を切る

音が聞こえる。

キツツキ科

オオアカゲラ・コゲラ・アオゲラの三種が生息している。オオアカゲラは山地性のキツツキのようで、自然豊かな森林に生息している。以前は低山地にも生息していたが松枯れによってアカマツ林が減少すると共にいなくなってきた。繁殖のためにはやや大きい枯立木が必要であり、人工林化の進んだ地域では生息しづらい状態である。コゲラは小型のキツツキで、比較的よく見ることが出来る。細い枝先や枯れたつる植物などで餌を探すことが多い。アオゲラはオオアカゲラよりも人里に適した習性がある。やや大きい枯立木やクリの木の比較的低い所に巣をつくることが多い。

キツツキ類は「木のお医者さん」と呼ばれているが、「林業の町」を自称する地域では「木に穴を開ける害鳥」としてきらわれることが多い。これら三種のキツツキは営巣木と営巣場所、餌をとる場所を分担している。「住み分けと共存」によって森林の健全化に貢献しているのである。

ヤイロチヨウ科

ヤイロチヨウは美しい羽根を持つ夏鳥で、六月初め頃に渡来する。由良野の森は生息環境として適していないようである。春の渡りの途中に声を聞くことがあるが、姿を見るこ

とはほとんどない。

ツバメ科

ツバメ類はツバメ・コシアカツバメ・イワツバメがみられる。ツバメは木造の家屋、コシアカツバメはコンクリートの建物を好むようである。イワツバメは渡りを止めて、越冬する事が多くなった。由良野の近くでは二名の宮成橋や露峰の西川橋など、あちこちの橋で繁殖・越冬し、暖かい日には冬でも飛んでいることがある。イワツバメも由良野では繁殖していない。

セキレイ科

キセキレイは溪流性のセキレイで由良野川沿いで見られることが多い。時には植林地にも立ち寄るようで、鳥類標識調査で捕獲したこともある。セグロセキレイは人家周辺で見られる。キセキレイ・セグロセキレイとも尾を上下に振る。ビンズイは秋の渡りの時期に捕獲されることがあるが、藪の中にいることが多いため見る機会は少ない。

ヒヨドリ科

ヒヨドリは餌があれば人の生活圏と共通の場所を好むようである。地味な色の鳥であるが、「ピーヨ」という鳴き声と共に農作物に被害を与えることがあるのでよく知られている。

る。木の実、カキやミカン等の果物、春先にはキャベツなどの野菜も食べる。自然界ではヤマザクラ・クスノキ・ツルウメモドキなど、植物の種子散布に大きな働きをしている。

カワガラス科

カワガラスは由良野の川沿いでよく見られるが、由良野の森上部の細流で観察されることもある。水中に潜るのが得意で、川底の小石をひっくり返して水生昆虫を捕食する。

ミソサザイ科

ミソサザイは薄暗い森林の地表近くで生活していることが多い。繁殖期には谷沿いの岩の隙間や崖の窪みにコケを集めて巣を造る。小さな体ではあるが、美しく大きい声でさえずる。体色は褐色系のため目立たない。さえずる時には尾を立てているが、手で持つているときにも尾を立てていることが多い。人に対する警戒心はあまり強くないようである。

イワヒバリ科

カヤクグリは日本だけに分布する。高山帯で繁殖するが、冬季には低山地の藪などで生活する。体色が褐色のため、観察



される機会は少ない。由良野の森では鳥類標識調査で確認された。

ツグミ科

コマドリは愛媛県の県鳥である。夏鳥として飛来して山地の森林内に生息する。谷沿いの藪のような所で繁殖する。ヒンカラカラカラ・・・と聞こえる美しい声でさえずる。由良野の森では、春の渡りの時期にさえずりを聞くことが出来る。

ノゴマは主に北海道に渡来して繁殖する。愛媛県で見られるのは珍しいと言われていたが、鳥類標識調査を行うと、秋の渡りの時期には普通種のようなものである。由良野の森で二〇〇六年秋に足環を付けた雄が二〇〇七年秋に再捕獲された。二年続けて同じ場所を通ったことになる。

ルリビタキは石鎚山のように高い山や北海道などで繁殖するが、冬期は低山地の森林内で生活する。ジョウビタキも冬鳥として渡来するが、公園や道路の法面などの比較的開けた場所を好む。畑で野菜の手入れをしていると人の近くに來て、掘り出された虫を食べることがよくある。ルリビタキとジョウビタキは尾を細かく振る。

ノビタキは本州中部以北に渡来し、草地で繁殖する。西日本では秋の渡りの時期に見られることが多い。県内では農耕地周辺のススキ群落や河川沿いのツルヨシ群落で見られることが多い。

トラツグミは低山地から山地の茂った林で繁殖する。主にミミズを食べるが、冬期は公

園や庭木のある庭で木の実を食べることもある。夕方や早朝には口笛のような「ヒィー・ヒョー」と口笛のような声で鳴き、鵲うぐいすの声と言われる。

シロハラとツグミは冬鳥として渡ってくる。シロハラは林内、ツグミは公園や農耕地などの開けた場所を好み、地面で餌をとることが多い。

ウグイス科

ヤブサメは夏鳥として渡来する。低木が多くて薄暗い森林を好み、虫の声のような「シシシ・・・」と連続した声でさえずる。バードウォッチングで姿を見る機会はほとんどない。夜には鳴き止まない状態で、連続して鳴いているようである。

ウグイスは全国の低山地から山地に生息し、藪やササ地などで繁殖する。由良野の森でも植林した木を利用して営巢していることがあり、草を刈る場合にも驚かせないように注意している。春から夏にかけてはさえずりを聞くことができる。高い木の枝に止まることがあるので、姿を見ることが出来る。ホーホケキョという美しく特徴のあるさえずりで知られているが、姿を知っている人は少ない。

メボソムシクイとセンダイムシクイは山地の森林で繁殖する夏鳥である。由良野の森では春の渡りの途中で立ち寄った個体のさえずりを聞くことができるが、繁殖はしていないようである。メボソムシクイは、秋の渡りの時期に鳥類標識調査において捕獲される。

キビタキとオオルリは夏鳥として渡来し、由良野の森周辺でも繁殖する。オオルリは木

の梢付近でさえずり、溪流沿いの崖のくぼみに営巢することが多い。両種とも美しい声でさえずる。

ムギマキは数少ない旅鳥として観察されることがある。由良野の森でも鳥類標識調査で雄の個体が確認された。

カササギヒタキ科

サンコウチョウも夏鳥として渡来し、溪流沿いで生活する。雄の尾が長く、チーチョホイ、ホイホイとさえずる。谷の上の小枝やつる植物に巣を造ることが多かったが、個体数は減少している。由良野の森でさえずりを聞くことができるが、姿はなかなか見られない。

コサメビタキ・サメビタキ・エゾビタキは渡りの時期に見ることができる。秋の渡りの時期には木の枝に止まり、近くに虫が飛んでくると空中で捕まえて枝に戻る行動が見られる。この3種は胸の模様で見分けることができる。

エナガ科

エナガは丸っこい小さな体に比べて尾が長いのが特徴である。数羽から十数羽の群れになって林の中を巡回している。枝から枝へと移動し、枝先などで餌を探すことが多い。

シジュウカラ科

ヤマガラは雑木林からブナの森に生息し、人家近くでもよく見られる。ツツピー、ツツピーと鳴くことが多い。巣箱もよく利用し、民家に巣を造ることがある。秋には冬季の餌にするためにエゴノキの実を貯蔵する。エゴの実が多く実った時は、2〜3分間隔で林の中に運んでいくのが観察される。密猟されて、ペットとして飼われることが多い。

シジュウカラは胸から腹部にかけてネクタイのような黒い帯がある。里山の雑木林からブナの森に生息し、人家近くでもよく見られる。巣箱もよく利用する。「ツープー、ツープー」とか「ジुकジुक」と鳴く。

メジロ科

メジロは目の周りが白い輪になっているのが特徴である。群れになることが多く、枝に止まる時は押し合うように寄り添う。熟したカキやミカン、庭においたジュースを飲みに来ることがある。昆虫や果実の少ない時期にはヤブツバキやウメなどの花の蜜を吸いに来て、花粉を媒介して受粉させる役割を果たしている。

ホオジロ科

ホオジロは和名のように、雄の頬のあたりが白い。農耕地や荒れ地などの開けた草地を好む。繁殖期には木の梢や電線に止まってさえずるので見つけやすい。さえずり以外には「チチツ」と鳴く。積雪すると人家の軒下に来て餌を探すことがある。

カシラダカは冬鳥として渡来する。頭にある短い冠羽を立てる行動が和名の由来である。農耕地やヨシ原などの開けた環境を好む。群れを作って生活する。

ミヤマホオジロも冬鳥として渡来する。喉元と眉班が黄色く、目立つ冠羽がある。明るい雑木林や林道に面した林縁部などに群れで生活する。主に地面に落ちている草の種子などを食べる。鳥類標識調査によつて、二年続けて由良野を通過した二個体が確認されている。

アオジは冬鳥として渡来し、雑木林・ヨシ原・樹木のある公園や庭等で生活する。積雪すると生け垣や軒下にも来ることが多い。薄暗い藪の中にいることが多いので目立たないが、胸から腹面にかけての黄緑色は美しい。ノジコは旅鳥として通過し、秋の渡りの時期には鳥類標識調査で確認される。アオジに似ているが、目の周りが輪状に白いのが特徴である。

クロジは冬鳥として渡来する。茂った雑木林や神社の森など、薄暗い森の中で一羽から数羽の群れで生活する。地味な色をしており、地上で餌を取ることが多いので観察することとは少ない。

アトリ科

アトリは冬鳥として渡来し、群れで行動することが多い。秋にはブナの森などで木の実や冬芽を、積雪と共に里山の雑木林で草の実や昆虫を食べて生活するようになる。

カワラヒワは平地から低山地の農耕地・草地・雑木林などに生息し、比較的開けた環境を好む。飛んでいるときに翼の黄斑が目立つ。群れで行動して草木の実を食べることが多い。見晴らしの良い木などの高いところに止まることが多い。「ビーン、キリリコロロ」などと鳴く。

ベニマシコは冬鳥として渡来し、つる植物の覆った灌木林に生息することが多い。先が丸くて短い嘴は電気工事の工具に似てる。雄は紅色をしている。地表で餌を取ることが多く、足に植物の繊維が付着して「植物繊維の足環」を付けている個体がある。

イカルは黒い覆面を付けたような顔に太く黄色い嘴が特徴である。「まめ回し」とも呼ばれるように、硬い木の実を嘴で回しながら割って食べる。「キーコーキー」とさえずり、飛びながら「キョッキョッキョ」と鋭く鳴くこともある。

カラス科

カケスは「ジェー、ガー」と聞こえる鳴き方をするため、ガイスとも呼ばれる。里山の雑木林から山地のブナやシラベ類の森にも生息する。ふわふわとした飛び方をして、腰の白色が目立つ。草木の実、昆虫や小動物を食べる。秋にはドングリを運んで蓄える習性がある。その地に生息するサシバやクマタカなどの鳴き声を上手にまねるため、鳴き声で猛禽類がいると判断しない方がよい。

ハシボソガラスとハシブトガラスは人の生活する環境を好み、農作物や残飯を食べる事

も多い。自然界では草木の実や小動物を食べる雑食性で、動物の死体を食べる「掃除屋」としての役割を果たしている。嘴が太くて額が出っ張っているのがハシブトガラスで、「カアカア」と澄んだ声でなく。ハシボソガラスは嘴が細く尖っており、額は出っ張らない。「ガアガア」と濁った声でなく。賢くて「悪知恵」もはたらくので、農作物や家畜、ゴミ置き場などでは人とのトラブルも多い。

森林の保水力

森林は「緑のダム」と言われることが多い。森林の公益的な機能の主要なものである。「緑のダム」とは保水力のことである。では、森林のどこで水を蓄えるのか。枝打ちや間伐などの手入れをした結果、木の枝がバケツを持ち、地下に貯水タンクが出来た実例を確認したことがない。保水力の基本は表土の構造と量である。落葉層で菌類や小動物が植物遺体を分解することで、保水力と栄養素を含んだ団粒構造の表土になる。これが「ふかふかの土」と呼ばれる土壌である。この土と植物の根によつて保水力と自然災害の少ない森林が出来るのである。森林の地下に水が溜まると言うことは、山崩れなどの自然災害を起す危険性が高いという意味でもある。

ブナ林の保水力は高く評価されている。ブナ林は「ブナの木」の幹を雨水が伝わって、根元に水を蓄える」という表現をするテレビ番組などを何度も見たが、雨水が幹を伝わるの

由良野の森標識鳥類目録参照図

科 名	種 名	学 名	2006	2007
セキレイ科	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	○	
	ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	○	○
ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>		○
モズ科	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	○	○
ミソサザイ科	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>		○
イワヒバリ科	カヤクグリ	<i>Prunella rubida</i>	○	
ツグミ科	ノゴマ	<i>Erithacus calliope</i>	○	○
	ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>		○
	ジョウビタキ	<i>Phoenicurus auroreus</i>	○	○
	ノビタキ	<i>Saxicola torquata</i>	○	○
	シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	○	○
	ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	○	
ウグイス科	ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>		○
	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	○	○
	メボソムシクイ	<i>Phylloscopus borealis</i>	○	○
ヒタキ科	キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>		○
	ムギマキ	<i>Ficedula mugimaki</i>	○	
エナガ科	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	○	○
シジュウカラ科	シジュウカラ	<i>Parus major</i>	○	○
メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	○	○
ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	○	○
	カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	○	○
	ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	○	○
	シロハラホオジロ	<i>Emberiza tristrami</i>	○	○
	コホオアカ	<i>Emberiza pusilla</i>	○	
	ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i>	○	○
	アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	○	○
	クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	○	○
アトリ科	アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	○	○
	ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	○	○

は樹形の問題であり、ブナの木だからというのではない。一般の人の中にはブナの木自体が水を蓄えると誤解し、「水源地にブナの木を二・三本植えたい」という相談を何度も受けたことがある。

ブナ林は肥沃な土壌に発達し、多量の落ち葉を落とす。低木層やササなどが地表を覆うような構造になっており、霧などの水滴を地表に落とし、風などによる地表の乾燥を防ぐ効果がある。ブナ林の保水力はブナの木の水保力ではなく、ブナ林全体の構造とはたらくによる保水力なのである。

森林に林道を造れば、人の手入れが行き届くようになり、森林の保水力や災害防止に役立つという考え方がある。森林の表土をゆつくりと下って行く水は林道の法面から蒸発し、側溝を通して一気に谷川に集められる。雨水の原則的な移動の面からみると、道路は水の通路を分断して路側（路肩）は山の尾根と同様な条件になる。林道などの車道は基本的に森林を傷つけるものである。

道路に対しての問題点を指摘すると、「道路族」・「林業族」の人たちはヒステリックな感情論で圧力をかけてくることもある。大切なことはどのような林道が必要なのか。環境に対するダメージを小さくするにはどうしたらいいのか。維持管理や災害の誘発をどのように防止するのかなど。林業に対する特定の利点だけでなく、森林や住民の安全性と生活などを総合的に考えることが大切である。

森林は地形や地質、気温や降水量などによって異なってくる。どういう所にどんな森林

を配置し、どのような働きをするように保全するかが問題である。

森林の国土保全

森林の公益的機能の大きな要素が「国土の保全」である。木材生産や林業振興だけを強調するとサラリーマンなどの一般国民から「税金の使い方に疑問がある」と言われかねない。山崩れなどの「自然災害を防止して国民の生命と財産を守る」と言われれば誰もが納得しやすい。

森林とはなんだろうか。戦後のスギ・ヒノキ信仰的な偏った評価によって、谷から尾根までスギとヒノキで覆われた山も少なくない。台風や集中豪雨で崩壊した山林を見ると、どうしてもスギ・ヒノキの林が多いように思われる。

自然林を見ると、谷・中腹・尾根・平坦地や急傾斜地などによって、優占的に生えている種類が異なっている。谷にはヤナギ類・オニグルミ・シオジ・カツラ・トチ等が、しっかりと根を張って生きている。標高によっても照葉樹・落葉広葉樹・常緑針葉樹などに変化する。それぞれの種類の木に特徴や性格があり、それぞれの役割を果たしている。森林の公益性を考えれば自然林に勝るものはないだろう。

スギ・ヒノキは生長が早く、幹がまっすぐ育つので建築材料として優れている。建築材料として優れていることが国土保全に優れているかは疑問である。根の張り方が広葉樹に

比べて狭くて弱い。根の張る範囲が地表から一定の深さの所でそろってしまつたため、強風と雨によつて幹や根元が揺れて滑り面ができやすい。特に谷沿いでは沢抜けを発生させやすくなり、時には土石流となつて人的な被害を起こすこともある。

だからと言つてスギ・ヒノキの人工林を否定するものではない。健全に育て、上手に使えばすばらしい資源である。しかし、戦後の木材需要時の感覚が自然林の価値を否定的にし、国策による「刷込み」などにより、スギ・ヒノキは木材だけでなく森林の公益的機能も最高と洗脳されたようだ。

そのため、スギ・ヒノキの単一斉林も原生的自然林も同じ「森林」と書いて「しんりん・もり」と読ませている。私は、本来の自然林でない単一斉林は「森林ではなく、木材の畑」と考えている。苗の植え付けから雑草取り（下草・つる切り）、不要下葉の除去（枝打ち）、間引き・摘果（除間伐）、収穫（主伐）まで、ダイコン畑と同じような管理が必要である。

林業で補助金を得るためには、優良品種を植林して下草刈りや除間伐をする。林内作業道も個人で造つたら補助の対象にならないので、建設会社や森林組合などに施工してもらわなければならない。個人がコツコツとまじめに管理して、健全な人工林管理に努力しても評価の対象にはならないようなものである。

現在は以前に比べれば良くなつたが、まだまだ「丸太を見て森を見ず、山には無関心」の状態にある。「政・官・学・業」はもちろん、一番大切なことは国民が森林を見つめ直

し、生態の解明と共に山林を適地に配置し、林業と自然保護、経済的効果と公益性の保全が必要である。

由良野の森共生林の整備状況

ここでは、これまでに実施した事とこれからの活用について簡単に述べる。共生林とは何かを考えながら管理していきたい。(一五四頁の地図参照)

乙786-1番地

約五十年生の雑木林で、一部にアカマツ林がある。雑木林の主な樹種はコナラとクヌギである。中高木はダンコウバイ・ウラジロ・ヤマボウシなどがあり、低木にはウグイスカグラなどが見られる。長年に渡って炭焼きに利用されたため、コナラ・クヌギが優占して他の高木樹種は少ない。

東側にはヒノキの約四十年生の人工林がある。植林後は除伐や枝打ちが行われていなかったため、コナラの樹冠下などで不良生育状態になっていた。そのため、二〇〇七年の春に一回目の除伐を行った。

乙786-2番地

乙786-1同様に炭焼きに利用された雑木林であるが、ミズキ・ウワミズクラ・アカメガシワ・ケケンポナシなどが混生する。南側谷部分にはヒノキの人工林がある。耕作の邪魔になる石を集めた石塚が複数見られることから、ヒノキ植林前には畑だったようである。谷より西側はアカマツ林である。二〇〇七年春に中高木や低木の除伐を行った。オニグルミなどの溪谷沿いに生える木を植樹し、ニホンリスなどの保護対策と溪谷植生の再生を予定している。

乙786-1番地北東のヒノキ人工林から乙787-4番地上部に向かって二本通りヒノキが植林されていた。不良生育状態の木が多かったのほとんど除伐した。このヒノキは集材のために張られた本線に沿って植えられ、コナラ・クヌギを伐採する際には伐採して収益を得ることを目的にしていたのかも知れない。

乙786-1番地と乙786-2番地の雑木林はクズ・ツルウメモドキ・アケビ類などのつる植物が樹冠部まで絡みついていて状態になっていたので、二〇〇六年の春に「つる切り」を行った。

乙787-4番地

ヒノキの人工林である。植林後数年は手入れされていたが、その後は放置されたらしく

つる植物によつて幹が曲がつたものなどが見られた。枝打ちも1m程の高さまでしかされていなかったたので、二〇〇五年夏頃に一回目の枝打ちを、二〇〇七年に二回目の枝打ちを行つた。木材として利用できる木は柱材が取れるくらいまで育て、谷沿いは溪谷林の再生をしたい。

乙787-5番地

クワ栽培放棄地で、クワ・ササ・クズなどの混生状態であつた。町道に近い所はクワを伐採して、ミニユンボ購入後はミニユンボを使つて開墾した後に植林した。クワがまとまつて残つてゐる所はクワ群落として残すようにしている。

植林した木はエノキ・コナラ・ヤマザクラ・イロハモミジ・モミなどである。木の実や花粉などが昆虫や動物の餌などになると共に、人が見ても楽しめる木を選んだ。生長の良さも選んだ理由のひとつである。木の生長を見て、由良野の森に係る人の「やる気の増進」を喚起したいと思つてゐる。

乙787-6番地

クワ栽培放棄地である。町道に隣接する部分に災害工事による残土を使用して駐車場を造つた。土地購入時にはクワが存在していたが、つる植物によつて地上部が枯死して草池化している。

谷の東側はミニコンボで開墾し、大きな岩も整理して植林した。境界には目印としてヒノキを、里道に近い所にはサクラとウメを谷沿いにはイロハモミジ、その他としてイチヨウとコナラを植えた。景観と収穫物を目的にしたものである。

乙787-17番地

クワ栽培放棄地・果樹栽培・廃屋を取り除いた屋敷跡・野菜畑などがある。里道に沿ってサクラとウメが植えられている。

乙787-19番地

大部分はクワ栽培放棄地である。東側で畑作が行われ、中央下部にニワトリ小屋がある。

乙787-113番地

由良野の森の中心施設であるゲストハウス、工房、鷺野邸がある。小さな池があり、子供たちの遊び場になっている。

乙787-116番地

ヒノキの人工林である。大部分は十五年生くらいであるが、住宅跡地を中心に五十年生の林がある。若い林は横一直線に並んでおり、綱を張って植林したものと思われる。

乙787-117番地

二〇〇四年と二〇〇五年にコナラやクヌギを植林した若齢林とクワ栽培放棄地、クワ栽培放棄地を開墾した草地になっている。雑木林の育成と動植物の調査に活用することを目的にしている。

環境省の鳥類標識調査の登録地になっている。渡り鳥などの調査が目的で、捕獲した鳥に足環を付けて放鳥している。二〇〇六年と二〇〇七年は鳥インフルエンザの病原菌を調査するため、マダニやハジラミなどの外部寄生虫の調査を行った。

乙787-119番地

東側にスギ・ヒノキの人工林、西に草地と由良野生生態研究所がある。人工林は防風林としての目的も含めて育てられたものと思われる。この研究所は、調査研究活動での利用を目的にしている。

乙787-120番地

東側にスギ・ヒノキの人工林がある。乙787-119番地と同じように防風林の目的で育てられたものと思われる。林の中ではシイタケの栽培をしている。西側は草地になっており、春にはワラビ取り、秋には堆肥を目的にした刈り取りが行われている。二〇〇七年

の秋にはクズの根堀除去を行った。草の刈り取りが行われない場合は、草地の生き物の生息環境と調査などに活用する。林内の明るさ調整と枝打ち体験などに利用するため、林縁部などにスギの植林をした。

乙79111番地

北側（上部）と尾根沿いにはアカマツ林がある。その他はスギとヒノキの人工林である。西側（谷部）にはスギの人工林があり、二〇〇六年に一回目の間伐を行った。

乙79112番地

ヒノキの人工林であり、二〇〇六年に一回目の除伐を行った。将来の枝打ち体験などに用いるため、間伐後にヒノキの苗を植林した。

乙79113番地

大部分はヒノキの壮齢林である。下部にスギの壮齢林がある。スギ・ヒノキの壮齢林はシイタケのほだ場として利用されていた。ヒノキ壮齢林は二〇〇五年にほだ場の片付けをした際、枝打ちも行った。谷側のスギ壮齢林は二〇〇六年に一回目の間伐を行った。

乙79114番地

スギ壮齡林の約半分ほどである。シイタケのほだ場に利用されていた。乙793番地と乙791-2番地の境界点に向かつての里道があるため地番が分かれている。

乙791-6番地

ヒノキの人工林である。二〇〇六年に一回目の除伐を行った。道路沿いの一部は不良木の除伐とオニグルミなどの植樹を行う。

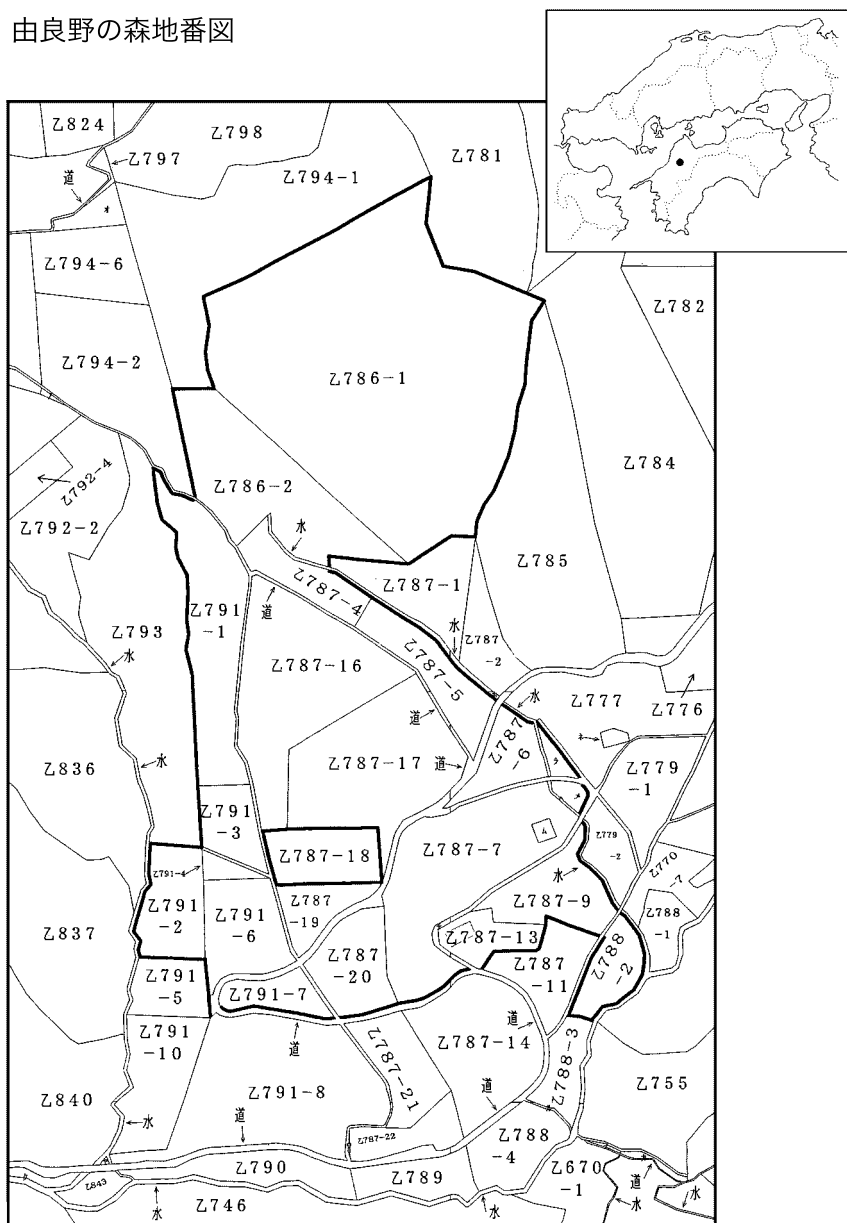
乙791-7番地

耕作放棄による草地になっていた。

二〇〇七年、一部を開墾してウドの苗を植えた。ゼンマイ・ウドなどの山菜が取れると共に、草地を好む生き物の生息地として管理していく。



由良野の森地番図



第四章 「由良野の森」に集う人々

遊んで育て

清水美保子

私は、鹿児島と宮崎の県境に位置する霧島山の麓の小さな村で育った。両親の農作業を手伝う時以外は、野山をかけ廻っていたように思う。年を経てはじめて、豊かな自然に抱かれて幸せな幼少期を過ごせた事を心からありがたいと思った。印象深い出来事として記憶にはつきり残っているのは、エビネの花と真つ赤な鳥のことがある。

私の家にはソメイヨシノの大木が門代わりに二本あった。道路拡張のため切られてしまったが、自慢の見事な桜であった。川沿いに、夏になると祖父が川床を竹で作つてくれ、その上に涼んだり寝転がったりして楽しんだ。

ある日、その竹の一番高いところに真つ赤な鳥がじつと彫像のように止まっているではないか。思わずぴたりと足の止まった私と鳥は目と目が合ってしまった。鳥は落ち着いたもので上から私を横目で見ながら川のほうをじつと見ていた。私は、「何でうちには赤い鳥が来たのだろう。本で読んだチルチルとミチルの捜していた鳥は、確か青い鳥のはずなのにおかしいなー!」なんて呑気な子供であった。

つい最近になって、甲斐さんの家で杉林から出て飛ぶ姿を見、その赤さに驚いて蘇った

記憶である。それは春になると渡つて来る「アカショウビン」という鳥で、独特の鳴き声「キロロロー！キロロロー」でよく知られるまさにその鳥に、私は幼い時に真正面から出会つていたのだ。今年も又、春がやつて来る。初夏に無事この日本に到着して声をきかせてくれる事を願いながら、山へ出かけるこの頃である。

山育ちのせいかな、森の香りを嗅ぐと心からほつとする。木や草花が大好きで、春になるといつも楽しみに出かけた。両手一杯に花を摘んで家に持つて帰つては、母に邪魔になると言われて叱られていた。私だけの秘密の花園があつた。そこへはいつも一人で行つたように思う。雑木林の木々の間にエビネの花が色とりどりに群生していて、まるで誘うように咲き競つていた。毎春そこへ行つては、スポン！スポンと花だけ引き抜いて、両手一杯に抱えてはとても幸せな気持ちで家路についたものである。春蘭は香りを楽しみ、エビネは姿と色を比べて楽しんだ。エビネが貴重な植物の今、そんな事をしたら大変だろうなと、ふと笑つてしまう。何と幸せな子供時代だったことか。今となつては夢物語だと思われてしまいそうな話である。

子供達だけで山に遊びにゆく時は、おにぎりを自分で作つて朝から元気に出かけていたが、年長者が先頭を歩いて指揮し、そのルールに従つて大した怪我や事故もなく、子供の足にしては結構遠くまで行つていたと思う。心配した親が捜しに来るなんて事はただの一度もなかったが、帰りが遅くなつて、決められた家事をちゃんとしていないと言つて叱られて、サイロに放り込まれたり、家の外に立たされて泣いた覚えがある。今と

は何と違った親子のありようだった事か、その変わり方に今更ながら驚いている。今思い出してみても、私達はいつも何かに守られて不安も危険もなく、子供達だけで楽しく遊び、生き生きと過ごしていた。現代からなくなってしまったものが、そこにはあるように思う。そうやってたくましく育ったおかげで、多くの困難にも負けずここまでたどりつけたように思う。流行の服やブランド品は少しも似合わないけれども、大地をしっかりと踏みしめる大きな太い足と、大切なものを放すもんかと握りしめる大きな手は、この幼少時に培われたものだと思えて疑われない。年頃の時には多少細い足を羨んだ事もあったが、今は誇りに思っている。

由良野を走り回る子供達を見ていると、そんな幸せな私の子供時代が重なる。両手一杯の花を摘んでやることはできないけれども、多くの動物や虫に出会って自然に親しんで、たくましい心と身体を培って欲しい。大人になった時、どんなに辛くても生きてゆくことのできる強さを身につけて欲しい。今はただ、「遊んで育て」と心から願う。

出会い 鷺野編



鷺野夫婦とはストップ・ザ・フロンをきっかけとした環境活動に参加したことからの縁である。当初、冷蔵庫のフロンをどうするか、スプレーのフロンを中止せよなどという内容だったと思う。CO2の問題が叫ばれる少し前の話である。私達は医療上の問題として環境問題に注意を向けていた。アレルギーや免疫の関連した疾患には、必ず根底に環境問題があると確信していたからである。

そんな時に阪神淡路大震災である。ストップ・ザ・フロンメンバーはそのまま、ボランティア活動の呼びかけに応じてそれぞれの持てる力をできる形で使い、すばらしい仕事を成し遂げた。地震の前では人はとても非力だ。どんなにりっぱな建物も、しゃれた街並みも一瞬のうちにゴミと化し人々を押し潰していた。曲がりよじれた道路を見た時に、都市のあやうさをまざまざと思い知った。確かなものなど本当は何もない。生きていることも幸運の連続なのだ。そこで出会った人々は、貴重な本当の宝物となった。

ボランティアが解散した頃、高知のホスピス（当時四国で唯一のもの）にカール・ベッカー氏がやって来て講演があると知り、行きたいと思っていたところ、鷺野宏さん（宏君）が行くということを知り、車に乗せてもらおうようにお願いした。カール・ベッカー氏は京都大学で臨死体験などのデータを集めて研究し、それらを講演しており、看護師として多くの看取りに関わっていた私は、どうしても気になることがあって行きたいと思っていた矢先の話だったのである。現在宏君の奥様である陽子さんは、高知のそのホスピスで働いている看護師だと聞き、彼女に会ってみたいのもあった。こつそりと宏君とホスピス

に行くと、陽子さんが「ハイ！陽子です」と現われた。光が射すとはこんな人の事かと思つたものである。ホスピス病棟はとても落ち着いた静かな場所で、最上階の教会に特
に十字架はなかったのだが、光が十字に入つてくるように設計されており祈りの場に静かな
な気配が満ちていた。

高知へ日帰りのきつい日程だったが、実りある一日であつた。カール・ベツカー氏の講演は、以後、看護師として働く中で多くのヒントをくれたが、陽子さんという陽を放射する人に出会つたことは、もつと大きかつた。世の中には、まだまだ会つた事もないような人がいると楽しく思つた。これ以後宏君に「さつさと嫁さんを高知から愛媛に引つ張つて来い。絶対に離すな」といい続けることになる。きつと高知の人達にはとても恨まれたと思う。でも今の幸せそうな二人に免じてどうか広い心で許してやつて下さい。

身勝手な事を言つた天罰で一度痛い目にあつた事がある。宏君が松山へ仕事に行く為オートバイで三坂峠を降りていた時、スリップ事故を起こし転倒、中央車線を越して倒れ込んだ。対向車があれば大変な事になったのだが、幸いなことに対向車がなく打撲だけですみ、その日と翌日は仕事を休んで自宅にいたということがあつた。その日その時、松山で仕事を始める準備をいつも通りやつていた私に、左腕から肩にかけて激痛が走つた。息もできないくらいの激しい痛みで思わず座り込み、左腕を抱えて倒れ込んでしまった。生まれて初めての体験だつた。痛みは少しずつ弱まっていったが、腫れと鈍痛は残り、半日近く動けず休んでいたと思う。あまりの訳の解らない出来事に途方にくれたが何だか気

になつて仕方がないので、久万の大宝寺か岩屋寺にお参りに行くことにした。ついでに久万の宏君の家に寄つてみると、同じところにすり傷打撲の彼が、やや蒼い顔をして仕事を休んで家に居たのである。こんな事があるとは起こつた本人同士でさえ未だに信じられない事だつた。このシンクロニティ以後そんな事は起きていないのだが、きつとあの事故は彼にとつて本当に生命の危険を及ぼす大事故の可能性がとても大きかつたのだと今でも思っている。

何かが、報せてくれたとしか思えない出来事だつた。人は自分の意志で、何でもやつていると思つてゐる。しかし本当は、常に多くの人との関わりの中で生きて動いている。生きるのも死ぬのもその関わりの中なのである。縁の深さに心打たれる出来事だつた。

出会　　い　　甲斐編

そんな鷺野夫婦に「面白い一家が久万に住んでいるから会つてみませんか」と誘われて、三月の雪の残るガタガタ道を、車の底を泥だらけにして会いにゆくことになった。もつと時節の良い時に行きたかつたのだが、なんせ有名な家で、都会から大型バスで人が会いに来て少し賑やかなので、ほとぼりが冷めて人の来ない静かな時ということに

なったのである。一体どんな人が住んでいるのかと興味深々で行くと、何とも面白い頑固そうな親父さんと楽しくてとても明るい芳子さんというご夫婦だった。

何で大型バスが来るのかさっぱり分からないままに、色々話を聞いて納得した次第である。彼らの暮らしはとてもシンプルで、美しかった。自然との調和の取れた、人間らしい暮らしぶりに、だんだん惹かれ、通いつめることになる。大型バスの方たちには悪いけれども、ちよつと見学しただけでは分からない皆さんの楽しいことがあった。太りすぎの猫クロは野生を目に宿し、二頭の犬は、甘えん坊のムック、小太りの臆病だがとても賢いタンク、それに二人の息子達。木の「おわん」の暖かさと丈夫さは驚きだった。それ以上には素晴らしいと思つたのはご夫婦の絶妙のバランスだった。東京からこの山奥へやってきて、多くの苦勞を共にして、なんともいえない良い夫婦なのである。世の中がこんな夫婦ばかりになれば家庭も荒れないだろうなと、いつも思う。鷺野夫婦は西表に行くこととなつてしまつたが、甲斐さん夫婦を引き合わせてくれるという私に素晴らしい贈り物を置いていった。子供の居ない私をいつも哀れんでいる母に二人を紹介すると、大変喜んでくれた。しかし母の心配は私の老後である。甲斐さんご夫婦は、私より十程年上である。先のことは分らないが、順で行けば彼等が先なのだ。親とは本当に有難いが、時にその思いが過ぎると妙におかしい。何時までたつても、子は子なのである。

由良野の土地の購入の話があつたとき、何をしたいのかを考えていた矢先、テレビに森が荒れるのを防ぐため、牛を放牧して下草を食べてもらい、森を管理しているという話題

を映していた。牛は牧場と言う観念をあつさり拭い去ったその映像が、私の夫をいたく感動させた。幸せそうな顔をして口をもぐもぐさせ、木の間に見え隠れする大きな牛のお尻は、ゆらゆらゆれてのんびりとして、テレビを見ている私たちまで楽しい気持ちにさせてくれた。人間もあんな気持ちのいいところに行けば、病氣も治つてきつと楽しいだろうなと思つてしまったのである。しかし木漏れ日の射す気持ちのいい雑木林など別荘地にでも行かなければ見られなくなつてしまつた。特に四国の山は急峻で、杉、ヒノキの植林された森の中は真つ暗で、下草も生えず、放置されて荒れているのをあちこちで見た。九州のなだらかな山々を見て育つた私には、なんだか近づき難かつた。幸い競売される山は、南斜面に向いており、桑畑だつたのが手入れされずに放置され、荒れた葛だらけで、猪の掘つた穴が散在しなんとも楽しかつた。秋になつて藪の中を覗くと、アケビのツルからたわわに実つた果実が、鳥がつついていない手付かずの完熟状態で驚くほどたくさん取れた。幼い頃、高い木の上で手が届かず、食べることの叶わなかつた貴重な山の恵が、いとも簡単に目の前の藪の中にこつそりとあつた。春は沢山の山菜に恵まれた。杉やヒノキも必要だが、原っぱや藪、低木、高木の混在した林など、いろいろな形態の自然がないといけないことに気づかされた。多様性が多くの恵となつて、森や動物や人を生かしてくれる。そんな当たり前のことが忘れ去られ、山を荒廃させ災害を引き起こしている。貴重な植物が消え、小さな昆虫が静かに消え、忘れられていった。本当に大切なことはいつも見えなところにある。見えているのはほんの一部分、見えないところに心が届かなければ、い

つか自分達の立つ大地が生きてゆけないものになっていても気がつかない。

たった一人でそんな活動を続けているひとを紹介された。甲斐さん夫婦から山本さんのことはよく聞かされていたが、由良野の自然を保全管理できる人が欲しいと思い相談したところ、一番の適任者だと紹介された。『小田深山の自然』と言う本を見、あまりに専門的なので正直驚いた。まるでダーウィンとウォーレスの日本版ウォーレスだと思った。

フィールドワークをいとわず、やるべき事を黙々とこなす忍耐力と、小さな虫や目に見えない所に心を向けることのできる深い優しき。まるでトトロが人になって現れたように思った。「この人こそ間違いない人」と私達夫婦は直感的に思った。いつの時代、どこの土地にも奇跡的な人が生まれ出てくる。きつと時代が必要として生まれてくる人だと思う。決して楽な生き方はできないが、我慢強く、多くの困難にも負けずに信じる事を貫ける強さを持った人、そんな人がさまざまな事を成し遂げ、人々を導き教える。

私達の森の先生を見つけた。子供達も大好きな虫博士。彼は黙々と森を保全してゆく。ほぼ独りで何でもこなす。子供達には限りなく優しく、森で学び遊ぶことを教え、彼らが自ら求め学び始めるのをじつと待ち導く。自然の動きに敏感な彼の感性は、子供達にも活かされる。

今、山本さんの手で活気づいてきた森の中で、幸せそうな牛ではなく、人がモグモグと口を動かして歩いている。それは間違はなく、私達夫婦の姿。あの時、木立の間に顔を出していた牛は、私達の姿となった。なんて素敵な森だろう。光が射し込み、風が渡り、

木々の香りや音にあふれ、生き物の気配があちこちにある。松の木にかけ上がるリス。一瞬大きなネズミかと思ったが、大きな尻尾がフワフワとかけ上がってゆく。上ばかり見ていると大きな落とし穴。ここの猪は、大きな穴を熱心に掘る。一体何度落ちそうになった事か、力強いものである。森は毎日変化し育ってゆく。子供達と一緒に……。

私に甲斐さん一家を紹介して、鷺野夫婦はさつさと西表島へ行つてしまった。甲斐家に宿泊されるお遍路さん、辰野さん（元「天声人語」のコラムニスト）の紹介を頼つて、知る人として居ない南の島に一歳に満たない長男を連れてゆくのは、一体どんな深い縁であつたのだろう。それにしてもまた、この長男が氣むづかしい赤ん坊で、芳子さん以外は誰も満足に抱かせてもらえない。天音じゃなくて雨音じゃないかと思つたものだ。その子を通しての小さな海辺の村への村入りである。どんなに大変だろうかと心配もした。昔は村の人は子供をとて大切にし、どこの子供も同じように世話をし、叱つた。西表の人々もまさにそうだったようで、子供に随分助けられ、村入りもスムーズにいったと聞いた。今では天音にとつては、第二の故郷。久万に帰つてからも、島に帰るといつては鷺野夫婦を困らせていた。森の保全は山本氏が適任と決まつたが、人間界の方を治めてくれる人が欲しい。私達ではとても「久万に住みながら」というのは無理なので、誰か居ないかと頭を悩ませていた。ふと思いついて西表に電話をかけてみた。愛媛には何時帰るつもりなのか、これからどうするつもりなのか、できれば帰つてきて手伝つて欲しい。西表と別れがたくなりつつあつた矢先に、両親の病氣や第二子に恵まれたこともあり、心が揺れていた。甲

斐さんに相談すると「いつその事会いに行つて、本人達の意味を確かめよう」という事で、三人トリオの珍道中となった。私は始めての西表だったが、甲斐さん夫婦は二度目であつた。三月生まれの義孝氏（愛称パーマン）のバスデイ割引を利用して、関西空港からの石垣行きの直行便に乗るため、松山を夜のフェリーで出発した。松山も大阪もまだ寒く、暖かい衣服を着ていた私達は、南下するにつれて暑くなり石垣空港に到着した頃には、やや汗ばむほどであつた。歩くのが好きな甲斐夫婦は、空港から港までさほど遠くないから歩こうと言う。二度目だから大丈夫と思つていたら、結構な距離があり、暑い暑いと汗をかきかき、バスが通るのを横目にみながら歩くこととなつた。海が近くなるにつれて潮の香が道まで届き、海辺の植物の花の香りが甘くにおい、南国に來たことを教えてくれた。美しい蝶に誘われてふらふらと海辺に出てしまい、疲れて休むことにした。すると二人がごそごそと、服を次から次へと脱いでゆく。なんとズボンの下に防寒用の下着まで着用していた。暑いはずである、真つ赤な顔をして暑がつた理由に思い至り、笑いが止まらない。昼の休み時間を静かに海辺で過ごしていたトラックの運転手さん、うるさかつたことだろう、笑い転げる三人の旅行者に怪訝な顔をして離れていった。ようやく港に着いたが、待ち時間があつたので、公設市場にゆき自分達の食料を買ひ込んで行くことにした。前回行つた時食料品を売る店がなく、困つたと聞いたからである。島の人達は自給自足に近く、コンビニもない。雑貨屋らしきものはあつたが、品物が少ない。なんだか私の実家とそう変わらない。前回訪問した時のエピソードとして、冗談交じりに、天音の落と

した雛あられを、空腹のために奪い合つて食べたことを面白可笑しく話してくれた。公設市場には珍しい魚介類が並び、どうやって食べるのか分からないものもあつたが、色も美しく見ているだけでも楽しい。鷺野家にはないだろうと思われるものを見繕つて出発した。港は賑やかで、すごい勢いで高速艇が出入りしていた。さんご礁のリーフを出ると、すぐに船は揺れだし、外洋であることを思い出させた。天気が良かったから我慢できたが、少しでも荒れたら、ジェットコースター並みの上下のゆれから、横揺れまで存分に味わえる。皆慣れたもので平気な顔をして乗っている。近くになるにつれて、島が大きくなつてゆく。山も高く、入り江も深い。マングローブの森が海に乗り出しとても美しい。リーフの中に入つた途端に、船は静かな海をすべるように港へ到着した。さんご礁の波消しのありがたさをこのとき始めて知つた。車で出迎えてくれた宏君と挨拶もそこそこに、彼の家に案内していただいた。陽子さんは「つわり」がつらく、食事ができず疲れた顔をしていたが、私達の到着と芳子さんの赤飯とに元氣づけられ、楽になつたのか思ひのほか食が進んだ。日に焼けて精悍な顔つきになつてゐる宏君と、彼を信頼して頼つてゐる陽子さんの様子が微笑ましく、ここでの苦勞が二人を本当の夫婦にしたのだと胸が詰まる思いがした。そして心から西表の自然と人々に感謝した。私の信頼する甲斐夫婦に負けない素敵な若夫婦がここにも育つてゐた。人は苦勞することでは成長しない。

短期間ではあつたが、島人になつた鷺野夫婦が案内してくれた御蔭で、旅行者では見られない島の姿や暮らしを知ることができた。マングローブの中を漕いで入り江の奥深くへ

入ると、美しい澄んだ水の中に、たくさん魚影が見えた。はつきり見えすぎて、パーマンの釣り糸にさっぱりかかってこない。海水と淡水の入り混じったところで、一体どんな魚が住んでいるのか分からないが、マングローブの下には、たくさん稚魚が守られるように住んでいた。行き着いたところからカナエをおりて、滝までの山道を歩いた。木の根が生き物のように大地をうねり、何度も足をとられる。特にサキシマスオウの、板のように高さのある独特の根は目を見張らせる奇妙さで、その美しさに特別な木であることを感じた。大人の腰の高さ以上の根つこの丈に、三人とも触ったり並んでみたり感激しきりであつた。森の道は、ふかふかで水分が多く、小さな生き物たちの住処である。水の豊かさや、澄んだ美しさの訳が分かった。それが海を潤し魚を育てる。砂浜も、きめの細かい砂で美しかった。特に月が浜は格別で、対岸のうなり崎からならば、更に一目で見渡せるからと車で連れて行ってもらった。うなり崎というだけのことではあつて、岬の突端に立つて見とれていると、風が急に吹き始め、唸るように通り過ぎてゆく。まるで大きなクジラが呼吸をしているみたいだった。山から入り江めがけて吹き下りてくる、島の呼吸のような息の流れが体一杯に当たり、とても気持ち良かった。さすがのパーマンが「俺はこわいよー」と、そそくさと道の方へ引き返してしまった。島は生きている！

月が浜

まだ西表へ行くことが全く話題にない時に、不思議な夢を見た。満月らしい月夜の浜辺で人々が踊ったり歌ったりしている。小さな無人の、岩肌、松などの植えられた離れ島があり、その周囲を人々が五、六人ずつ小さな丸木船に乗って、歌や鳴り物を打ち鳴らしつつさんご礁の間を上手に進みながら周回している、何かの祭りのようだ。月が美しく、灯りもないのに海がキラキラ光つてとても明るく、神秘的な楽しそうな様子に、目が覚めてから「あー、きつと鷺野さん達は、あんな所に住んでいてあんな祭りをしているんだ」と思った。

西表の月が浜はそれにぴったりの小さな小島を目の前に持ち、以前は満月の夜の祈りの祭りをする小さな集落があったと後で聞いて驚いた。そこに立ってみると、何だかとても似ている。満月の夜にそこに立ってみたいなと思いつつ、きめの細かい、美しい浜に立ち、月が浜の名の由来を考えたりした。今では、聞くところでは、そこにあることかりゾートホテルが建ち、プライベートビーチと化しているという。がっかりしてしまった。願わくばあまり自然を変えずにホテル利用をして欲しい。

昼間の観光で遊び疲れているにもかかわらず、パーマンは、二晩続けて夜のエビ漁に行

くという。さすがに二晩目は三人で行くことにした。出発間際に、陽子さんが物騒なことを言う。「ゆつくりと、ちゃんと道路に人が寝てないか確認してくださいよ。足だけ門から飛び出ているということもあるんだからね!」と言うのだ。「何で?」と聞くと、「泡盛飲んで酔っ払って、門に入った途端安心して足が外に出た状態で寝てしまう人も居るし、道の上で寝てる人もたまに居るからね」と真顔で言う。「本当かなー」と言いつつ三人で浜まで車で五分のところをゆつくりと出かけた。幸い何事もなく到着した。エビ漁は遠浅の砂地の海に入って補虫網のようなもので掬うだけである。網が二つしかないのと、芳子さんは見えないと言って、パーマンと私の二人で漁をした。夜目にも明るい海の浅瀬で、膝まで浅瀬につかってえびの目にライトをあてて、光の反射したのをめがけて、網で掬う。さすがにパーマンはうまいもので、着々とえびを捕まえたが、こちらはさっぱり捕まらない。ピカピカ光っているから懸命に掬うのだが、相手は少しも動かずそこに居るのに掬えない。後で聞いたら何とそれは貝との事、どうりで動かなかったわけである。相手が動かないのに掬えないこの網は一体どうなっているのだろうと、何度見たことか。今となつては笑い話である。芳子さんは傍に生えているモズクを採るのに夢中になつてうっかり深みに足が入り、注意した時にはすでに腰まで浸かつて笑い転げていた。散々なエビ漁だったが、夕食に間に合うくらいの十数匹を釣果にして、たくさんのモズクを持って、三人ともびしょ濡れで帰途についた。海の香り一杯のモズクは、汁物にしても三杯酢にしても大変美味しく、太くてぬるりとしていて食べ応えがあつた。てつきりあれが本当の「美

味しいモズク」と思い込んでいたら、細い方が高値なのだそうでおかしな話である。どおりで沖繩のお店の人に、「本当のモズクはもつと太くて美味しかったのに」と言ったら、おかしい顔をされたはずである。エビは、もちろん生でも火を通して大変美味であった。瀬戸内でもよく見るヨリエビに、大きさも型も似ていた。エビは後ろ向きに飛び跳ねるからその方向へ網を引いて捕まえるという事はその後知った。体験しないとこればかりは分からないなと思った次第である。

ちなみにパーマンは延岡（宮崎）の海辺の育ちなので、慣れたものである。道具えらびから使いこなしまで達人な人で、二つある網の良い方を使つてしっかりと皆のごはんのおかずを漁ってくれた。芳子さんもモズク採りの名人になった。私の手伝いは遊びのようなものだったが、楽しい思い出となった。

鷺野夫婦が何で西表島でなければいけなかったのか、やっと、そこに行つて理解できた。豊かな自然と助け合いの精神「結」の残る島での人々の懐の深さに多くを学んだようだ。人が生きてゆくのに何が一番大切なのかを体験させてもらえたことは、今後彼らを支える大きな柱となることだろう。私達は、主に鷺野家に宿泊していたので、島の人々と直接話す事はほとんどなかったが、陽子さんの先生である石垣昭子さんは、ご多忙な中、竹富島へご招待下さり、ゆつくりと夕食を共にすることができた。懐の深い温かな人であった。織物の研究で、古布の再現を試みられており、成果を挙げ後世の人に残さなければと言ふ気迫に満ちていた。一度舞を舞っているのを見たことがある。地に足がついていると

いのであるうか、能の立ち居振る舞いにも似た優雅な動きと、力強い足裁きで、扇を持って舞う姿は、堂々としていてゆるぎがなかった。人柄も、まさにそのもので堂々として、ゆるぎがない。泊めていただいた、ユタの家は居心地が良くて、とてもゆつくりと安眠できた。何かに守られているような心地よきは、母の腕の中といったらいだろうか。竹富島もまた、小さいけれども暖かな、人の住む土地であった。これだけの人々に教えを受けた鷺野夫婦ならば、大丈夫。きつと由良野の人間界も、島パワーを持つてしっかりと水先案内をしてくれることだろうと確信できた。島の人々には、心から深く感謝をし、由良野がこれからどう成長し、人々と関わっていくのか、見守つてくださるようお願いして帰ってきた。大役を果たしたような気がした。

結び

由良野をやつてゆく上で一番大切なのは人材である。幸いなことに、土地の購入と同時に、それぞれにぴつたりの方がまるで用意されていたように集まつてくる。今考えても不思議だ。飛驒高山で「あぶらむの会」を運営されている大郷さんというすばらしい神父さんがおられる。その彼が由良野に来て言つて下さった何よりもうれしい言葉がある。「一

体どころからこんな素晴らしい人材を見つけてくれたのですか？うらやましいな」。その時、あらためて巡り合いの不思議に深く感謝した。私達の一番の宝、それは「人」。ここに集う人は、持てる力を喜々として提供してくださる。料理のうまい人、子供と遊ぶのがうまい人、楽器で人を楽しませる人、コンピュータで縁の下の力持ちの仕事をあつという間に片付ける人、字のうまい人、何でも喜んでくれる人、手の器用な人、力持ちの人、笑顔の素敵な人、大工さんに車屋さん、パン屋さんにうどん屋さん。由良野に来たら、みんな楽しそうに「放人」されている。

来た時は難しい顔をしていた人が笑顔になり、いつも忙しくて追われるように仕事をしている人が、のんびりとくつろいでくれたら、私達にとつてこんなうれしいことはありません。村を外れて、一本の山道を入り始めたら、日常のあれこれはすべて忘れてください。帰るときには、元気になって帰ってください。そしてまた、由良野に行きたいと思つてくだされば、もうあなたは「由良野」病です。

その人は、青き衣をまといてこの谷に舞い降りてきた。その人の名前は鷺野陽子。

この谷で生まれ育ち更に川上へ嫁いだ私にとつては、大切なふるさとではあるが、どう見ても夢多いとは言えない過疎の谷だ。しかし、彼女はこの谷がすばらしいと言った。

「なんと、トンチンカンな人がやってきた。」と思っていたが妙な魅力で近づいてしまふ。でも、外の世界を知っているながら、「この谷はいい。」と言ってくれることは、とても心地よく嬉しかった

由良野は、実家が養蚕をしていた事もあり子供の頃から知つていながら印象は薄かった。ところが、彼女たちは、この山中に家を建て赤い色をつけた。すると周りの木々が緑に黄色にと輝き始めた。いつのまにか少しずつ私の生活にも色が付き始め、この谷に住む意味や価値がはつきりしてきた

私はきつと、この谷でずっと彼女を待ちつづけていたんだと思った。これからともにこの谷をもつともつと輝かせることになるのだが、それはもう少し先の話……。

おすそわけ野菜市

由良野の森の活動が定期的に行われるようになったある日、彼女から提案があった。「松山から来る人の中に地元の野菜を……と言う声があるので野菜市をしてみないか？」という。確かに農業は盛んで、家では食べきれない野菜も多い。しかも「自分の子供や孫に食べさせるから。」と、減農薬はもちろん、有機栽培や無農薬はあたりまえというものばかり。出荷目的ではないので、形や色も悪いが安全性はもんくなし。数件の農家に声をかけ、野菜市への参加を呼びかけた。参加は七軒。当日は、「ししとう」と「なす」が二袋で百円。「一つ買うとおかずが二品できるから」というおばあちゃんらしいものもあり、新鮮な野菜市は好評だった。

夕方、売り上げたお金を届けると、

「あまっとつたのをおすそわけしただけじゃけん」

と、お金を受け取ってもらえない。でも、長く続く活動にしたいからと、お願いして受け取っていた。このおばあちゃんの心意気は、私自身忘れず活動したい。

私たちの活動の名前を「ふじみね元氣村」とつけてみた。「この谷ならではの文化を守るために、お年寄りに学ぶこと」「今の生活のよさを認め合うこと」などを中心に活動してみたいと思っている。今後の活動予定は「炭焼き」「わらじ作り」「漬物講習会」などなど。

由良野の森を訪れる方々にも元氣のおすそ分けができますように。



セカンドライフ

久万川重広

私こと久万川の由良野との関わりは、私の妻（江利子）が清水先生の病院で働いていたことから始まります。

そこらの話は、先生の本編を参照してください。

久万川さんと私のことを呼ばれるのは、清水先生くらいで後の方々は、「ひげちゃん」とか「くまちゃん」とか呼んでくれます。

私のここでの主な仕事？は、イベントの準備 後片付け などですが、もう1つ由良野に似合わない物の管理があります。

似合わないもの？ ITに関する物の管理が私の仕事です。

ホームページの初期設定 インターネットの回線設定 パソコンの管理 メールの設定 などになります。

由良野にコンピュータは不必要な物のリストのトップ3にランクすると思われる方もおられると思います。

でも、チラシ一枚作成するにも無くてはならず、ここ由良野の今を発信するためのホー

ムページの更新やメールによるコミュニケーションは、無くてはならない道具になっています。

ここで使用されているパソコンやプリンターなどの一部は、昔 企業で使用されていた物や捨てられる物を再利用して使用しています。

今までは、伝票や、決算書など企業経営の為に毎日朝から晩まで働き、そして新しい機器が導入されると道具からゴミに変わる機器たちです。

ゴミとして捨てられ一部はリサイクルされますが、幸運にもここで動いている機器たちは、自然の中で鶯野さんたちとセカンドライフを送っています。

そして、私たち夫婦もまたここで、いろいろな方との出会いや

自然の中での発見を楽しむにセカンドライフを、
楽しみたいと思います。



「由良野と私」（オアシスー由良野）

小倉香代子

珍しく晴れて暖かい二月の昼下がり、二名へ水汲みに行つたついでに、由良野へと車を走らせた。鷺野さん達は留守の様子で誰もいない。芽吹きの前の木々、野山や畑には、まだ色がない中でポツンと福寿草が咲いている。所々に残る雪と雲一つない青空、ときおり聞こえてくる野鳥の囀り、放し飼いの鶏の鳴き声も。「静」、「安」、「穏」などの字が浮かんでくる。充足のひとつときだった。「由良野」、すてきな名前、すてきな所だ。この場所に、ここに集う人達に出会えて、私は幸せだ。

四年前まで、地元にながら未知の所だった。初めて行つたとき、以前住んでいた方的小屋らしきものがポツンとある以外、何もない荒れ山に原野。「えっ、ここに住むの?」「ここで何するの」と夢物語のように思ったものだ。

だが、ゆつくりと少しずつ夢物語は、夢ではなく実話となつていった。西洋の童話に出てくるようなゲストハウス。管理人の鷺野さん一家の家ができあがつた。整地から、建築までの多くを自分達の力でやり遂げたということに驚かされた。二階への階段がなく梯子で上り下りしていたのにもびっくり！（やがて階段はちゃんとついて安心）

建物ができ、「人と自然の共生の場」として清水先生たちの夢の実現へと活動がスタートした。

二〇〇五年三月、桜、梅などの苗木を由良野に集まった人達と一緒に植えたのが、最初に参加した活動である。この木々が生長した由良野の四季を想像すると嬉しくなってくる。その後、自然を知る活動、守る活動、楽しむ活動、親睦を図る活動などさまざまな活動が展開され、いろいろな人々との出会いがあり、由良野の夢は形となってきた。

私が参加した活動を順不同であげてみる。

○子ども達とした木の測定（やはり年、転倒して手首を捻挫し痛い思いをしたな。）

○生の音楽を楽しんだコンサート（毎回違ったジャンルの音楽を目の前で聴くことができ最高だった。夜のコンサートも由良野の秋の夜を満喫した。）

○夏の夜空の下での野外劇や星の観察（寝転んで見た星空のきれいだったこと。由良野がシェークスピアの劇場になるとはー。）

○環境を良くする会の講座（六十人分ほどの料理をしたのに生ごみが茶碗一杯ほどにびつくり、目からうろこの会だった。）

○人間学講座（由良野でしか聞くことができない個性的な先生方のお話に感動！）

他にも、染めもの、カズラの籠編み、親睦の餅つきなど、多様な体験をさせてもらって感謝している。

自分が楽しいことは、他の人にも味わって欲しいと、いろいろな人に紹介して喜ばれてい

る。

ふりかえると、楽しむことへの参加が多いようだ。今後は、楽しむことと一緒に、自然や野鳥、里山で生きる知恵など知る活動にも参加し、すてきな人達にも出会って、元気をもらいたいと思っている。

そして、由良野をまだ知らない人や子ども達に「由良野へおいでよ、元気になるよ」と声をかけたい。

由良野があるかぎり未来は明るい。由良野を支える人達の知恵と力に敬意を表すと共に、微力な私もその末端で一員になりたい。



「由良野の森」へようこそ

甲斐芳子

散歩からみえた命

二〇〇八年三月

久万高原町父野川に住む私は夫 義孝と毎朝我家から玉泉寺ぎよくせんじまでの往復三キロメートル程の山道を散歩している。新聞を玉泉寺に置いて頂いているので取りに行く事も兼ねているが五十分程の山道の登り下りがなかなかいい。

春であれば 枯草の中にふっくらした黄緑色のフキノトウをみつけ「冬を乗り越えたぞ」と安堵する。ウグイスの初鳴きのたどたどしさを笑い乍ら小さな三つ葉を摘む贅沢。

夏は杉木立を抜ける風が汗を吸いとってくれる。ヒグラシ蝉がカナカナと鳴いてくれるばもつと涼しい。

秋には ハタケシメジ ヌメリイグチなどのキノコが出現しキョロキョロし乍ら歩くの



が楽しい。

冬は冷たく刺すような空気に震え上るが雪を冠した山々は神々しく頭をたれると心が透き通る。夫と話し、笑い乍らの三百六十五日。もう二十年続いている大好きな散歩の時間だ。

今年、立春を過ぎてから五日ほど毎日、四、五センチメートル程積もる雪に見舞われた。散歩の山道を通る人は誰もいない。一面雪に覆われ、これから絵を描くまっ白なカンパスのようだ。そこへ夫と私、犬のモモとが点々と足跡を残していく。じぐざぐに歩いたり、後ろ向きに歩いたり、心がくすぐったくなる程弾んでくる。

その山道の中で動物達の足跡に出合った。

タヌキと思われる犬より小さく爪痕がくつきりしたものがウロウロしている。山の方へ谷の方へとエサを求め、鼻をヒクヒクさせている姿が浮かぶ。

「大変だなあー。何か食べ物をみつけたかしら？」と心配してしまう。

道路のまん中にウサギの足跡があった。

本によると山ウサギは飼いうサギより後足が大きく雪の上でも標のようにもぐらずに歩くことができるであつたが本当に大きく十三、四センチもあつた。前足は三センチ位と小さい。

ピョンピョンと勢いよく跳んだのだろう、前足と後足の中が狭い箇所があつた。その先

は、前足が不揃いでゆつくり歩いたり、立ち止まったりしている。

その不安そうな足跡をたどると、なんと我家の畑へと続いていた。

雪の中からとび出している大根の葉を食べたらしい。不安そうだったのは、犬のモモを警戒してのことだったろう。

冬眠をしていない生きもの達は毎日毎日この雪の中、食べものを求めて生きている。

彼等の目的はただ一つ。命を、次の世代へ繋ぐために懸命に生きている。

人間も、然りだ。

今、四月初め、梅と椿が咲き、桜の蕾がふくらみ始めた。

ウサギもタヌキも喜んでいるだろう。

「由良野の森」は このような生きもの達と人間が向き合ったり、並んだり喜びをもらったり、与えたりしながらつくる里山から続く森づくりだと思えます。

きっかけ

きっかけは清水先生がテレビの中の牛と出会った瞬間に生まれました。

ある日先生がテレビを見ていますと、藪の中から茶色の牛がヌーツと顔を出し画面一杯に現われました。

ぬれた瞳、光る鼻、思わず触れてみたくなるほど輝いています。

「おや、今まで見た牛とちがうぞ。」とよく視ますと その牛達はなんと野に放たれ、自由だったのです。

その目、その姿は都会にはないもので、自然の中でこそ育まれた「美しいのびやかな生」を感じました。

その時、

「人と自然とのふれあいが感じられる森づくりができたらいいなあー」と思ったそうです。

由良野との出会い

先生が願っていると 久万高原町出身の大野さんから「久万の二名という所に昔、桑畑だったところが売りに出たんじゃがどういらんかねエー？」「あー、それはいいですね、

います。」と忖える先生。

思う事も願う事も簡単ですが、それを実現化するために全面協力したのが奥さんの美保子さんです。美保子さんの後押しがなければ、何も始まらなかったでしょう。

美保子さんから夫に声がかかりました。

夫と美保子さんとは宮崎県と同郷という事もあり、十年前、鷺野夫妻の紹介で会うなり意気投合し、兄妹のようになりました。それ以来、映画の寅さんのようにいつもバカな事をしては妹に心配をかけている兄貴ですが、由良野の土地の購入に関してはちよつと頑張りました。

美保子さんと先生から説明を聞き、不動産の仕事をしたことがある夫は、久万高原町の土地に明るい友人と由良野を調査し「とてもいい場所だよ。以前私がほれた所だよ」と報告しました。

先生も、夫の話聞き購入する決心がついたそうです。

由良野という土地について、五十六年前にお嫁にこられ現在もお住まいの伊藤のおばあちゃんから、次のようなお話を聞きました。

「由良野は、戦後開拓団が入ったところです。荒れた土地、山林、原野などを切り開い

て有用な耕地にするためです。八組の家族が入植し山林を伐採していききました。若い夫婦も多く大きな夢を持っていたので、太い木も、古い木も、皆で力を合わせて伐り倒していききました。すると、若いお嫁さんが次々と体に変調をきたして床に臥せるようになりまして。「これはおかしい？」と老人達はささやき合い、「病気ではなく何かの祟りじゃ」と感づいたのです。

早速拝み屋さんを招き、その「わけ」を神さまの靈に尋ねてもらったところ、拝み屋さんは四つんばいになり、山イヌかオオカミのように家の中を歩きまわり、腹の底からしぼりだすように答えました。

「この大切な木を、何の断りもなく伐つてしまい、それは、悲しい。どこかに椿の木を植えてくれ！」

入植した人々は、ただ、がむしやらに仕事をし、「この土地の神さまへの感謝の念を忘れていた」と気がつきました。

皆は、心から反省し、椿の木を丁寧に植えて、由良野で暮らせることに感謝しました。それ以後、由良野はどんなよい所になり、桑の木が繁り、養蚕所ができ、よい繭の産地として、日本中にも名がとどろきました。

「椿は聖なる木という信仰がある。魔よけの霊力があるという信仰もある。」

（『世界花の旅』「ヤマツバキの章」朝日新聞社発行 辰濃和男著）

椿

広大な土地が手に入り「何か木を植えたいね」と思い始めた頃「由良野へ連れて行つて！」とある椿が美保子さんに声をかけました。先生宅の近所の方が改築するに当り、庭に植えてあつた樹令百年の椿が伐られる事になりました。それを知つた美保子さんはなんとかこの椿を生かしたいと奔走しました。

懇意にしている植木職人の高橋力彌さんに相談したところ、美保子さんの椿を思う心に動かされ、二つ返事で引き受けてくれました。

ところが移植の日、二〇〇三年一月二十八日、松山は小雨でしたが、久方は二十〇三センチメートルも積もる大雪でした。しかし五本の椿は早朝より職人さん達の手によつて懇ろに掘り起こされトラックに積まれました。四人の職人さんの仕事の段取りも、この日しか空いてないのです。松山、砥部までは、順調でしたが、三坂峠の頂上近くで、難儀しました。

積雪があり、荷が重い所為もあり、タイヤが滑り始めたのです。

美保子さんは雪道の経験があまりなくドキドキしていました。

すると職人衆が車をさっと降り、剛力で後ろから押し始めるとノロノロと動き出し難関を突破し無事由良野に到着しました。

美保子さんは車の中で 皆の一所懸命な姿に感謝と申し訳なさで思わず涙がこぼれました。

その涙を知っているのか、椿さん達は由良野の森の入口にみごとに根付き、今年も美しい花を咲かせています。

トコ

森をつくるとなると、どこへ、どんな木を植えたらいいか素人には見当もつきません。

二十年、三十年後どう成長するのか。

由良野という標高六〇〇メートルには、どんな木が適しているのか？

その時、私達の二十五年来の友人、山本栄治さんの事が思い浮かびました。

栄治さんは、内子町小田に在住で小田深山の自然に魅了され高校時代から三十年近く深

山の動、植物の息づかいをきいています。

二〇〇〇年に発刊された「小田深山の自然」の冒頭に 松山東雲学園長の森川國康先生が次のように栄治さんを称えています。

「国有林の自然林伐採が急激に進行するなか、山本さんは林野庁長官はじめ、松山営林署長、県知事、小田町長などにも 直接自然破壊の阻止を訴え続けられた。

この度の出版は、彼の自然愛の熱意によって、ほとんど一人で採集調査された莫大な標本がもとなり、寝食も忘れて、*「盆も正月もなく」* まとめ上げられたものである。」

二十四年前、夫も栄治さんと一緒に深山スキー場の駐車場を造ろうとしている場所にヒメボタルという貴重種が生息しているので場所を変更して欲しいと小田町長に嘆願に行った事があります。その時の栄治さんは ヒメボタルの化身のようで、ヒメボタルを救うための手立てを数例上げましたが受け入れてもらえず、最後に雌は翅が退化しているために飛ぶことができないので低い木のヤブだけでも造って欲しいと二人で土下座せんばかりにお願いしたと夫は先生に述べました。

先生も「小田深山の自然」を購入し読んで下さっているので「この人は、すごい人だよ。栄治さんにたのもう。」と即答されました。我家で栄治さんに会ってもらうと、栄治さんも先生の意図がよく分かり「願ってもないことじゃ、そんな森をつくるのがわしの夢じゃった。」と大きなお腹をゆらして笑いました。

栄治さんは、心も体も森の精のトトロです。

森へ住む人

栄治さんはウンボを自分の手足のように巧みに使い山道をつけ、不用な桑の枯木を取り除き小さな苗木を目印のテープを付けて植え始めました。ミズキ、ナラ、カシ、ヤマザクラ、ヤマグリなどです。

こんな様子で少しずつですが森づくりの形ができました。

さて、そうすると森の中で遊んだり、一緒に木を植えたりする人々が集う場所が必要になります。

それには、由良野に住んでもらい、人々を迎えてもらう家族が欲しいという事になりました。

すると、美保子さんが「もうすぐ西表から帰ってくるよ。」とニツコリ笑うのです。

西表から帰ってくる家族は 鷺野 宏さん・陽子さん夫妻と天音君とお腹の中の赤ちゃんの四人です。夫が兄貴分なら宏さんは美保子さんのできるいい弟分です。

阪神大震災の時、宏さんはボランティアで被災された方のお手伝いに行っていました。

先生と美保子さんは医療のボランティアで神戸入りしており、よく働く青年、宏さんが

目に止まり、話しかけたのです。宏さんと先生夫妻は松山へ帰ってから交流が続く、お互い大切な友人となりました。

それから宏さんは陽子さんと結婚し、一年半後、二人は西表島に渡りました。宏さんは大工の見習いをしたり、陽子さんは石垣昭子さんに織物の技術を教えてもらったりして、西表で四年間暮らしました。

彼等がひと通り技術を身につけたところへ先生と美保子さんからの依頼が入りました。鷺野夫妻は先生夫妻の考えに賛同したのと今まで学んだ事が由良野という場所で役立てる事ができるような気がしたのです。

二〇〇三年九月三日、お腹の赤ちゃんが産まれました。あの元気な瑞月君です。

二〇〇四年からゲストハウスの工事が始まりました。

宏さんはゲストハウスを造るに当たり、地球にも、人間にもよい建築材や塗料を捜し求め、明るく、快適な家ができました。

私達が宏さんと陽子さんと知り合ったのは、一九九七年です。命を支える食べ物が安心できるものを頂きたいと私達が加入している有機農産生協へ紹介して欲しいと訪ねて来ました。

その時、私は風邪をひき床に着いておりましたが、夫が「すごくいい二人だよ。生協さんの事を聞きたいんだって。」と呼びにきました。私も会いたくなりなんとか起きて行きました。

すると、やさしそうな宏さんと爽やかな陽子さんが「大丈夫ですか？　こんな時にごめんなさい。」と遠慮がちに労りの言葉をかけてくれました。

すると何分か話すうちに、私の体の中に変化が occurred しました。心が澄んで明るい光がさし、心地好くなりました。別れる頃にはすっかり元気になってしまいました。

それ以来、心に生まれる様々な悩みを話し合えるようになりました。不思議な力を持っている二人は掛け替えのない友人です。

自然に逆らわず誠実な家族が由良野の管理人になってくれました。

森の神さまも喜んで下さったと思います。

由良野の森へようこそ

「自然には人間以外にもたくさんの命があります。近代の考え方は、そのたくさんの命を軽視して、人間だけが偉いものだという。ほかの命は人間の利益のために滅ぼしても構わないのです。そういう考え方を変えなくてはいいけない。人間以外のたくさんの命と共生するってはいけないという時代にきたわけです。」

これは、梅原 猛さんが「少年の夢」の中で語られた一節です。（平成六年）

清水先生のおもいと一緒です。

ここまで、由良野の森ができるまでのほんの一部を書かせて頂きました。

年数にしますと二〇〇三年から五年間のように思いますが、清水先生が医者になってから三十年近く「大勢の人のためになにか役に立ちたい。」とずっと願っていた熱いおもいからはじまっています。

そのおもいが沢山の人の協力と支えによつて由良野の森ができようとしています。

人間と自然がふれあえる調和のとれた森づくりへ参加されたい方は、どうぞおいで下さい。
い。

「由良野の森へ ようこそ」とお待ちしております。

おわり

謝 辞..

序文を書いてくださった、前父二峰診療所所長の玉木芳郎先生に深謝いたします。先生は診療所所長を退かれましたが現在も週二回診察にあたられ、町民に本当に頼りにされています。そして、二名に、きのご観察会の人たちと一緒にきのご標本展示館をつくられ、一般の方に開放されています。また、当初より会計を担当してくださった福水一光さん、監事の宮内一さんに御礼を述べたいと思います。由良野の森で、劇団ヴォイスの演劇「真夏の夜の夢」が上演された時に、宮内さんと「かき氷」作りをした事をなつかしく思い出します。久万高原町在住のコンピュータ技術者久万川重広さんには、由良野の森でのさまざまな活動に大きな協力をいただいております。奥さんの江利子さんも会計の仕事をしてくださっており、感謝しています。

素晴らしいイラストを描いてくれた瀬川享治さんは、ご自分も由良野の森の行事に子供さんの竜平君と参加されて楽しまれており、私の無理な願いを快く引き受けてくださいました。ありがとうございます。「由良野の森」の建物の配線に多大の配慮を頂いた瀬戸電設の松田貞夫さん、桜や梅、杏の苗木の手配をしてくれた溪

流釣り名人高橋力弥さん、ゲストハウスに造り付けの本棚を寄付してくださった白菊木工の大田菊則さん、テーブルを作ってくれた甲斐工房の木地師甲斐義裕さん、炭を利用して水と土地の浄化をしてくれた電子技法の猪谷保富さん、そのほか多くの方々にお世話になりました。改めて、この場を借りてお礼を申し上げます。最後に、創風社出版の大早友章さんに感謝の意を申し上げます。ありがとうございます。

「由良野の森」ホームページ <http://www.yuranonomori.jp/>

執筆者プロフィール

玉木芳郎

一九三六年生まれ、田舎の人と自然の生き物が好きな七十才を超えたもと外科医です。きのこや猪など料理するのが趣味。

清水秀明

大学の原子力工学科を卒業後、医学の道へ。消化器内科が専門ではあるが、漢方やアーユルヴェーダなどの伝統医学にも興味を持っている。光明クリニック院長。

鷺野

宏

一九六八年愛媛県松山市生まれ。会社勤めの後、カナダ・インド等へ。

一九九五年震災後の神戸元氣村で活動後、高知県四万十川で仲間とカヌーガイドを立ち上げる。結婚後、長男が一歳の時沖繩西表島に移住。二〇〇三年縁あって、久万高原へ。

現在、由良野の森管理責任者。夢は日本に「平和省」をつくること。

鷺野

陽子

一九六三年大阪生まれの神戸育ち。オーストラリアで終末期看護を学びながら約五年暮らす。高知で緩和ケア病棟立ち上げに関わり看護師として働く。四万十川で出会った縁で結婚。

長男を自宅出産後、西表島に渡り、染織を学ぶ。

現在は由良野の森で染織工房をはじめ、発見の毎日を楽しんでいるところ。

二児の母。子育て真つ最中。

山本

栄治

昭和三十二年生まれ。森林動植物、自然環境に配慮した「生態・土木」の調査と提案、環境教育を実施する。内子町在住。

清水美保子

昭和三十四年生まれ。宮崎県都城市出身。九州がんセンター付属看護学校卒業後、看護師として勤務。現在光明クリニックで人間修行中。

上本 恵里

久万高原町父二峰地区で生まれ、育ち、結婚する。

農業と里山をこよなく愛す三児の母。

恋し結婚し母になったこの谷でおばあちゃんになりたいと願っている。由良野の森からパワーをもらい、成長中。

久万川重広

コンピュータ技術者。久万高原町在住。

小倉 香代子

昭和十八年二月二十六日生まれ

三十八年間の仕事人間から五年前自由人に。

余生を楽しむようにしています。

甲斐芳子

一九四七年福島県生まれ。

東京で三十年暮らした後、一九八二年愛媛へ。畑を耕し漆を塗る日々です。

由良野の森

2008 年 12 月 25 日発行 定価*本体 1200 円+税

編著者 ゆ ら の

連絡先：愛媛県上浮穴郡久万高原町二名乙 787-13

TEL. FAX. 0892-21-8076 ゆらの事務局

発行者 大早友章 / 発行所 創風社出版

〒791-8068 愛媛県松山市みどりヶ丘 9-8

TEL. 089-953-3153 FAX. 089-953-3103

振替 01630-7-14660 <http://www.soufusha.jp/>

印刷 榊松栄印刷所 / 製本 榊永木製本

©YURANO 2008

ISBN978-4-86037-116-6



C0036 ¥ 1200E



創風社出版・定価(本体1200円+税)

